

永正十三年正月二日

永正十六年

二月廿五日

國司右京亮殿

興元 御判

一五〇

〔國司家系圖〕

有相助六、右京、飛驒守、毛利弘元、同十三年、藝州甲立之城主
興元幸松丸元就奉仕四代

〔萩藩閔閱錄〕

粟屋勘兵衛

二月廿四日、於甲立合戰之時、太刀打、其證爲顯然、神妙之至也、彌可抽忠勲之狀如件、

永正十三年

二月廿五日

粟屋助四郎殿

興元 御判

〔桂文書〕

○京都帝國大學所藏

桂三郎太郎殿

興元

二月廿四日、於甲立合戰之時、太刀打、其證爲歷然、尤神妙之至也、彌可勵忠功之狀如斯、

永正十三年

二月廿五日

桂三郎太郎殿

興元(花押)

粟屋元重
ノ戰功

桂三郎太郎
ノ戰功

松尾要害
ノ戰死
粟屋元忠

甲立五龍
ノ戰功
井上光俊

〔萩藩閔閱錄〕

粟屋七郎右衛門

於上庄松尾要害尾頸抽戰功、其行裝無比類、剩討死、感志之至、不知所謝候、仍一行如件、

永正拾三年 丙子

二月廿九日

粟屋彌六殿跡

興元 御判

粟屋備前守元秀次男
粟屋彌六元忠

於上庄松尾要害尾首、永正十三年二月廿九日討死、

〔萩藩閔閱錄〕

井上作左衛門

去三日、於甲立五龍面太刀打高名、恰越群輩、神妙之至也、彌可抽忠勲之狀如件、

永正十三年

五月十五日

井上小三郎殿

興元 御判

〔萩藩閔閱錄〕

八十四
兒玉彌七郎

永正十三年正月二日

一五一

兒玉元爲
ノ戰功

永正十三年正月二日

一五二

去三日、於甲立面太刀打、負痛手、抽戰功之次第、太以神妙之至也、彌可勵忠功之狀如件、

永正四年

五月十六日

興元 御判

兒玉八郎左衛門尉殿

〔萩藩閱録〕

六十九 兒玉四郎右衛門

今度至五龍相動之刻、甲立衆與合戰之時、於河中討太刀候、高名之至、不及言語候、感悅候、猶以可抽忠節者也、仍感狀如件、

年號月日御判無之、

興元

兒玉左衛門三郎殿

〔萩藩閱録遺漏〕

四ノ一 伊豫八幡宮神主河野肥前守

去十七日、於橫田松尾要害麓合戰之時、打太刀、剩被疵云々、誠神妙之至也、向後彌可致忠功之狀如件、

永正十三年

七月廿一日

興元 御判

河野左近大夫殿

松尾要害
麓ノ合戰
ノ河野春重
ノ戰功

兒玉元保
ノ戰功

豊原統秋

右壹通

五日、幕府筆始

〔殿中申次記〕 正月五日、

永正十三年

一御太刀 一腰金 年始御禮

〔豊原統秋〕
豊筑後守

一御太刀 一腰持 同儀ニ付

同

一御太刀 一腰持 同儀ニ付

同

一御太刀 一腰持 同儀ニ付

御隨身 調子

七日、幕府吉書始

〔殿中申次記〕 正月七日、

永正十三年

一御太刀 一腰持 御吉書

細川(高國)
右京大夫殿

○薩摩守護島津忠隆ノ吉書、便宜左ニ合致ス、

〔前薩藩舊記雜錄〕

四十二 調所氏譜恒房傳

永正十三年丙子正月二十日、留守所

下政令三章於諸鄉院如例、

〔前薩藩舊記雜錄〕

四十二 調所文書

留守所下

諸鄉院

永正十三年正月五日 七日

一五三

細川高國
太刀ヲ進

島津忠隆
ノ吉書

永正十三年正月七日

仰下

參箇條

一五四

佛神事ノ
勤行

一可任例勤行佛神事等事、

右治國之法、佛神事爲先、尤致禮、具可勤行、

一可修固池溝築堤事、

右初春要、池溝堤爲宗、尤可修固、

一曳殖苧桑漆等事、

右治務之道、苧桑漆爲要、尤可曳殖、

以前參箇條、任下知之旨、可致沙汰狀如件、

永正十三年正月廿日

大中臣篤則

權大掾(花押)

赤松義村、幕府ニ、年始、垵飯ノ禮物ヲ進ズ、

〔殿中申次記〕 正月七日、

永正十三

一御太刀 一腰持

御馬一疋

年始之御禮、
垵飯御禮、

赤松兵部少輔

○諸家、諸社寺等、幕府ニ物ヲ進ズルコト、便宜左ニ合致ス、

〔殿中申次記〕 正月八日、

神護寺

永正十三
一久喜二桶

高雄山
神護寺

例年進上之、

若王子

一土筆一折

青海苔一折

山芋一折

若王子例年進上之

狩野元信

永正十三
一御扇一本

爲御嘉例進上之、
仍御太刀被下之、

狩野大炊助

藤波伊忠

永正十三
一御祓

(藤波伊忠)
祭主

同造宮司

興福寺東
北院

永正十三
一御樽三荷

蜜柑二籠

串柿三連

例年之
義也

南都東北院

宇治大路
三郎

永正十三
一久喜二桶

梅漬一桶

梅剝一桶例年進上之

宇治大路三郎

細川高國

永正十三
一御盃臺二

白鳥一

鷹二

鯛十

鯉一

細川

貝炮一折

柳十荷

大内義興

一御太刀一腰持

同

同

同

大内左京大夫

大館晴光

一御卯杖二

大館上總介

嘉例進上之、

永正十三年正月七日

一五五

永正十三年正月七日

一五六

十七日、
永正十三ヨリ十八年マテ同前、
一御太刀一腰金

鯛廿枚進上之、
例年之義也、

十八日、

一圓鏡一面 久喜二桶
自永正十三到十八年同前例年進上之、

宇治
放生院

放生院
妙蓮寺

一御扇一本

杉原十帖自永正十三到十八年同前

妙蓮寺

十九日、

一御幣參

如例年役之、

伊勢又七

本能寺

同日、

一御扇一本

杉原十帖

例年
本能寺

晦日、

一御足袋三足、

染革三枚
自永正十三到十八年、例年進上之、御足袋革三枚共在之、

細川右馬頭

一御扇一本

自永正十三到十八年、

土佐刑部少輔

一同

同前

栗田口民部丞

栗田口民部丞

土佐光信

細川尹賢

二月朔日、
永正十三
一千疋

右京大夫殿

自永正十三至十八年、

島山植長

筒井順興

佐々木四郎三郎

近江善智院

一同 次郎殿

例年進上之、

一御太刀一腰持

年始之御禮

一餅廿

例年進上之、

一餅二籠

例年進上之、

一生成三十

例年進上之、

筒井(順興) 自永正十三至十八
如此、式日敷

佐々木四郎三郎

高島
善智院殿

佐々木四郎三郎

土岐政房

〔足利家御内書案〕

爲年始之祝儀太刀一腰持、馬一疋、鵝眼三千疋到來、目出候、仍太刀一振 一文遣候也、

永正十三
五月

貞陸御調進

土岐美濃守とのへ

〔親孝日記〕 六月十日、

一佐々木中務少輔入道宗意、初瓜進上、

一細美五端并、圓座廿枚進上、

一御私の細美二端被進之、以淵田與五郎殿中へ被參、御申次(伊勢貞陸)右京亮殿、略中

一公方様の初瓜一籠、細美五端、圓座貳拾枚御進上之旨、致披露候了、尤以珍

永正十三年正月七日

一五七

京極高清

永正十三年正月七日

重候、恐々謹言、

六月十一日

謹上 佐々木中務少輔入道殿

伊勢守貞陸

一五八

一誠其後者 不申入候、背本意存候處、御札拜見、畏入候、仍細美貳端令拜受候、御懇志尤以畏悅千萬候、旁猶期來信存候、恐々謹言、

六月十一日

謹上 佐々木中務少輔入道殿

廿三日、

一上池院より妙香圓百粒被進之、以□御祝著被仰也、次□

書申□者也、

七月、

一宍道兵部少輔殿年始之御禮御申候、御太刀殿中へら、御馬代三百疋、御倉請取在之、御披露、御返事親順調進、

一佐々木中務少輔入道殿江瓜百籠進上、同三十疋貴殿へら、御披露、御返

事

上池院
宍道兵部少輔
京極高清

一乘院良譽

〔後法成寺尙通公記〕八 十月六日、甲晴、略中從一乘院、壺大樹へ被進之、相叶上意、御祝著云々、

八日、庚寅太元護摩ヲ修ス、

〔續史愚抄〕四十四後柏原院中 正月八日、庚寅太元護摩始於小御所、阿闍梨權僧也、如恒、

正宗永二水記抄、

十四日、丙申太元護摩結願抄、太元

〔宗典權僧正注記〕五十三實院文書 同十三子年、太元伴僧大藏卿、延命院法

眼、仙耀律師、

九日、卯辛近衛尙通、物ヲ獻ズ、

〔後法成寺尙通公記〕八 正月九日、卯辛晴、小雨下、中兩種二荷禁裏へ進上

之、御祝著之由、有御返事、

十二日、甲晴時々雪散、略中從禁裏雁一被下之、

○畠山植長、物ヲ獻ズルコト等、便宜左ニ合敘ス、

〔殿中申次記〕 正月十四日、

永正十三年正月八日 九日

一五九

結願
伴僧

阿闍梨理
性院宗永

上醍醐
テ御越年
近年ノ例
御返禮

畠山種長
ノ獻上
ヲ通松茸

(永正十三年)
同禁裏様へ參
一 御折十合 柳十荷

畠山(種長)
次郎殿

〔後法成寺尙通公記〕八 九月十三日、辛卯晴、禁裏^ハ松茸一折進上、
十日、壬辰近衛尙通、禁裏及^ヒ幕府ニ參賀ス、

〔後法成寺尙通公記〕八 正月十日、壬辰朝間晴、從巳刻風雪頻、早旦令參賀、其

次^ニ參内、

○三寶院義堯、興福寺一乘院良譽、幕府ニ參賀スルコト、竝ニ諸家年賀
ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔永正十三年記〕八〇後鑑二百 正月、門主於上醍醐御越年、八日、武家へ御參

賀之間、七日御出京也、近年如此也、

八日條云、御參賀、御對面已後、以伊勢兵庫、今少可有御座之由被仰出、諸家對
面之後、重而又有御對面、御一獻被參ト云々、其後御コキノコ十計、御扇二本
カノ相アミ被進了、御退出之後、則以少納言、上座御祝著之由被申入候處、又
來十三日御能サセラルル間、可有御見物之由被仰出了、御棧敷被打之間、御
座所以下之儀、重而可被申入候由也、○義種、猿樂ヲ行フコト
本月十三日ノ條ニ見ユ、

〔後法成寺尙通公記〕八 三月十二日、巳癸晴、從南都有注進之儀、一乘院參賀

三寶院義
堯幕府ニ
參賀ス

一乘院良
譽附弟覺
譽ト共ニ
上洛ス

幕府ニ參
賀ス

事當月寺役有之候間、來月早々可上洛、遲怠迷惑之由、心得候て可披露、種村

三郎方へ被遣書狀之處、致披露、被成被成御心得之由有御返事、此旨申下了、

廿九日、庚戌晴、○中從南都來月三日可上洛之由、被申上之、

四月一日、壬子晴、○中從一乘院荷物少々被上、來三日必可有上洛云々、

四月、乙卯晴、一乘院小童上洛、一荷兩種百疋門主、(白墨)五荷三種小童、門主北政所一

荷兩種、

五日、丙辰晴、(冷泉)民部卿入道、飛鳥井亞相等、門跡^ハ申禮、勸一盞、

六日、巳丁晴、心中念誦如例、今朝參賀、大樹五合五荷被進之、小童同參賀、進太刀、

金、即被對面被仰成人之由云々、

七日、午戊晴、門主被行入江殿、二種二荷被進之、小童令同道、正受寺被歸、

八日、未己晴、○中種村三郎來、門跡^ハ御禮也、一門被行大祥院、

十日、酉辛晴、及晚小雨洒、○中廣橋來、令對面門主御樽被遣之、其御禮也、一門被

行鷹司^ハ、一荷食籠一被遣之、

十一日、戌壬晴、入夜雨雹下、雷鳴、五六十年以來未聞次第云々、○中一門慈照寺

二荷兩種被遣之、有一獻云々、

永正十三年正月十日

一六二

近衛第參
賀者

相阿彌

細川澄賢

陳祖田

〔後法成寺尚通公記〕八

正月一日、癸未、晴陰、天顏快然、富貴萬福、幸甚々々、武

者小路一品侍從三位光繼朝臣、季富等於前給一獻、如例年、宮兵部少輔、同備

中、相阿、能勢、飯河、井上又五郎等令對面、勸一盞。
二日、甲申、晴、朝間陰、小雨濺、長泰朝臣兩種一桶進上之、如例年於前勸一盞、御大

工如例年於庭上令對面、給一盞、檀昏扇等俊泰朝臣妻女一種一桶持來、於前
給一獻、田邊孫三郎來令對面、
三日、乙酉、雪降、武者小路一品以下來、
四日、丙戌、雪下、和泉守護中山宰相中將右衛門督富永孫六、有本四郎等有

春等來、令對面、勸一盞、入夜齒固從德大寺來、
五日、丁亥、晴、上杉右衛門佐、堀川判官、調子式部丞、伊勢兵庫助、同左京亮、一色兵
部大輔等來、令對面、勸一盞、
六日、戊子、晴、心中念誦如例、在重卿、種村刑部少輔、吉見民部少輔、桃井次郎、阿野

侍從、清法印、杉原等來、令對面、勸一盞、
七日、己丑、晴、武者小路一品以下來、帥中納言、勸修寺中納言、烏丸中納言、山
科中將、滋井中將、陳外郎、五種、持參、小泉、今井、飛鳥、井大納言、藤兵衛佐、頭中將、

畠山順光

聖護院道
增

細川尹賢

尚通ノ往
賀

上野遠江守、同大郎、齋藤甲斐守、畠山式部少輔、前典藥頭親就朝臣、飛鳥井少

將、井上中兵衛尉等各令對面、勸一盞、

八日、庚寅、晴、聖護院、百疋、御靈殿、大祥院、繼孝院、上乘院、岩坊、尊勝院、岩西院、細川

右馬頭、海藏院、松梅院、平野神主、吉阿、伯中將、不斷光院、智惠光院、玉蓮寺、淡路
伊豆入道、劉首座、龍泉院、法成院、極樂寺、重阿等來、各令對面、勸一盞、
九日、卯辛、晴、小雨下、德大寺女中、今日始被來、有三獻之儀、被入風呂、二色二荷被

持來、風呂初也、風呂以後有夕飯、齋藤次郎左衛門尉、隆本寺來令對面、勸一盞
十日、辰壬、朝間晴、從巳刻風雪頻、次曇花院、入江殿、光稱院、御靈殿、大祥院、新
造等罷向也、各被勸一盞、留守ニ來、人々、玄清、松木中將、高辻中納言、五條宰相、

庭田中將、正親町宰相中將、持明院中將、典藥頭、高倉中將、大外記、師象朝臣
施藥院、大勝院、千本左馬頭、中御門中納言、姉小路前宰相、同息、濟俊、去年元服
云々、○濟俊、元服ニルコト、十二年始來間、余亦令對面、勸一盞、三上民部卿、新

藏人、淨土寺、二種二荷被持來、有三獻之儀、三位、治部卿兩人給一獻、留守ニ來
方、亞相被對面、給一盞云々、
十一日、巳癸、晴、時々雪飛散、○勸修寺子、左衛門佐政豐、民部卿、沼間右京亮、覺勝院、淡路

永正十三年正月十日

一六三

竹田定祐

千秋萬歲

宗碩

細川高國

義種春日
御師等日
太刀ヲ與

永正十三年正月十一日

一六四

去年元服始來

治部少輔町野將監竹田法印

百粒持來三結城景左衛門尉

各令對面

勸一盞

十二日甲晴時々雪散冷泉宰相一牛齋松田丹後守千秋刑部少輔五辻下津屋修理亮長野布施等來令對面勸一盞

十三日乙晴千秋萬歲來如例年給祿平松宰相入道清少納言加治左京亮宗碩林筑前入道同修理進春光師弟子備後兩種等來令對面勸一盞

十四日丙晴吉田侍從大勝院松田對馬頭上池院法印等來令對面勸一盞

十五丁晴小雨濺廣橋中納言諏訪左近大夫宮下野守時元宿禰細川右京大夫等來余竝亞相北政所被對面勸一盞

十一日幕府祈始

〔殿中申次記〕正月十一日

一御太刀持被下 春日御師

一就御祈始御太刀持被下 千秋刑部少輔

一就同儀御太刀持 在重有春被下之

○近衛尙通第祈始ノコト便宜左ニ合致ス

〔後法成寺尙通公記〕正月十一日癸晴時々雪飛散理覺院如例年爲御祈始來先撫物遣有春許歸參令出座余竝亞相令對面於陰有一獻

近衛尙通
第祈始

〔後法成寺尙通公記〕

正月十一日癸晴時々雪飛散理覺院如例年爲御祈始來先撫物遣有春許歸參令出座余竝亞相令對面於陰有一獻

十六日戊晴時々雪散不斷光院爲祈禱來令對面勸一盞

幕府普請始及ビ事始

〔殿中申次記〕正月十一日

一御普請始御事始在之

一御太刀一腰御普請始御禮

一御太刀一腰就御事始之義御禮

城勘解由左衛門 宮下野守 松田丹後守 齋藤美濃守 齋藤上野介

右役者各進上之

十二日甲足利高基相模禪興寺再興ノ功勞ニ依リ僧貳ヲシテ大勸進職ヲ安堵セシム

〔古今消息集〕十

禪興寺事年來以功勞寺家再興誠感悅候然者如先規大勸進職之夏領掌尤候次寺領等之事於已後其他望不可有之候委細德落軒可被申遣候恐々謹

永正十三年正月十二日

一六五

畠山種長
進等太刀ヲ

今後寺領
等ヲ望ム
ベカラズ

永正十三年正月十三日

言

永正十三丙子
正月十二日

僧祇首座

高基(花押)

一六六

○足利政氏、禪興寺ヲ再興セントシテ、寺領ヲ還付シ、前建長寺住持英
璵ヲ大勸進職ト爲スコト、六年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

十三日、秘義種、三條高倉新第二猿樂ヲ興行ス、

〔永正十三年記〕

八〇後鑑二百

八日

條云、〇中略、三寶院義苑、幕府ニ參賀ス

ム、又來十三日御能サセラルル間、可有御見物之由被仰出了、御棧敷被打之

間、御座所以下之儀、重而可被申入候由也、

〔武雜禮〕

八〇後鑑二百

於三條御所

正永正十三

御能_{三寶院義苑}在之、在京之面々等も十

合十荷、御供衆美物進上、御通之次第、一番ヨ申次、攻衆、走衆、二番ヨ申次、攻衆
まゝ、三番に申次、攻衆、走衆、度々走衆參事不審之沙汰あり、依上意籠中より
被召出事有間敷事也、然ヨ翌日、被對貞遠、御あやまヨ乃よし被仰聞也、宮
兵ニ更ニ可被受用せめニ被仰出候由上意なり、

〔永正十三年記〕

八〇後鑑二百

門主武家御參

御服御織物御水干也、御供衆

諸家ノ進
物

三寶院義
苑等見物

大貳法橋、大藏卿寺主兩人、御力者四人歟、御棧敷一間之内、當門跡、ハンセウ
軒御師、弟子院領祇候ト云々、其外御棧敷三四間被打、御比丘尼御所達御座
歟、一向御前へ者門跡無御參ト云々、御一獻御棧敷へ被參、御配膳公方之御
供衆沙汰ト云々、尤時宜珍重也、宗珍被談云、照禪院殿之御童體之時歟、細々
御能ニ御參、其時モ御棧敷別ニ被構御見物ト云々、時同御棧敷之内ニ、先公
方未_(香殿)キヤウケン院殿ニテ御喝食之時、同御座也、其時御一獻、御配膳之事、御
供衆ヲ被分可令沙汰之由、故伊勢守貞親被申候處、御供衆別ニ御棧敷ニ可
參事迷惑之由、種々及異亂了、貞親漸思案、三寶院殿御連枝也、其外キヤウケ
ン院殿御座之間、御供衆列誰人御配膳可被申哉、雖然別ニ御棧敷へ分參事
迷惑之由、是又其理也、所詮彼門跡之坊官衆ヲ被召出、於御棧敷可被召使候
由、異見被申了、仍宗珍、民部卿ニテ、兄弟御供也、大藏卿寺主經光、民部卿寺主
宗親、兩人御棧敷ニ祇候、御配膳沙汰ト云々、其後モ又一兩度如此也云々、今
度公方之御供衆、御伴膳沙汰之間、是尤可然、珍重々々、

十四日、幕府一獻始、

〔殿中申次記〕 正月十四日、

永正十三年正月十四日

一六七

公武ノ進
上物

三寶院義
堯

大内義興

伊勢貞陸

細川高國
惣檢校平
家ヲ語ル

永正十三年正月十四日

同
〔永正十三年〕

一 公家 御供衆 申次 攻衆 走衆

就一獻始之義、各御太刀進上之、

同 一同義、公家衆御供衆、申次奉行衆、御美物二色宛進上之、

同 一 御折五合 御樽五荷

同 一 御折十合 柳十荷

同 一 御折五合 柳五荷

十四日、

同 一 御盃臺二 美物五種 柳十荷

〔細川高國〕
右京大夫殿御進上之事、

同 一 惣檢校懸御目、平家申之、

幕府三毬打、尋デ、又之ヲ行フ、

〔殿中申次記〕 正月十四日、

同 一 左義長 一本 囉申之、

十五日、

同 一 左義長 五本囉申之、被御覽、仍御太刀被下之、

十八日、

義植見物

延臣諸將
等太刀ヲ
進ズ

同 一 三木丁 囉申之、

十六日、戊戌踏歌節會ヲ停ム、

〔續史愚抄〕 後柏原院中

正月十六日、戊戌、無節會、〔永正十三年〕

十七日、幕府的始、

〔殿中申次記〕 正月十七日、

同 一 同御太刀 一腰 金 鯛廿枚進上之、例年之義也、

一 御的始在之、仍御太刀、金糸、公家少々、大名、外様少々、御供衆、申次、當番衆、御的奉行等進上之、

正月十七日、淡路殿より御弓二張參候、御弓八袋、御矢ハ筒ニ入てかいそへ、持を候、庭上へ申次罷出候處、使ウシニ満置あら、袋共よかいそへ、乃手より執て、さて取出し、二張ひとりの渡候を、いゆを此ことく請取、左の手よたて候て持候、扱又矢筒をかひそへ、乃手より取候ていとし、二手あら一ツは渡候時、出をを乃、左の手乃下、右乃手ふて取候て罷立也、弓袋矢筒ハ使と置てかへり候、

〔朱書〕伊勢守貞陸也、
此條、勝蓮院自筆を以て加書之、

永正十三年正月十六日 十七日

永正十三年正月十八日

永正十三

御ゆゑけかゝ

御ゆゑけかゝ

御太刀一腰 金

御弓二張 被下之刀

御弦廿張 被下之刀

御弓二張 御手之矢

御挿物在之

御太刀 金 一腰 就御挿物後、於

同 御所被下之

同 仍就御義進上之

御供衆以下祇候之者、各御太刀進上之、

自永正十三到同十八年同前

十八日、

一御的射手六人、御盃并一重宛被下之、

十八日、御三毬打、

〔拾芥記〕下 正月十八日、禁裏御三毬打、爲康一本進之、

小笠原又六

伊勢左京亮

八幡田中

弓細工

弦懸塙

細川彦四郎

小笠原又六

同

射手ニ盃并ニ一重ヲ與フ

五條爲康三毬打ヲ獻ズ

撫物及ビ劍ヲ渡ス

讀師三條西公飛鳥 講師飛鳥 井頼孝泉 發聲冷泉 爲廣 御製披西實 隆三條

義植、細川四郎ヲシテ、石清水八幡宮ニ代參セシム、

〔殿中申次記〕正月十八日、

永正十三

一八幡御代官參、

仍御撫物、御劍、今日被下之、

細川四郎

十九日、

一八幡へ御代官歸參、御盃、御太刀拜領之、

同 御太刀一腰、金、始御代官參御禮、

細川四郎

十九日、和歌御會始、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文 永正十三年正月十九日、御くゞい

そしめ、やふ大納言、小くら、北野のやふ、頭中將のやういしういさんと

くし三條ふし、ううしよりあり、そつせいとんふ卿入道、ひううの人數とん

ふ卿入道おやこ、うんろし、中の御らと、そうしやう、下のきんせい、まさつあ

のあそん、そのやうひひううの人をよてあし、御せい此時きん内ふひうう

あり、御さてありて五こん、御むらひありてらり、あそり舟より二色二うあ

いる、三こんく御の御しやく、五こん中つうさの卿宮御しやく、御せいせん

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

一七二

そち御てあり頭辨宮(甘藷寺伊長(知仁親王))の御うさよりのやくそうくら(山科言朝)のうと庭田中將(重親)ぞう

〔續史愚抄〕

集、實隆

後柏原院中

正月十七日己亥和歌御會始、題柳辨春、集、柏玉、臣

〔增補和歌明題部類〕

一首通題 柳辨春 永正十三正

〔永正御月次和歌〕 永正十三年正月十九日、

柳辨春

御製
三條西實隆

うちあひくみとりやまひ青柳のえとよ花の春乃そめりう勢集○柏玉

正二位實隆(三條西)

時のいまみとりの糸袂くりうへし千世を經ぬへ支春の柳集○雪玉

沙彌曉覺(冷泉政爲)

花をまをのき時めく青柳の糸より見ゆる千世の春風

沙彌宗清(冷泉政爲)

くりうへしいく春そめんさを姫のおろの色袂青柳のいせ納言爲

同爲廣
冷泉政爲

飛鳥井雅俊

權大納言藤原雅俊(飛鳥井)

吹うせもおさまれる世袂白露のひりりよえりく玉柳うれ

正三位藤原濟繼(姉小路)

春の色袂をのれあるしも青柳の陰よりなひく風の姿卿○濟繼

同

○二月以後ノ和歌御會及ビ諸家和歌會ノコト等、便宜左ニ合致ス、

〔永正御月次和歌〕

永正十三年二月御百首 勅題

立春

たさまれる世のこゑよしと山のおともあらしも春やとつらん集○柏玉

見月

松ををらぬ秋うせとろくそめ夜よ見る一きへのほさる月うれ集○柏玉

にフふくる夜ル

寄浦戀

な袂さりのあまよおもふあときまもやさぬ袖しのうらとある身を集○柏玉

ヲ浪の思なニ作ル、以下實隆政
爲爲廣濟繼ノ歌十二首ヲ略ス

永正十三年正月十九日

一七三

姉小路濟繼

二月

御製

永正十三年正月十九日

同十三年三月三首

夕落花

おをへうしちらすのをふもくへらしの目さやいさむる花のゆふ風集○柏玉
以下實隆政爲爲廣濟
繼ノ歌四首ヲ略ス

河款冬

山多き乃花の志あらまかけもあへそ水ゆく河き春もとまらそ集○柏玉
以下實隆政爲爲廣濟
繼ノ歌四首ヲ略ス

寄門戀

色くの紅ちきりもさそとわう門のあさちうら葉うらとやらあ集○柏玉
フうらみやりふむニ作ル以下實
隆政爲爲廣濟繼ノ歌四首ヲ略ス

同十三年四月御百首 冷泉大納言入道曉覺

梅

冬こもり雪よりいでし梅の香乃花をあらはるゝ春乃そり風集○柏玉

雲

あさみとり水あさきそらよとまき出あ一そちみえし雲乃と地ぬる集○柏玉

ヲ雲そみち
ぬるニ作ル

猿

山多うと猿のこゑ多き橋のうへを雲ちをゆま多行衛ともあし集○柏玉
ヲゆく末もふしニ作ル以下實隆
政爲爲廣濟繼ノ歌十四首ヲ略ス

同十三年五月三首

曉月時鳥

雲よあふあつ支月のやととさきあらぬひうと夜そふる聲うを集○柏玉
以下實隆政爲爲廣濟繼
ノ歌三首ヲ略ス

古宅五月雨

はとこれの多るさと人よ月をしのか夢を寝とよも軒乃あれまを集○柏玉
以下實隆政爲爲廣濟繼
ノ歌三首ヲ略ス

寄名所述懷

雲のうへよそ身やあよのくらぬ山志もよのこす道もこそあき集○柏玉
ヲ雲の上乃ニ作ル以下實隆
爲廣濟繼ノ歌三首ヲ略ス

同十三年六月御百首

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

梅發得客

梅うえよ來るるや人もうくひそのねくらあらそふ華此う争うれ集○柏玉

遙思月

たもふよもちりをそれさあむ月のと山のあきのえさらんもおし集○柏玉

傳聞戀

志のふなよさこそいぢりき窓の中もいひあらはさぬたよりやのなき集○柏玉

ワ便とにき
キ=作ル

泊雨滴篷

あらきうせよさゆらん浪のしづくよとまをる雨のうきねともあし集○柏玉

二句ヲあらしき風もこゆらん浪のニ、四句ヲ答もる雨
ニ=作ル以下實隆、政爲、爲廣、濟繼ノ歌十五首ヲ略ス、

同十三年七月三首、

初秋衣

むえ玉のよるのころもよ風をふきあつさをかゑそ初秋の空集○柏玉

以下實隆、政爲、爲廣
ノ歌三首ヲ略ス、

秋野忘歸

な茨さりの霧のほよひよ忘るへき家路とやおもふ秋の花野を集○柏玉

以下實隆、濟繼ノ
歌二首ヲ略ス、

騎鳥戀○柏玉集、雪玉集、碧玉集、前大納言
爲廣、卿集、同詠、草、寄、鳥戀ニ作ル

ともあひ多糸は行とり雨うせのゆふるよさの契り共みそ集○柏玉

ヲ雨風乃ニ作ル、以下實隆、政
爲、爲廣、濟繼ノ歌四首ヲ略ス、

同十三年八月御百首 月百首

月前翫花

契りあせやおあしひうりよかそらる乃それよあひあふ月のさうり集○柏玉

月前時雨

又寄るも月（全脱）それさぬうき雲をうせよまうする時雨ともあし集○柏玉

寄月疑戀

つせあらて分おしあとも木からしのなとよくほあき月やうらとん集○柏玉

以下實隆、政爲、爲廣、濟
繼ノ歌十四首ヲ略ス、

同十三年九月三首、

山紅葉

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

一七八

そきとあき岩やうくれの草木まおなしをみちの山路をうゆく集○柏玉

以下實隆、政爲、濟繼ノ歌三首ヲ略ス、

惜秋○柏玉集、恨

大うさよみあしをもち露のまのあきなりをりあふ暮ぬる集○柏玉

以下實隆、政爲、濟繼ノ歌三首ヲ略ス、

被厭戀

えせやいうよかきよよそらぬ草うつらいとふすそゆる物よやのあらぬ集○柏玉

以下實隆、政爲、濟繼ノ歌三首ヲ略ス、

同十三年十月御百首

高

雲寄りあつをれぬやとやまるう中よいまも宿もとの地りひ地の山集○柏玉

少

残るをや身よおとろんお地かこの巻つ巻いつるうす被そへた集○柏玉

聽

おもふ事をふもむあしく暮ぬとやいりあひのうをくくる山風集○柏玉

十月 御製

十一月

御製

清

かきそらぬよはのやり水をのつうらのこるあくぬかうれあう行集○柏玉

以下實隆、政爲、濟繼ノ歌十一首ヲ略ス、

同十三年十一月三首

寒夜水鳥

さ夜まくらわううへあらし霜そらぬ羽をともしむきをし鴨此こゑ集○柏玉

ヲ池乃駕かもニ作ル、以下實隆、政爲爲廣濟繼ノ歌四首ヲ略ス、

雪藏歸路

なさ乃雪よとせやゆらんとのれつるうへさやともよいて、満よそん集○柏玉

以下實隆、政爲爲廣、濟繼ノ歌四首ヲ略ス、

深山幽居○柏玉集、雪玉集

わさあうらあゝろのおくのまよとあらあ帯うき山ともあ乃とをる哉集○柏玉

以下實隆、政爲爲廣、濟繼ノ歌四首ヲ略ス、

同十三年十二月御百首

海邊霞

永正十三年正月十九日

一七九

十二月 御製

春といへりあとの鹽やきいとまなくとゆるをふりやうすとあるらん集〇柏玉

早秋

くる秋もおあしやとりそ一葉ちふえよのをそ望鳥もこそ何處集〇柏玉
二句ヲ來る種ノヤ
とヤ木葉ニ作ル

嶺雪

さやをしあ月の空よあ明ふ夜の雲よりいりるを冬の志ら雪集〇柏玉

片思

わさゆへのあゝろよかよへのおもひなくあまくさん此世あらし集〇柏玉
以下實隆政爲爲廣濟
繼ノ歌十五首ヲ略ス

〔柏玉集〕上 立春

永正十三廿五御月次
長閑なる時 汝今を來る春の光や世汝もおさめたるらん

〔柏玉集〕中 見月

永正十三二
雲霧よ時雨を秋の空の月世のどりよよくもらさりを

〔柏玉集〕下 寄浦戀

永正十三二
みふめかるるさもこそあ終身をうら此鹽をく此とらき思ひを

〔柏玉集〕上 梅

永正十三廿七
梅花うけるや袖を紅乃こそめせいふさぬりきよを

〔柏玉集〕下 雲

永正十三廿七
人の身も風のまゝなる浮雲乃思ひきよめぬ世も有々

猿

風ならし梢のさるのこゑもせを木此をうく終よ枝あひく也

〔柏玉集〕上 梅發得客

永正十三廿五
梅花いづよのこさんをつら問こし人の袖の匂ひを

〔柏玉集〕中 遙思月

永正十三六
眺つゝ我を千里此をう心おもふき月汝思行ゆよ

〔柏玉集〕下 傳聞戀

永正十三六
かくといふもせゝ大方此人若上汝を我のこよ聞も里りなし

泊雨滴篷

永正十三六
夜の雨よ又引おふと満る舟をにむつらしき雪をそ思

〔柏玉集〕中 初秋衣

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

一八二

永正十三七 まつ秋うせよ

から衣穂うせよ地てをく露をたう袖せをみ思ひよふらん

〔柏玉集〕下 寄鳥戀

永正十三七

思あよよゆのそや人も夢にこそ鳥とも成て天の巻利をり

〔柏玉集〕中 山紅葉

永正十三九

今とほき紅葉の山よ又もこん春みといひし花のまをを

恨穠○永正御月次和

暮毎の露を袖よならしても今その穠のきぬくの空

〔柏玉集〕下 被厭戀

永正十三九

それをうしいとるゝ名此世よも終の人をらへなる思そふをせ

〔柏玉集〕中 寒夜水鳥

永正十三十一

我袖をかさねそかさん水鳥此氷をしきて糸ぬる夜とそ

〔柏玉集〕上 海邊霞

永正十三十二

漕出は舟路や雲居と此原波の千里き霞なりをり

〔柏玉集〕中 早秋

永正十三十二

さそへとも散の一葉のつれれきよ心そもろき穠の初風

九月

十一月

十二月

近衛尙通
第二十首
和歌會

同植家第
和歌會

冷泉爲廣
吉書ノ和
歌

同第和歌
會

嶺雪

永正十三十二 降はもる雪此とちや白雲乃所をさらぬよそめ成らん

〔柏玉集〕下 片思

永正十三臘廿五御清書

おもふをの思をこそ世中此あらひとふをいつと察みして

〔後法成寺尙通公記〕八 七月七日、丁朝間小雨下、陰、從午刻夕立、雷鳴風吹

也、○中從兼日賦題廿首歌張行之、

〔後法成寺尙通公記〕八 五月十二日、巳晴、夕立、於御方（近衛植家）和歌會、

十一月十四日、卯晴、入夜慈照寺來、有歌會、

十二月十四日、酉晴、於御方有歌會、

〔前大納言爲廣卿詠草〕正月朔日吉書に、

年をへてあふくも高し春日山世にくもりなき春の光を

同十三日家會始に、寄世祝道

世に弘き内外の文のとはりも何そは是に敷嶋の道

七月十七日家會に、殘暑

置かぬる心はせをの扇をは破るとなしや秋の初風草○以下

永正十三年正月十九日

一八三

戀ノ各一首略ス、

同當座に、玉柳

よるの雨に置あへぬ露の玉柳玉の緒とけて朝風そ吹た以下

首しげノ一首略ス、

同十六日家會二首懷紙に、月前聞鴈

月に吹ふしのねおろし秋さえて雪より落る天津かりかね以下

友ノ一首略ス、

同當座に、朝花

夢路より先さく花や朝には雲と成てもまかふ面影以下

ヲノ一首略ス、

霜月十六日家會に、海邊冬月

冬されは浦こしさえて月影も音にくたくる霰松原以下

述懷ノ各一首略ス、

同當座 霞をわけて、

春されは心の花も行衛なく霞をわけて匂ふ山かせ以下

首つ雪をノ一首略ス、

極月十六日家會に、清瀧川

左

政みちある君か代にしあればしるてもいはんとふきそなき

右

家ノのたのしむ道もくからし千代もとあふく君か光に

左歌句をは隔て侍らねと有ノ字二あり、自然此作例も侍らんすれと、
わさとつゝけてよめるとは見え侍らねは、このましからざるに、第四
句もいさゝか思ひたくや、右の歌道もくからしと侍て、君か光にな
と侍る、難なきに此カ間、勝とや申へからん、

十二月廿日家月次會に、舊年立春

月も日も猶おしめとや一年を二年にして春のきぬらん以下

戀ノ一首略ス、

同當座に、初冬木枯

冬と吹木枯の風も見し秋の心のいろは残す山哉以下

永正十三年正月十九日

炭竈煙ノ各一首ヲ略ス、

同廿三夜月待六首に、春(正月)

時めける光のとかに春の風春の水にもうつる心よ夏○以下

同廿三夜月次六首、春(二月)

八千年の限もあらぬ花をとをうふる詞の玉椿かな夏○以下

同廿三日月待六首、春(三月)

行衛なく吹まよふ花に蝶鳥も心空なる春の山風夏○以下

同廿三夜月待六首に、春(四月)

ちゝに引春の心やのとかなる霞の袖をはしめ成けん夏○以下

同廿三夜月待六首、春(五月)

くる春のすみの緑や野も山も色の千種のはしめなりけん夏○以下

戀ノ各一首ヲ略ス、

同廿三夜月待に、春(七月)

春としもえやは思はん祈るてふ心の花のひらけさる世は夏○以下

同廿三夜月待六首、春(九月)

うつり行花よ紅葉とことのはの色に千種の歌に春やきぬらん夏○以下

去十六日典厩會始に、池水久澄(正月)

五百年にすむてふ河をいくそたひせき入てみん宿の池水(丹波)

五月十二日典厩亭にて、曉郭公(頼量也)

峰高み月こそいらめ有明の空おほれすな山郭公○以下

同當座に、天

二はしら立名も代々に高かれやそのことのはの天のうき橋○以下

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

同廿二日、南昌院にて會始に、竹不改色

色かへぬ宿そと鳥は實をはみて人は緑をくむや竹の葉

同當座に、早春

松の雪瀧津冰を吹しほりむすほれ行春のはつ風恨戀山

首家ヲ各一

同十七日に南昌院會に、花雲

行衛なくうつる心の色よりも野山にかゝる花の白雲鳥花

首ヲ各一

同當座に、さほ姫の

棹姫の姿を四方にあらはして山のはことに立霞かなあき風

ヲ各一

同廿八日南昌院月次會に、朝更衣

今朝のあさけ心の花の色はかり消すは有とも袖やかへまし夕郭公

一夜釋教ノ各一首ヲ略ス、

同當座に、春

物の音もしるき柳の花苑に鶯うたひまふこてふ哉冬恨旅

ヲ各一首

同十四日南昌院の月次に、夏香

筑波山嵐吹らし橋のにはひさはらぬは山しけ山夏人

ヲ各一首

同當座に、名所嵐

はけしさの人の心をいさめつゝ吹やはつせの山風のこる名所

名所帶、名所玉ノ各一首ヲ略ス、

永正十三年七月二日南昌院當座に、關早春

來る春はへたてぬ道もかすみ行人の心やうやむやの關菊色々

一曉神樂ノ各一首ヲ略ス、

八月三日南昌院月次に、鴈

海原や鴈はから櫓をこるくをし明かたの天の鴿舟月煙

ヲ各一首

同當座に、春

永正十三年正月十九日

永正十三年正月十九日

一九〇

花盛いける佛の御國をもよそに隔てぬ春かすみ哉夏秋以下

極月六日南昌軒にて神樂

祈る世のよしあしわかば難波瀉うたふに神もなひかさらめや爐邊閣

同當座に、春曉

明かたの遠山かつらほのくくと幾里かけてかすみ行らん秋木以下

同廿二日上池院會始に、松有佳色

武隈や子もたる松もこの宿をしる人にせん若みとり哉

同當座に、春

糸竹の聲も柳の花苑に亂れあひたる雲の上人冬神以下

同十二日上池院會に、春色

さまざまにくはりしきぬや染分し心の色を春にみすらん

上池院定
會第和歌

三月二日上池院會に、藤

春日山露のひうりのやはらかは末葉も藤の花やたのまん岡ノ以下

同當座に、名所餘寒

消かての雪に閉ぬる櫻戸を花そと扣くしかの山風名所以下

同廿七日妙滿寺といへる法花宗坊にて、寄世祝

さらに又幾八千度かあひにあはん君と法との道絶ぬよは

同當座に、初春

百敷や霞はしりの玉もゆらに光時めく春の空哉戀水以下

二月五日理乘坊にて、梅花久薰

幾春か連る枝のこのかみと名のるはかりの花の匂ひそ

同當座に、春天

草も木も天津緑の霞にやたなひかれつゝ春を知らん春神以下

永正十三年正月十九日

一九一

妙滿寺和
歌會

理乘坊和
歌會

永正十三年正月十九日

一九二

萬里小路
賢房追善
和歌會

略首ヲ

二月廿六日萬里小路追善とて張行し侍に、夜

物とに夜やは常なる出しより入とはりの月を見るにも

廣橋守光
第和歌會

同四日廣橋中納言亭にて當座に、鳥霞

曙を波に浮めてむへ心あれなと霞む松かうらしま戀鳥ノ

略一首ヲ

寺井某道
善和歌會

同十四日寺井百ヶ日追善とて、宗長張行し侍るとて、前内府申されし

に、藥草喻品の普皆平等の心を

八十隈もわかぬ光は心よりすむらん月の御空ならずや懷舊ノ

略一首ヲ

細川右馬
助第和歌會

同十六日右馬助亭會に、初春

雲の上や老の姿の白馬も又こまかへる春の長閑さ瀧水ノ

略一首ヲ

本行坊和
歌會

六月二日本行坊にての懷紙に、竹爲師

窓ふかく學へる文や春秋も葉かへぬ竹をしる人にせん

同當座に、纏

六月の光の雪に鳴ぬめりこや時しらぬ山ほととぎす

水

さしくみに先しるけふよときをきし八年の法の水の心も有注

右法花衆にて本行坊侍りければ、夏中をのつから法花の法談侍れば、

聽聞し侍りて、法談はて、歌會侍れば、其心をよみ侍也、然るに有注と

付之也、

同四日問田掃部頭所にて、草花盛

こん秋は幾百かへり百草の花の盛りも宿の盛も

八月五日不斷光院會に、萩去月延引

花にたれ恨さりけん一本の萩を野山の風のやとりと

極月五日不斷光院にて、年内早梅

冬さくは連る枝のこのかみと見るへき花の姿ならめや

同十七日、駿河の蓮阿張行せしに、

五色の光もいさや花の香に有明かすむしかの浦風不逢戀下

永正十三年正月十九日

一九三

蓮阿張行
ノ和歌會

不斷光院
和歌會

問田興之
第和歌會

永正十三年正月十九日

ヲノ一首
略ス、

同二月赤兵亭にて當座、瀧霞

音はして空に成行鈴鹿川八十瀬の瀧や霞はつらん樹陰照下
射、杜露、連峰雪、念別戀、神ノ各一首ヲ略ス、

同九月二日に赤兵亭にて當座に、窓落葉、

昔おもふね覺の窓に見し夢の名残ももろく散木葉哉寄瀧下
ヲノ一首
略ス、

同六日赤兵にて當座に、五月五日

うなひ子かけふぬきもてる太刀かたなあやめも同姿ならずや寄世下
祇ノ一首
略ス、

同年二月十二日赤松亭當座、春天象

ひらけてはすむを天そとみん月にかすむや何の春の夜の月秋雜物
里ノ各一首
略ス、

同年三月十七日赤松亭、春色

空かけて波も緑の朝風や柳つゝきはるの海はら

同十日於播州若公御所御當座に、日といふ事を子公御代に、

朝ことに出る日影や立かへる御代の光を空に見すらん

同九月十日於播州若公御會に、鹿

吹つたふ都ともかな諸聲に我もしかなく秋の山風蒙戀下
各一首
略ス、

乙法師といへる童の代に、竹

すなほある竹の世よしと實をはまん鳥も住へきこの砌かも

愚分、文

天照す神も内外の文の道や學ふもなをき世を守るらん

寶

ありとある七のたからも何ならし一つ心の玉し清くは

同年三月十三日上月中務亭にて、島月

故郷は浪のへたてのいもか島月をかたみのうら風もうし橋月下
略ス、

永正十三年九月十三日夜、於播州飯川山城守張行せしに、山月

永正十三年正月十九日

永正十三年正月二十日 二十四日

一九六

行衛なくうつる心をまほにあけて月の御舟の山風を吹崎以下ノ略一首ヲ

十二月十六日三條中納言亭月次會に雪(公賴)

眞木の戸のをとのみ寒て明る夜にはや里の子の雪よはふ聲以下家鳥ノ各一首ヲ略ス、

同當座に、閑居落葉

吹しほる落葉よりけにもろき身の露を忘るゝ山風の聲以下海邊

鶴朝戀ノ各一首ヲ略ス、

二十日、幕府、加持ヲ行フ、

〔殿中申次記〕正月廿日、

永正十三ヨリ同十八年マテ同前

加持衆

一御加持衆御加持在之、金藏、松禪、正教、使節、山徒、淨花院、花開院、四條上人、

二十四日、兩典藥頭丹波賴量ノ子賴直ニ、昇殿ヲ聽ス、

〔御湯殿上日記〕

京都御所東山御文 永正十三年 正月廿四日、

(其後續書) よりあふまよてんの事申、御心えのよしおほせらるゝ、ひろひし申、

廿九日、よりあうまよてんの御まゐり申、御といめんきちやう所、三色ニうま

御禮

ん上せる、

禁裏御倉役立入宗康等ヲシテ、御服用脚ヲ立替ヘシム、

〔守光公記〕

東洋文庫所藏 正月廿四日、中略 御服要脚、于今遅々、此要脚事、畠山

二郎元服御折番也、畠山尚順ノ子鶴壽元服ニ見ユ、ト、自舊冬度々催促之

處不事行、仍兩御倉三千疋分引替由、自長橋折番到來、以此趣堅令申處、立入

加賀二千疋、中興千疋引替之、珍重々々、利兵事、可被下(平下同シ) 内々相尋局之

處、前々不被下之也、此度始而之事歟、之由被申、於此用脚者、可被遣利兵事可

然由令申處、長橋同心、可有申沙汰之由也、尤可然、請取事、自勸修寺(被遣ル) 者也、

二十六日、能登守護畠山義總、同國興德寺ニ禁制ヲ掲ゲ、

〔龍門寺文書〕

禁制

一甲乙人濫妨狼藉之事、

一伐採竹木之事、

一臨時課役停止之事、

右此條々有違犯族者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

永正十三年正月二十六日

一九七

畠山種長
紙元服折
延錢ノ依ル
宗康二千
疋
中興千疋
利息ヲ付
ス

臨時課役
ノ停止

永正十三年正月是月

永正十三

正月廿六日

興德寺

義總(花押)

一九八

是月、知仁親王、何曾ヲ撰セラル、

〔後奈良院御撰何曾〕○佐々木信綱氏所藏

三輪乃やまもりく、月、のをなし

あらし此浦よ、月をまほ

瀧のひ、きよ夢りおとろく

○以下百八十首ヲ略ス、

すさまくら

はりまくら

あいさち

永正十三年正月

二月癸丑 朔 盡

六日戊午、月、畢ヲ犯ス、土御門有春、勘文ヲ上ル、

〔後法成寺尚通公記〕八 三月九日、庚寅、夜來雨降、

(朱卷)月犯畢勘文事、今月六日、戊午、戌時、月犯畢第三、相去五寸所、

天文要録云、月犯畢宿者、天子慎之、

巫成曰、月犯畢宿者、有白衣會、

又云、月犯畢宿者、兵起期一周、

又云、月犯畢宿者、多死五穀不收、

又云、月犯畢宿者、女主失國不出二年、

永正十三年二月七日

(土御門)安倍有春

從三位五條爲學ヲ參議ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十 參議從三位菅爲學、四、五、十二月六日任、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲三十九所收 二月四日、五てうさんきの事申、ち

よつきよあり、

〔大中納言參議等宣旨〕○圖藏所藏

永正十三年二月六日

一九九

勘文

萬里小路
秀房ノ執
奏

永正十三年二月六日

永正十三年二月六日 宣旨

從三位菅原朝臣

宣任參議

藏人右中辨藤原秀房 奉

新大典侍
奏ヲ以テ内

從三位菅原朝臣爲學

從二位行權中納言藤原朝臣宣秀宣奉勅件人宜令任參議者

永正十三年二月六日

掃部頭大外記造酒正博士中原朝臣師象 奉

〔拾芥記〕

下

二月六日予參議事面向就右中辨秀房申之内々以新大典侍

局申入之今朝勅許不堪扑舞者也

興福寺薪猿樂

〔權官中雜々記〕二月

一自六日薪能如例

一十日十一日薪能被入于寺家畢初日金春金剛次日觀世寶生每事如去年

云々予依故障不參了西南院東門院光明院東北院得業修南院參仕云々

初日金春
金剛二座
次日觀世
寶生二座

八日申春日祭延引尋テ之ヲ追行ス

〔春日祭歷名部類〕

同十三年二月二十日壬申

祭式日延引

上卿權中納言太宰權帥公條

〔續史愚抄〕

後柏原院中

二月八日庚申春日祭延引 秘抄

〔公卿補任〕

權中納言正三位藤公條

二月廿日春日祭參行

〔後法成寺尙通公記〕

八

二月廿日申晴春日 上卿帥中納言云々依有行觸

之子細不及神事

〔守光公記〕

庫所藏

二月廿日申壬霽春日祭上卿帥中納言申沙汰頭辨

〔中原康貞記〕

永正十三年子二月廿日春日祭上卿公條卿少外記通昭史康

友御訪百疋宛

幕府厩立柱上棟

〔守光公記〕

庫所藏

二月六日未巳自勸修寺有使明後日御厩上棟立柱也

參賀節 可參賀 各可相觸之由被仰下必可參云々必可祇候仕之由

令返答

八日申甚雨下早朝參賀室町殿豫内藏頭頭右中辨頭中將祇候其後

永正十三年二月八日

上卿三條
西公條參
向觸ニ依
行觸ニ依
シリ神事ナ

延臣諸將
參賀ス

太刀ヲ賜

義種御禮
ノ太刀ヲ
獻ズ

猿樂アリ

尙顯雅業
王ト英賀
莊申沙汰
フニ就キ争

義種加賀
家領ヲ以
テ采女ヲ
扶持セン

尙顯申沙
汰勸許ノ
女房奉書
ヲ返上セ

押領ニ非
ズト辯疏

永正十三年二月十七日 二十日

二〇二

飛鳥井中將(高倉水家)藤兵衛佐、少時兩京兆令參御所、御對面、申次伊勢右京亮、

九日、西春風甚吹、如冬、自禁裏昨日被仰下者、昨日御太刀(食)子細被

尋下、昨日之儀自勸修寺申沙汰之間、不令言上之由申入之處、今日可

被仰下之間、八時分參禁中、如例白御太刀長橋下給之、克可申入旨也、則參

禁裏、又參室町殿申入了、申次(伊勢)又二郎、自堀川局、爲祝鮭二尺、鮑貝五

十拜領、路次迄堀川局使自留守持還之、歸參殿中、御禮申入了、

十七日、巳細川高國、畠山植長、大内義興等ヲ其第二饗ス、

〔後法成寺尙通公記〕八 二月十八日、庚午晴、風吹、小霞飛、一牛齋來、繼孝院被

來、昨日細川(高國)畠山次郎、大内左京兆等招請云々、繼孝院猿樂見物之由被相

語、午時被歸、

二十日、壬義種、勸修寺尙顯ノ、御料所采女領播磨英賀莊ヲ違亂スルヲ怒

リ、其家領加賀井上莊ヲ沒收セントス、尋デ之ヲ宥ス、

〔守光公記〕〇東洋文 二月廿日、壬申霽、〇中四時分伊勢兵庫爲御使來、勸修

寺播州采女知行代官就申沙汰事、勸與伯事也、申云、播州阿賀莊事、爲采女知

行之處、先代官無理違亂、已令無足、悉皆勸修寺張行也、所詮賀州家領召之、采

女可有御扶持、自然爲禁裏有被仰下之子細者、此分可申沙汰、已一度被出女

房奉書、又被成返儀、悉皆結構也、一段曲事思食、其外條々有被仰旨、拙者此仰

畏存、且驚存者也、定而勸修寺可迷惑任、女房奉書之事、可致返上之由、堅可申

含、其程之事可然樣可令披露給之由令觸了、晚頭勸修寺來臨、令面謁、向兵庫

許處、先刻御懇取合、畏入由被謝之、就傳奏申沙汰之事無紛事也、上意驚、下飛

脚召寄之、長橋ニ可致返上、可然樣申入之由、被申子細、奉了、此由可申入之由

令返答、被歸了、

廿一日、酉癸、雨下、早朝向兵庫許、則面謁、昨日勸被申旨可令申處、委奉了、昨日勸

修寺來奉分、分、非掠申儀、爲叡慮被聞食分、被成奉書之間、更私非造意之由被

申、尤之由申訖、昨日之御禮旁可參殿中事、可然由申間、即令祇候、少時兵庫祇

候、此由又急度不申入之處、早速申届、女房奉書可致返上之由、被喜思食者也、

采女知行就無相違者、賀州之儀不可苦之由、内々被仰下、珍重、退出參局、又向

伯、其後向勸修寺、事之子細令申處、先以祝著、文事、下飛脚召寄之、可返上長橋

彼申沙汰事、向後不可申沙汰之由被申、有一盞、歸華、惣三郎爲使被謝之、羞一

永正十三年二月二十日

二〇三

永正十三年二月二十日

蓋者也

三月三日、上已祝事多幸、就采女領事、自殿中、爲伊兵使來而云、以前勸修寺殿重被申女房奉書、已後不可有存知旨、相添書狀可有進上之旨、慥致披露候、只今可有進上候當番相待殿中由申送之、則可申遣由令返答、此旨申遣之處、女房奉書書狀等相添之被付廻脚、即進上殿中之處、委細被聞食、但女房奉書等爾被聞食分之由有之如何之由、重而可尋之由被仰下、此旨申遣勸修寺處、采女申事、代々存知之由申、雖然自文明度宇野令存知了、其子細申開事也、肝要、此事已後不可存知之間、不及是非之由申、此由爲申殿中遣使者處、兵庫及夜陰間退出、即罷向宿所申處、明日可披露事也、入夜伯來、爲御使申云、今度之奉書被進禁裏、可被申子細、内々被仰下、事之子細不可然歟、簡要勸修寺留綺上者、先被打置、間、被申禁裏者、可及再往歟之由、御返事言上、惣別理非、事爲最負、已叡聞堅固、爾被仰出事如此、及後失面目、又叡慮及未盡之御沙汰、如此儀到來、外聞實儀不可也、悉皆新大典侍申沙汰云々、

〔後法成寺尙通公記〕

二月廿二日、晴、勸修寺中納言從大樹折檻、被注

勸許ノ女房奉書ヲ義種ニ渡ス

井上莊半分ヲ二條家ニ返付ス

御製

二十一日、水無瀬宮法樂和歌御會

〔柏玉集〕

上 竹林鶯

永正十三、廿二、水無瀬殿御法樂
 吳竹のかゝ山林、残るよのやゝ、あらま行うくひそ、此聲
 鶯を谷よ、残らぬ跡とめて、竹比そやしよう、津る聲る、
 花よ移、心をと見え、吳竹乃千尋、あはうけよ、鶯、
 鳴

〔柏玉集〕

中 野徑薄

永正十三、廿二、水無瀬殿御法樂
 か、衣分、露も同し、野々尾花よ、あるき、袖の、
 穠風、過、てよ、我を、終、れ、まし、穠の、野々尾花、
 いつの、露の、手枕、吹、過、て、行、る、と、な、し、と、
 秋、野々尾花、ひとつ、と、
 満、る、秋、風

松上雪

永正十三、廿二、水無瀬殿御法樂

よし、此山、松、よ、いく、世、乃、雪、
 此色、
 菘、春、きて、花、
 又、
 や、
 か、
 そ、
 へ、
 ん、
 降、つ、と、て、こ、
 ね、る、り、雪、
 の、
 聲、
 も、
 な、
 し、
 松、
 を、
 深、
 と、
 る、
 窓、
 此、
 さ、
 よ、
 風

〔柏玉集〕

下 洩始戀

永正十三年二月二十二日

永正十三年二月二十二日

永正十三廿二水無瀬殿御法樂

年月心比うちよ過しきぬ去らる今を初とやおもふ

二〇六

いひ出し^{てイ}去らせしところおもひしる先との^{せんイ}満ちぬ我心の^イ羽

〔前大納言爲廣卿詠草〕同廿二日、水無瀬御法樂とて、内裏よりめされしに、

關路歸鴈

行空も宿はあらずやしたひ侘まよふ霞の關の下道

隣家萩

さよ深みいてそよ萩に見し夢は千里隔つる風の中垣

詞和不逢戀

いつ心やはら手枕貫川や詞の浪は氷とけても

峰雲

雲かへるひらの山風暮ぬらし高ねをこゆるよこの浦波

○三條西實隆春日社法樂五十首和歌ヲ詠ズルコト等、便宜左ニ合致ス、

〔増補和歌明題部類〕

坤 五十首 永正十三廿二廿一、春日社法樂、實隆公詠之、

都初春、野霞、夕鶯、原若菜、簷梅、柳靡風、嶺歸雁、春野、月花、交松、杜花、春曙、岸藤、待

郭公、苜蓿蒲、早苗、五月雨、嶋夏草、湊夕立、螢過窓、早涼到、七夕、山居、秋女郎、花、草
花、露、秋、夕雲、袖鹿、月契、秋老、惜月、擣衣、水邊菊、紅葉、遍關、時雨、田家、霜淵、氷、千鳥
海、冬、月、深山、雪、歲暮、近、寄風戀、寄烟戀、寄瀧戀、寄橋戀、寄菅戀、寄蓬戀、山家、樵夫
羈中衣、古寺、路、神祇、祝言、

五十首 同上

山、早春、海上、霞、松鶯、梅風、故郷、柳夜、歸雁、嶺、春月、尋花、見花、落花、春山、田岸、藤、新
樹、聞郭公、早苗、夏月、夏草、夕立、雲、納涼、草花、野外、虫、岡鹿、浦秋、夕月、出山、橋、月、關
月、擣衣、秋時雨、殘菊、匂、紅葉、暮秋、朝、木枯、寒蘆、河、千鳥、初雪、深雪、鷹狩、炭竈、忍戀
待戀、別戀、顯戀、恨身戀、舊戀、松積年、巖、苔、鶴立洲、名所市、野寺、神祇、

〔前大納言爲廣卿詠草〕同廿九日、住吉法樂とて、人のすゝめしに、

谷鶯

波の花をのかやとりと谷風にうきてなかるゝ鶯の聲

祝言

深緑いくかへりみん春そとも心やねさし住吉の松

二十四日、丙慈恩院文甫ヲ攝津永澤寺住持ト爲ス、

永正十三年二月二十四日

二〇七

〔賴繼卿記〕○歴代殘闕
日記百所收

攝州永澤寺住持職事被聞食畢、宜令專佛法之興隆、奉祈寶祚之長久者、天氣如此、悉之以狀、

永正十三年二月廿四日

(兼吉頼繼)
右少辨判

慈恩院文甫和尚禪室

(新助)
新助藤奏聞也、五辻持來申之間、書禮百疋、使二十疋、

興福寺衆徒、多武峯衆徒ノ狼藉ヲ憤リテ、之ヲ擊タントシ、幕府ノ下知ヲ請フ、是日、幕府、多武峯衆徒ノ横暴ヲ停止シ、興福寺衆徒ヲ慰諭ス、尋デ、越智家教ノ斡旋ニ依リテ、和成リ、多武峯衆徒、罪ヲ興福寺ニ謝ス、

〔春日社文書〕○大和

多武峯寺種々依致狼藉、可被發向之條、對國人等可被成御下知之旨、被歎申通被聞食訖、雖然、先如先々停止彼濫惡、可被專無事之旨、被成奉書之上者、可被堪忍之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年二月廿四日

(豐藤基雄)
美濃守(花押)
(松田英致)
對馬守(花押)

興福寺學侶衆徒御中

就多武峯寺狼藉之儀、御申趣、未雖不始御沙汰候、種々窺御機色、伺申候之處、先如此被成御下知候、寺門御眉目候哉、彼寺依樣體、重御申子細候者、涯分可申調候、巨細雜掌可被申候旨、可有御演說候、恐々謹言、

二月廿四日

基雄(花押)
英致(花押)

興福寺供目代御房

就多武峯寺御發向之儀、御下知事御申之處、被成先無事之御奉書候、不應御成敗、彼寺尙於致狼藉儀者、重而有御注進、可申沙汰由、兩人以書狀申候、次勅宣御儀申入候處、(自願寺伊長)南曹御辭退ニ付而、無御奏聞候、其子細、先日惣殊院へ申入候、此等之趣、可然様可預御披露候、恐惶敬白、

二月廿六日

重楚(花押)

供目代御坊 參 人々御中

永正十三年二月二十四日

二〇九

興福寺勅
宣ヲ奏請
ス南曹辨ノ
辭退ニ依
シテ奏聞ナ

被成峯寺先度御下知令返上之儀、重申狀旨伺申候處、爲被究事淵氏、以雜色直被遣以前奉書以下、若狼藉令一定者、可有計御沙汰之旨被仰出候條、差下雜色候、被渡先度奉書、路次煩責以下、可被仰付之、涯分兩人令申沙汰之候通、可被啓達御衆中候、恐々謹言、

三月廿一日

基雄(花押)
英致(花押)

興福寺供目代御坊

就今度多武峯寺與御公事之儀、如何様にも無爲之儀、御取合申度存、此間彼寺之儀種々申請、越坂にて、年貢米令運上、泊瀬通路昨日廿一日開候、如此混望之上者、早々高札之儀令引、并多武峯通路被開候者、可目出候、於我等別而可畏入存候、爲其以使申入候之由、可預御披露候、恐々謹言、

三月廿貳日

家教(花押)

供目代 御坊

多武峯興福寺ノ年貢米ノ開路ヲ通

急度注進申候、仍昨日廿二日、從越智方以使者、經寺門之御儀、多武峯方申調、路次無事之由被申候、左候間、緇素出入候、先以珍重候、雖然峯寺之儀、無法量之方之事候間、可爲如何候哉、誠此間者種々令申候之處、御許容祝著至極候、猶替候儀候者、重而注進可申候、恐々謹言、

三月廿三日

祐賢(花押)

供目代御坊

家教落著ヲ賀ス

就今度寺門與多武峯寺御公事之儀、拙者依申候、無事之被成御意得候、寔祝著之至候、仍峯寺懇望之儀、此間種々申届、如御本意相調、則以寺官御禮申候、珍重候、猶委曲同名池尻伊豆守可申候、此由可預御披露候、恐々謹言、

卯月十五日

家教(花押)

供目代 御坊

多武峯寺主一萬惣目代請文

請申 條々事

永正十三年二月二十四日

一國平均造營要脚等ノ運上

寺社領ニ干渉セズ長谷寺ノ通路ヲ妨ケズ新關ヲ設

多武峯燈爐講大給主ノ請文

永正十三年二月二十四日

二二二

一 一國平均造營要脚、土打段米段錢進官以下當山惣別知行分、雖爲一粒不令抑留、每度無闕怠可令運上於寺門、自然未進等時、寺門使者催促之時、曾以不可有聊爾事、

一 於向後永寺社領等、殊更富外山其外諸院諸坊領、全不可成其綺事、

一 今度於慈恩寺邊、長谷寺通路相塞條、御腹立尤候、於向後者、如此之亂惡一向不可有其沙汰候、并當山知行在所、號兵士新關等興行之儀、堅可令停止之、其外對御寺門不可有別儀緩怠事、

右依衆儀請申狀如件、

永正十三年丙子卯月十三日

多武峯寺惣目代

祐憲(花押)

同一藤

頼源(花押)

寺主

頼賀(花押)

供目代 御坊

請申 條々事

一 一國平均造營要脚、土打段米段錢進官以下當山惣別知行分、雖爲一粒不

令抑留、每度無闕怠可令運上於寺門、自然未進等時、寺門使者催促之時、曾以不可有聊爾事、

一 於向後永寺社領等、殊更富外山其外諸院諸坊領、全不可成其綺事、

一 今度於慈恩寺邊、長谷寺通路相塞條、御腹立尤候、於向後者、如此之亂惡一向不可有其沙汰候、并當山知行在所、號兵士新關等興行之儀、堅可令停止之、其外對御寺門不可有別儀緩怠事、

右依衆儀請申狀如件、

永正十三年丙子卯月十三日

多武峯燈爐講大給主

延秀(花押)

供目代 御坊

請申 條々事

一 一國平均造營要脚、土打段米段錢進官以下當山惣別知行分、雖爲一粒不令抑留、每度無闕怠可令運上於寺門、自然未進等時、寺門使者催促之時、曾

以不可有聊爾事、

一 於向後永寺社領等、殊更富外山其外諸坊領、全不可成其綺事、

永正十三年二月二十四日

二二三

多武峯寺官ノ請文

永正十三年二月二十五日 二十六日

二一四

一今度於慈恩寺邊、長谷寺通路相塞條、御腹立尤候、於向後者、如此之亂惡一向不可有其沙汰候、并當山知行之在所、號兵士新關等興行之儀、堅可令停止之、其外對御寺門不可有別儀緩怠事、
右依集儀請申狀如件、

永正十三年 丙子卯月十七日

多武峯寺官
明專(花押)

二十五日、近衛尙通ニ、連歌合點ノコトヲ命ゼラル、

〔後法成寺尙通公記〕

ハ 二月廿五日、晴陰、雨下、○中 從禁裏被仰連歌懷

紙點事、申玄清、

廿八日、庚辰、晴、玄清來、連歌懷紙點持來、即進上之、

○三月八日、尙通ニ連歌合點ノコトヲ命ゼラル、コト、便宜左ニ合致

ス、

〔後法成寺尙通公記〕

ハ 三月八日、晴、從禁裏連歌點之事被仰之、

二十六日、戊 舊ニ依リ、大谷本願寺ヲ勅願寺ト爲ス、

〔砂巖〕

○五 柳原家記錄八十七所收

東山大谷本願寺、任代々例、爲勅願寺、宜致長日之勤行、奉祈四海之安全者、天

尙通玄清
點ヲシテ合
セシム

廬山寺ノ
由緒

應仁亂以
來寺領橫
領セラレ
殿堂荒廢
ス

氣如此、仍執達如件、

永正十三年二月廿六日

右中將判

謹上 大納言法印御房

是月、山城廬山寺衆僧等、同寺ヲ修造セントシ、御奉加ヲ請フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲百 十

廬山寺衆僧等謹言上

右當寺者、慧遠法師出現之靈場、住心上人弘法之故跡也、仍一字藥師堂者、本在東山雲居寺、自然居士起立之佛閣也、中比被引移當寺訖、本尊者傳教大師躬刻彫醫王善逝之像也、山門中堂回祿之砌、普廣院殿御安置根本中堂云々、至當時者被安置弘法大師自作彌陀三尊畢、然應仁大亂以來、寺領悉成俗物、不叶僧侶之止住、况殿堂修治之功不及沙汰、依之本尊被侵雨露、堂舍及敗壞之條、愁歎有餘者也、而今如形欲勵上嘗修造、忝被垂天憐、預御奉加者、一寺再興、爲國家安泰之政理、歟、仍言上如件、

永正十三年二月日

大炊御門經名、加賀ヨリ上洛ス、

永正十三年二月是月

二一五

永正十三年二月是月

〔公卿補任〕

四十

權大納言從二位藤經名

廿七

二月日自加州上洛

二二六

○經名加賀ニ赴クコト、九年四月十日ノ條ニ見ユ、

三月 壬午 朔 盡

十日、^卯近江ノ人中江員繼、三條西實隆、肖柏、宗長等ト共ニ、宗碩ノ宿所

ニ於テ、千句連歌ヲ張行ス、

〔後法成寺尙通公記〕

八

三月十日

卯、雨下、從今日宗碩所ニ有千句、

江州者

人數

興行、人數前内府、

實隆

牡丹花、

一音院、

玄清、

宗長、

宗哲、

宗碩、

珠嚴、

願舟等云

々々、

〔宗碩連歌相殘分今日入眼事〕

略

十四日、^{乙未}夜來雨下、○中宗碩連歌昨日相殘分、今日令興行、午刻許入眼云々、

前内府、近所間可來之由、内々申遣處、窮屈之間、重而可來之由有返答、

十五日、^{丙申}雨下、^卯夢菴可來之由申遣處、昨日彼結願、風氣之由、重可來由有返

事、

〔十花千句註〕

○太田武藏氏所藏

於月村齋宗碩、江州住人中江土佐守員繼興行千句、永正拾三年三月十一

日初之、

何船 第一 朝花

秘處夜を花此思へん朝哉

聽雪

永正十三年三月十日

二二七

十花千句註

永正十三年三月十日

二一八

早旦花此氣色を見て、あゝ花の時節、夜をいそぎ有へたこぞよと、花此心をおちて、花此おもひんぞいへり、○下
(原書)右永正十四年仲秋下旬之比、月村齋宗碩、從薩州歸路之時、於隈庄逗留之内、數寄之衆以懇望、此千句儀、尋侍内、萬葉古今、源氏以下之句之作意、問究仰之聞書也、努々不可有他見者也

〔永正千句〕

○閑院宮御所藏

永正十三年 十一日

第一

賦何船連歌

絲ぬる夜を花の思ひむ朝哉
あはれふ音はる露此青柳
鶯此羽う地をふ交雨過て
たきて行くのうすむ空
春ぬる花山路の月此有明ふ
昔ハ足とり乃とつあつるふ湯
(三條西實隆) 聽雪
(舟橋) 牡丹花
宗碩
宗長
員繼
眞宗

宗碩肥後隈莊ニ於テ千句ノ義理ヲ解ス

永正千句

十一日

第一

岩のふまつをほしく暮そめて
霧ふるそて此伊つちわく(六脱九)
衣うつ里のうるをと袂交野よ
松一むらを登と此秋りせ
さやりふを深まると夜の霧鳴て
夢路たえと霜のさむし海
なけまつ、侘つ、ありは手枕お
いくたひり、軽なまともあし
たりふし此う羅をさへを忍ひきて
思ひ去らまをせめ世中
伊りに身のせめるをみてを残るらん
契りをつらしあらはふるさと
萩原や風ををわりはうへをねて
虫此音たしを暮さむ交あは
野への月露よりつゆにうつるらん
玄清
宗仲
宗哲
宗碩
宗長
聽雪
壽慶
牡丹花
眞宗
宗仲
宗碩
宗長
聽雪
玄清
宗長
牡丹花
聽雪

永正十三年三月十日

二一九

永正十三年三月十日

夜のし此、めに去くれてそ行
わりれたの袖乃氣色を人をみよ
た海りと慶になほをそりあし
恨むとをふとりのいひてきりせそや
今日さく花の春乃山り勢
さひしさやりほ又たつ日を草此庵
降とち羅差し雪此むらきえ
う地以ほる空を心を長閑ふて
水りけと袂く駒以そふ聲
袖さむま日此く百川や暮ぬらん
さ、此葉りし巻霜満よふ道
ぬし侘て以もりりよふ哀しれ
又えしや夢此わさそふらん
有増に今夜をあげぬみそ此雲
采ならほ以りの山やと、まほ

員繼
宗碩
宗哲
聽雪
宗長
宗仲
牡丹花
玄清
聽雪
宗長
眞宗
宗哲
聽雪
牡丹花
宗碩

三〇

なれり、をありぬ春くれ夏此きて
さくら袂色此ま流をり巻めや
満しりの身のを花も此、木りくれふ
心のちりや去らほのこさ
影きよま月のはつりし以り、みむ
露をたまらぬ袂や乃秋のよ
鹿の音袂百くらくるしま山里ふ
あくて此わさ田もる人やたさ
ふむ跡のをそ道なりらたえもせて
岩乃そほまに舟り、をせ
波りせやよそなる身をく、くらん
伊て、なふその世をは思ひし
あひり、ま其曉此佛連
望もし火去流ま年のくさり、
梅の花窓のひま、句ひきて

宗牧
宗哲
宗仲
聽雪
玄清
宗長
牡丹花
宗碩
眞宗
宗仲
聽雪
宗長
宗哲
聽雪

永正十三年三月十日

三一

永正十三年三月十日

難波乃春此夢のあさ明
り糸の音伊つ地きつ霞むらん
山こほりせのを地こちの雲
まとつてむ人ふをたきと思佐
中にをさてぬ心ともり
わたる瀬波にぬりめしいもせ河
契りてを又りる足地り
ぬる郷の跡を夏草引結ひ
ほくらのを此とやとををやみん
りさまれの袖ひをりによひ過て
さやまおろし此月さそふ空
うは霧やた地しをやりて晴ぬらん
行りさ旅さに名残なれとや
ぬりそつる心の人のつき影くて
憂なりらこをををの影をつれ

真宗
宗長
宗碩
聽雪
宗仲
牡丹花
宗長
宗碩
宗哲
員繼
宗仲
玄清
牡丹花
宗長
聽雪

二二二

ありふるをたのむとのあま蓬生に
伊の地なりしと松や見るらん
今日にくきあはとて過ぬ山のを
おもひとめてよ鳥此聲く
法のさな水のうをふとくあれや
心旅しををををよしあし
其事と日のえらふやまらほらん
あふ夜のはしめまつりるをさ
伊とけなまふををををひく
春此りさの園やり影しを
花のこる賤屋の一木りほむ野よ
よふこ鳥ふををを山りけ
ぬりにけを行を戀しまさる此うち
ひとりふをぬる川りせ此月
せふりさを時雨し秋の舟うをて

宗碩
玄清
宗哲
牡丹花
宗長
宗碩
宗長
真宗
聽雪
牡丹花
宗哲
宗長

永正十三年三月十日

二二三

永正十三年三月十日

いつを此露りわりうるにあら
うたふしをこめてをくさる篠此庵
よしやりと此冬りれの色
箸鷹此こと地の鈴の音さえて
行てをみえは雪つをるくさ
思ふらんみちのたえしをよ此めよ
心なうさはあひをまてとや
きぬく此今朝をうきり此玉のをふ
又の伊つとをなまとお地事り
花のちりわり身を今のをゆ此春
あとしうはと枝とくひとやみ
う地侘て友を去鴈のうるさふ
つりはるふをのり里く
夕な花の影をのり風と地て
むら雲わと山乃その月

聽雪
玄清
牡丹花
宗長
宗碩
宗仲
牡丹花
真宗
玄清
宗碩
宗長
員繼
宗仲

第二

松をのミ秋乃くふみや残はらん
露の心よ霜のまよひを
あはせとをきうはらめやのきりくは
なうたをりをたふる宮の庭
聽雪十五 玄清十
牡丹花十五 宗仲十
宗碩十二 宗哲十
宗長十五 宗牧一
員繼四 壽慶一
真宗七
永正十三年三月十一日

聽雪
牡丹花
玄清
宗哲

第二

賦唐何連歌以下百略ス
聽雪十五 真宗八
宗長十五 玄清九

永正十三年三月十日

永正十三年三月十日

員繼四 宗碩十二

等運一 宗仲九

牡丹花十三 壽慶四

宗哲九 永閑一

永正十三年三月十一日

第三

第三

賦何路連歌○以下百ヲ略ス

聽雪十七 牡丹花十一

玄清十二 宗哲十

永閑一 眞宗四

宗仲七 員繼五

宗長十五 壽慶五

宗碩十二 宗牧一

永正十三年三月十二日

第四

第四

第五

賦何袋連歌○以下百ヲ略ス

聽雪十四 宗碩十二

眞宗七 牡丹花十二

宗長十五 宗哲九

員繼三 壽慶七

玄清九 底安二

宗仲十

永正十三年三月十二日

第五

賦初何連歌○以下百ヲ略ス

聽雪十三 宗長十五

員繼四 壽慶六

宗碩十二 宗哲九

牡丹花十二 玄清十一

宗仲八 永閑二

永正十三年三月十日

永正十三年三月十日

真宗八

永正十三年三月十二日

第六

賦何木連歌句ヲ以下百略ス

聽雪十五

宗長十五

宗哲八

員繼六

玄清九

牡丹花十二

重吟一

宗仲九

真宗六

壽慶五

宗碩十二

栖心二

永正十三年三月十三日

第七

賦二字反音連歌句ヲ以下百略ス

聽雪十三

員繼四

壽慶七

宗長十五

第八

宗牧一

宗仲十

玄清九

牡丹花十一

宗碩十二

真宗七

宗哲九

底安二

永正十三年三月十三日

第八

賦山何連歌句ヲ以下百略ス

聽雪十四

玄清十一

宗仲七

員繼五

底安一

宗長十五

栖心一

真宗四

宗哲十

壽慶一

牡丹花十

惠順一

永正十三年三月十三日

第九

永正十三年三月十日

永正十三年三月十日

賦何人連歌○以下百句ヲ略ス

聽雪十四 壽慶七

宗碩十二 牡丹花十

眞宗八 宗長十五

宗哲七 員繼四

玄清十一 等運一

宗仲八 永閑三

永正十三年三月十三日

第十

第十

賦何田連歌○以下百句ヲ略ス

聽雪十六 宗仲十一

牡丹花十二 員繼五

宗長十七 宗牧一

玄清十二 底安一

宗哲八 貞盛一

等運三

○余領 ○十 ○三

○永正 ○十 ○三 ○三 ○月 ○七 ○三 ○日

賦何路連歌○以下八句ヲ略ス

○千句興行ノ第一日ヲ、後法成寺尙通公記ハ十日ニ、懷紙竝ニ十花千

句註ハ十一日ニ作ル、今姑ク後法成寺尙通公記ニ據リ、是日ニ掲グ、

十六日、**薩摩守護島津忠隆、犬追物ヲ興行ス、**

〔前編薩藩舊記雜錄〕四十二 山田河内守忠豐譜中少初輔式部 正文在山田七郎右衛門久通

犬追物手組事

左衛門佐殿 十三疋

嶋津左馬助 十六疋

嶋津六郎 二疋

澁谷太郎次郎 十疋

嶋津六郎三郎 二疋

嶋津式部少輔 四疋

次郎三郎殿 六疋

嶋津助四郎 七疋

嶋津治部少輔 八疋

梁瀬源五 七疋

羽嶋新三郎 五疋

平田平三郎 七疋

永正十三年三月十六日

永正十三年三月十六日

四郎殿 十二疋

喚次見

嶋津兵庫丞

永正十三年三月十六日

〔前薩藩舊記雜錄〕

山田忠豐少治輔譜中

犬追物手組事

近江守殿 四疋

四郎殿 十疋

嶋津次郎三郎 十三疋

嶋津六郎 五疋

嶋津左馬助 十一疋

嶋津六郎三郎 二疋

澁谷太郎次郎 七疋

左衛門佐殿 十二疋

檢見

二三二

嶋津藏

喚次

豊後守殿 八疋

嶋津式部少輔 三疋

嶋津治部少輔 五疋

羽嶋越前守 六疋

嶋津助四郎 二疋

平田平三郎 十一疋

梁瀬源五 一疋

喚次

嶋津兵庫丞

永正十三年三月十六日

嶋津藏進

〔前薩藩舊記雜錄〕

御文庫廿一番箱犬追物一卷中忠隆無公之御譜

手組 永正十三年五月廿八日

嶋津太郎左衛門尉

嶋津助六

稅所左衛門佐

桑波田孫六

加治木刑部少輔

廻兵部少輔

嶋津源左衛門尉

檢見

加治木筑前守

五月二十八日

○コノ後忠隆等犬追物ヲ興行スルコト便宜左ニ合致ス

吉田若狹守

本田三河守

本田刑部少輔

伊地知又七

平田五郎左衛門尉

肝付三郎五郎

嶋津又七郎

喚次

伊地知四郎左衛門尉

永正十三年三月十六日

二三三

六月一日

永正十三年三月十六日

初日一番

手組 永正十三年六月一日

忠昌公二男
殿 忠隆公

廻兵部少輔

加治木筑前守

伊地知又七

平田五郎左衛門尉

石井中務少輔

嶋津拾郎左衛門尉

嶋津太郎左衛門尉

檢見

吉田若狹守

此手組 御譜中ニ無之

嶋津左衛門尉

本田三河守

肝付三郎五郎

加治木刑部少輔

桑波田孫六

本田刑部少輔

嶋津源左衛門尉

嶋津又七郎

喚次

大寺駿河守

初日二番
同手組 同日

嶋津太郎左衛門尉

嶋津助六

忠隆公御譜中此一通アリ

吉田若狹守

本田三河守

税所左衛門佐

廻兵部少輔

石井中務少輔

加治木刑部少輔

嶋津源左衛門尉

嶋津左衛門尉

檢見

嶋津十郎左衛門尉

本田刑部少輔

桑波田孫六

伊地知又七

平田五郎左衛門尉

肝付三郎五郎

嶋津又七郎

喚次

伊地知四郎左衛門尉

〔前薩藩舊記雜錄〕

犬追物手組之事 永正十三年六月一日

嶋津左衛門尉

嶋津助六

税所左衛門尉

廻兵部少輔

石井中務少輔

吉田若狹守

本田三河守

本田刑部少輔

桑波田孫六

伊地知又七

永正十三年三月十六日

永正十三年三月十六日

加治木刑部少輔

嶋津源左衛門尉

嶋津太郎左衛門尉

檢見

嶋津十郎左衛門尉

〔肝屬氏系圖文書寫〕三

犬追物手組之事 永正拾三年六月七日

殿(嶋津忠隆下向)

廻兵部少輔

加治木筑前守

伊地知又七

平田五郎左衛門尉

石井中務少輔

嶋津十郎左衛門尉

嶋津太郎左衛門尉

六月七日

平田五郎左衛門尉

肝付三郎五郎

嶋津又七郎

喚次

伊地知四郎左衛門尉

嶋津左衛門尉

本田三河守

肝付三郎五郎

加治木刑部少輔

桑波田孫六

本田刑部少輔

嶋津源左衛門尉

嶋津又七郎

檢見

吉田若狹守

喚次

大寺駿河守

八月二十九日

殿

犬追物手組之事 永正拾三年八月廿九日

嶋津豊後守

嶋津左衛門尉

嶋津四郎

肝付又八郎

穰所左衛門尉

本田三河守

伊地知又七

嶋津太郎左衛門尉

吉田若狹守

嶋津三郎左衛門尉

嶋津近江守

檢見

喚次

嶋津十郎左衛門尉

大寺駿河守

犬追物手組之事 永正拾三年八月廿九日

殿

嶋津豊後守

永正十三年三月十六日

永正十三年三月十六日

北郷左衛門尉

肝付又八郎

川俣左衛門尉

伊地知又七

嶋津又七郎

嶋津太郎左衛門尉

嶋津三郎左衛門尉

嶋津四郎

本田三河守

肝付三郎五郎

本田刑部少輔

竹内山城守

吉田若狹守

嶋津近江守

檢見

〔前薩藩舊記雜錄〕

寫在十二喜入攝津公御譜中

犬追物手組事 永正十三年九月一日

殿 廿四疋

嶋津太郎左衛門尉 四疋

竹田山城守 二疋

本田刑部少輔 七疋

嶋津又七良 八疋

嶋津三郎左衛門尉 四疋

肝付又八郎 四疋

加治木刑部少輔 五疋

肝付三良五良 五疋

稅所左衛門尉 五疋

九月一日

九月十日

〔前薩藩舊記雜錄〕

寫在十四山田七郎忠隆公御譜中

犬追物手組事 永正十三年九月十日

殿 廿六疋

吉田若狹守 十二疋

嶋津十郎左衛門尉 四疋

平田五郎左衛門尉 七疋

稅所左衛門尉 八疋

嶋津又七郎 四疋

嶋津豐後守 三疋

嶋津四郎 七疋

伊地知周防入道 五疋

肝付三郎五郎 三疋

伊地知又七 四疋

本田刑部少輔 八疋

嶋津助六 二疋

嶋津左衛門尉 六疋

檢見

永正十三年三月十六日

永正十三年三月十六日

嶋津近江守

伊地知四郎左衛門尉

二四〇

〔前編薩藩舊記雜錄〕

正四十二文在吉田次郎兵衛爲中

犬追物手組事（永正十三年）

嶋津殿

吉田若狹守

廻兵部少輔

石井中務少輔

本田三河守

伊地知又七

桑波田孫六

平田五郎左衛門尉

税所左衛門尉

加治木刑部少輔

檢見

喚次

嶋津十郎左衛門尉

加治木筑前守

〔島津國史〕

興岳公（十四）

六月七日、公講犬追物秋八月、九月、講犬追物、凡三日、興

舊譜

〔新編伴姓肝屬氏系譜〕

十二

肝屬兼興
興行ノ犬
追物ノ興
十一日

犬追物手組事（永正十三年）

肝付修理亮（兼興）十三疋

鹿屋民部少輔十四疋

岸良左衛門次郎七疋

檢見崎八郎四郎四疋

藥丸中務丞四疋

岸良四郎兵衛尉五疋

松崎三郎次郎十三疋

岸良左衛門四郎二疋

安樂七郎次郎七疋

大野又七二疋

肝付四郎次郎十二疋

肝付新四郎十二疋

檢見

喚次

肝付又八郎殿（兼興）

肝付右京進

十一月二日

犬追物手組事（永正拾三）

肝付又八郎殿八疋

肝付四郎二郎十一疋

肝付新四郎十疋

岸良左衛門二郎六疋

檢見崎八郎四郎七疋

大野又七五疋

石崎十郎右衛門尉五疋

中村源左衛門尉六疋

藥丸中務丞十二疋

松崎三郎二郎十四疋

安樂七郎二郎六疋

岸良左衛門四郎四疋

永正十三年三月十六日

二四一

永正十三年三月二十日 二十一日

鹿屋民部少輔 八疋

肝付又德丸 一疋

二四二

檢見

喚次

肝付修理亮

藥丸兵庫允

二十日丑、近衛尙通室、大神宮ニ參詣ス、是日、下向ス、

〔後法成寺尙通公記〕

八

三月十八日亥、晴、略

從今日爲精進屋居住新造

北政所北野ニ入道相國參詣之間、爲暇乞被行向、三種、鶴頸被送之、

十九日庚、晴、東山國ニ北政所、德大寺女中等被參詣、有神事、風呂各被入了、德

大寺女中、孫子歡樂未得驗之間、俄無參宮、

廿日辛、陰、時々雨下、鷄鳴以前出門、鳥羽邊夜明云々、北政所參宮也、堅固蜜々

也、先下向南都久我女中同道也、光繼朝臣、俊永、千代菊等供奉也、少々鳥羽邊

迄送也、有置養之一盞、

廿八日己、晴、參宮迎衆遣之、從寶鏡寺、爲留守事三種二荷被送之、北政所各西

刻ニ被歸、久我酒迎云々、

二十一日寅、神宮奏事始、

〔守光公記〕

○東洋文

三月廿一日辛、霽、略

今日神宮奏事始也、勲之、珍重

新造第ヲ
精進屋ト
爲ス

德大寺實
淳室參宮
ヲ中止ス

尙通室先
ツ奈良ニ
下向ス

久我通言
室同行ス

歸洛

廣橋守光
勤仕ス

々々、

近衛尙通ノ子、大覺寺ニ得度ス、

〔諸門跡傳〕

○華頂要略百四十所收

義俊大僧正 近衛後法成寺大相國

尙通公男、母大相國實淳公女（德大寺）從一位維子、始禪意、性守准后資、永正十三年

三月廿一日出家、

〔大覺寺門跡略記〕准三后義俊 近衛後法成寺大相國尙通公男、母相國實

淳公女、永正十三年三月廿一日得度、十三、性守准后附弟

〔大覺寺門跡次第〕義俊准三后本禪意、近衛後法性寺太政大臣尙通公息、後

興院關白、母相國實淳公女、性守准三后資、

〔近衛家譜〕

尙通

植家

禪意 大僧正、大覺寺、

義植、某ノ相國寺入院ノ儀ニ莅ム、

〔守光公記〕

○東洋文

三月十二日、相國寺入院事、可爲來廿一日、任例可申

永正十三年三月二十一日

二四三

性守ノ附
弟

本名禪意

永正十三年三月二十一日

二四四

番頭へノ
訪錢

鹿苑院ニ
於テ裝束
ヲ著ケ
供奉衆

沙汰之由被仰下、雨上〔可被取哉之由申處、可被仰下、則飛鳥井中將、萬小路、藤兵衛佐等申遣之、番頭事、申殿者也。〕十四日、飛鳥井中將、藤兵衛佐等領狀、此由申遣伯許者也。十九日、伯使來云、明後日相國寺入院必定也、番頭御訪之事、可申松田對馬守云々、巨細奉之由令返答者也。

三月十九日

〔花押〕

松田對馬守殿

廿一日、寅、霽、相國寺入院也、室町殿渡御於鹿苑院、被御垂直著御狩衣云々、御供奉飛鳥井中將、雅朝、藤兵衛佐、各著狩衣、布衣侍六位分著白袴云々、猶能可尋記歟、

周防守護代陶興房、同國富田保ノ地ヲ倍衣院ニ寄進ス、

〔長防風土記〕

百十八郡、濃郡、宰判、一寺院之事

防州都濃郡富田保長穗內筋地參拾貳石地坪附別事、奉寄附當院畢、者早不謂諸天役等、任先例之旨、盡未來際、御院務不可有相違之狀如件、

永正十三年三月廿一日

尾張守判

進上 倍衣院 衣鉢侍者禪師

二十五日、美濃圓滿寺宗紀〔宗紀和尚〕佛明眞光禪師ノ號ヲ賜フ、

〔拾芥記〕

五月九日、天晴、自美濃國圓滿寺去、月三月、申禪師號、禁裏上藤

申沙汰也、三月廿五日、勅許分也、雖然祿物不調間、精々近日入眼也、禁裏御禮千疋、上卿百疋、職事〔秀房〕百疋、內記千五百疋也、今度之禪師號爲康獻策致其用意者、可有勅許之由、內々以東坊城被仰出之間、千疋分預置長橋局者也、

勅、朝取一人、暮取一人、才德無盡、煉以乃祖、煨以乃祖、工夫多端、宗紀和尚、幼歲遊南禪之緇林、爾來測東漸之法水、三玄又四喝、高風凜然、九鼎而一絲、遺名是重、遍歷際下、款機關多年、同參景川、傳衣孟有日、竟揚月溪之洪化、忽賜宸裏之朝章、諡曰佛明眞光禪師、

永正十三年三月廿五日

〔諸宗勅號錄〕

佛明眞光禪師諡宗紀、濃州萬年山圓滿寺

勅、〇勅書、拾芥記ニ同、主行狀云、自幼南禪、後皈于岐陽故里、扣景川和尚室、傳衣之改字、於月溪云々、今茲月溪之洪化、取字之儀、尤不審、

永正十三年三月二十五日

二四五

祿物遲延
五條爲康
ノ保證
勅書

法ヲ宗隆
ニ嗣ゲ

永正十三年三月廿五日

上卿帥中納言公條卿

職事右中辨秀房

二十九日、庚戌左近衛大將轉法輪三條實香ヲ罷ム、尋デ、右近衛大將二條尹房ヲ之ニ任ジ、權大納言大炊御門經名ヲ右近衛大將ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十

右大臣從一位藤實香三條、四十左大將、三月廿九日辭大將、

內大臣從二位藤尹房二條、廿一右大將、四月卅日轉左大將、

權大納言從二位藤經名大炊御門、七、三十四四月卅日任右大將、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 三月廿六日、お海いの御うと大將

の事ちよつきよあらひ、てんやうをあひうとらふへきよし申さるゝ
やとよ、せんまよくよてせんといのそいうの、大きある事よて、きと事ゆき
うと紀事をれ、御心えのよしお海をらるゝよ、二條殿左よてんよん、

是月、宗休大妙心寺住持ト爲ス、

〔見桃錄〕

住正法山妙心禪寺語錄

宗休師永正十三丙子歲入寺

山門指云、大休歇地乾坤一人、召大開門外雨滴聲塵、花開南浦春、喝一

佛殿 報化佛頭舉右誰獨足立、卸帽耐耐汝州風、吹落老僧笠、便禮

土地 東坡居士、護法明王、護箇什麼、山色清淨、溪聲廣長、

祖堂 吾這獅子窟、不容野狐精、去去天下太平、

據室 機關脫落、別生大涯、放竹拄杖不拄、且坐喫茶、

勅黃 此是三十三天討威德天子、折尼拘陀、爲佛作蔭涼底一枝、爲甚落山僧

手、拈分付春風、嫵桃笑開口、

山門疏 枯樹老僧、山門境致、露柱古佛、今日交參、舉疏是什麼、花似錦、水如藍、

同門疏 說向太湖三萬月、品論惠山第二泉、誰道千里遠、元來一味禪、

拈衣 爲北秀者祖右、爲南能者祖左、搭起鷓蚌相持漁者利也、

登座 高高峯頂盪正法船、因驪龍行處浪滔天、

祝香 大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺新任持傳法沙門 宗休開堂

令辰、虔熱寶香端爲祝延、今上皇帝聖躬萬歲萬萬歲、陛下、忝願百王百代、

芥城空而壽山彌高、乃子乃孫、桑田變而仁澤何竭、

將軍 此香、大樹奕葉、仙李盤根、燕向爐中、奉爲大檀越準三宮資倍鈞算伏願、

九州四海遠人服兮戎狄和、二京三都大廈成而燕雀賀、將補袞手轉正法輪、

勅使 此香貴於天上棘林，重於海外婆律，熱向爐中，奉為勅使尊官。（甘國寺伊長）左中辨資倍祿算，伏願宗門功第一，名上甘露麒麟，洛社會十三，齡逮元祐司馬，以規以祝，維德維馨。

京兆 此香熱向爐中，為外護檀越。（細川高國）源府君右京兆資倍祿算，伏以韓京兆起八

代衰，仰才名於斗北，神堯帝為一門事，觀義兵於晉陽，吾其庶幾乎民之所歸也。

嗣香 這一瓣香，昔大燈國師，劈作兩片，付二神足也。以正法眼，付第一神足吾

關山祖，以諸莊園，付第二神足。佗（義孝）徹翁師，是十目所視也。蓋碧落碑無贗本者，只

花園一枝而已。餘薰八傳至山野，山野祕之，三重五重，裹複子，即今拈出，供養前

住當山特芳老骨查，不肖報法乳，出乎爾者返乎爾。

垂語 世尊有密語，迦葉不覆藏。（擊禪）會麼，鷓鴣啼處，百花香參。（問答）不錄。

提綱 乾坤內宇宙間有一物，黑如漆，護身靈符，願神妙術，得之者禍胎乎二三

濫觴乎四七，著著有出身，門門書大吉，林際風顛，得之作金剛王，正令當行，巴蜀

雪消春水來，松源贖祖得之用黑豆法，孤機峭峻，湘潭雲盡暮山出，恁麼不恁麼，

依稀相似，越人為鳥，不恁麼，恁麼，彷彿不同，楚人為乙，吾皇得之，西極混明，東略

扶桑，晝降閻浮，夜昇兜率。（拈拄）山僧今日得之，為國開堂，此事了畢，是故在聖同

聖，巾上戴堯天，在凡同凡，杖頭揭佛日，焦芽敗種，齊霑恩，森羅萬象，全歸一，直得

石女立舞三臺，木人坐吹簪篸，這新翻一曲，諸人還委悉麼，倘復未然，高提一

去。（卓）一摩訶般若波羅蜜，甚深般若波羅蜜。

自序 （宗休）出頭跋鼈，顛倒狂猿，吁何幸哉，天書遠召滄浪客，是亦時也，春衣夜宿

杜陵花，慚赧慚赧，忸忸怩怩。

白槌謝 開堂之次，共惟養源堂頭大和尚，規行矩步，學馬勝威儀，放去收來，滅

洋嶼宗旨，千古叢林改觀，三代禮樂重新，茲辱降尊就卑，鳴槌證法，下座必趨十

笏室，展一炊巾，伏乞道照。

諸山謝 次惟諸位東堂大和尚，諸位西堂和尚，道香難掩，譬如栴檀葉葉起風，

禪林有光，宛似珊瑚枝枝撐月，若馨褒詞，恐瀆大德，衆賢察。

總謝 又惟山門東西兩序，諸寮辦事，一會海衆，諸位禪師，雖可致逐一謝，此日

開堂專為祝聖，不敢繁詞，併期小參之次，各各昭亮。

拈提 記得報恩逸禪師，因僧問佛為一大事，因緣出世，未審和尚出世如何，逸

云，恰好，一問一答，諦當甚諦當，那僧作畧，認奴作郎，報恩好佛，只是無光，有人若

問，新妙心出世如何，祇對他道。（拂）九萬里鵬纔展翼，一千年鶴便翱翔。

永正十三年三月是月

二五〇

當晚小參 垂語、拈杖、虛堂拄杖殺活在我，試觸著看毒花毒果有麼、問答提綱
豎起 吾有一柄拂子，千聖不曾攜，列祖提不起，豎起則豎窮三際，橫拈則橫亙十方，由是明月拂清風，未教趙州一生受用，霹靂驚天地，直得百丈三日耳聾，有來由無來由，即此用離此用，甚希有甚希有，日本國裏說禪，也太奇也太奇，大唐國裏打鼓，正與麼時、拈杖 同行木上座忍俊不禁跳出云，和尚與麼道，早是龜毛長數尺，德嶠不答話，汾陽罷夜參，謂之真家訓而已，山僧咄云，休休爾，一拶恰似兔邊求角相似，只如頭上定乾坤，毛端吞巨海底，一句子，如何通箇消息去、卓一芍 芍藥花開菩薩面，梭欄葉散夜叉頭、

自序 宗休 暗證禪師，央庠座主，忝拜宸藻，叨汚名藍，泚頹弗鮮矣、

謝語 小參之次，共惟南昌堂頭大和尚、西源的流，急雪鶴鶴相竝，南昌故郡，落霞孤鶩齊飛，莫愧吾法兄，豈曰尊貴墮，春寒花遲，保愛珍重、

次惟養源堂頭大和尚，聲價大振，天下仰德，爵齒之達尊，典刑猶存，僧中獲才學識之三長，誰不巖瞻乎，又惟大心堂頭大和尚，大心衲子，掉龍泉乎舌端，本色白拈，捋虎鬚乎這裏，造次顛沛不失宗旨，誰敢近傍乎、

更惟山門兩序，東班都寺禪師，兩翼相筵，鴛序鵠立分班，百廢具興，鯨暗鼉寂，草

響，不亦偉乎、

監寺禪師，則監院，扣青林禪，丙丁求火，會和尚接白雲祖，玉人治璠，不其然乎、
 悅可禪師，其才也，寔紀綱後佛，其機也，況陶鑄仙陀，不是華姪提唱乎、

副寺禪師，副寺禪師，護法財，護世財，幹父蠱，幹母蠱，不亦宜乎、

典座禪師，直歲禪師，蒸雲母作飯，典座妙手乎，束虛空為棒，直歲活機也、

又惟西班牙堂中座元禪師，佛祖權衡，人天眼目，匡徒領衆，寧曰講經首座乎，降尊

就卑，譬諸退位菩薩耳，蓋不忘瓜葛法系之謂乎、

後版座元禪師，輔贊吾徒，合小釋迦懸記，黼黻斯道，躡大禪佛高蹤，正好著力、

記室禪師，翰墨膏肓未療，螢雪工夫勉旃、

知藏禪師，知藏禪師，白傅詩入大藏經，老韓同傳碧巖集，賡公子行，涇渭異流，入

與不入，公其甄別、

知賓禪師，知浴禪師，大應接客徑塢，朝一人暮一人，太原主浴雪峰，火三昧水三

昧，古之今之至矣盡矣、

侍香禪師，戒香，定香，解脫香，了天性，司南於鼻孔，塵說，刹說，熾然說，謝吾道已東

之證明、

永正十三年三月是月

二五一

侍狀禪師、侍客禪師、侍藥禪師、馳書不到家者侍狀也、報客不知在帝鄉者侍客也、療病不假驢駝藥者侍藥也、桃紅李白薔薇紫、一以貫之、珠簾玉案翡翠屏三重也有、

目子 某座元、某座元、前資、辨事、二員問禪、一會海衆、諸位禪師各坐般若叢、百千文殊左右彌布、再開楞嚴會、四教阿難、內外玲瓏、集大成矣、不亦盛乎、各乞恕宥、

拈提 記得達磨大師曰、吾法於三千年後、未曾移易一絲毫許、後來覃葛廬頌曰、東西縱目乾坤闊、玉露灑秋氣宇高、山是山兮水是水、何曾移易一絲毫、少室單傳自有安期棗、葛廬一偈不貪王母桃、子細點檢、吠虛嗟實、一犬千獠、休上座打破野狐見解、翻案葛廬風騷去、拂一拂云、少室別傳旨、誰知來處高、將爲碧瞳窄、千里一秋毫

翌日玉鳳院拈香、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺、凡爲新任持者、開堂翌旦、率合山清衆、就于玉鳳塔下、諷經一上、臣僧宗休攀其例、謹焚此妙兜樓、以奉供花園太上法皇尊前之次、唱拙偈、聊充菲薄、奠云、玉鳳銜花桑海東、太平門戶競春風、三皇五帝果何物、舉香云、一朶香雲擎梵宮、

玉鳳院拈香

退院

退院 祖翁一片舊田園、自荷鋤犁稱后昆、啼鳥落花留不住、倒騎佛殿出山門、

○大休和尚法語同ジ

〔靈雲院文書〕

○山城

正法山妙心禪寺山門、欽奉北闕綸旨、敦請前第一座、宗休大休禪師、住持本寺、爲因開堂演法、祝贊皇圖萬安者、右伏目、法社擇師、海棠多甘棠少、學徒克己、初節易晚節難、久厭見贗浮圖、忽欣逢佳衲子、共惟新命堂上大休大禪師、舌走霹靂、眼空乾坤、虛堂稱慧海航、心涵千古、洋嶼爲法門鼎、名重諸方、廼祖行道、獅擲象旋、後昆興家、鳳毛麟角、教覺禪府、蚤檢永明百卷書、棒雨喝雷、晚佩臨濟三要印、疑慈氏之下兜率、類輪王之化閻浮、張蒼佐漢、呂尙相周、來赴勝會、阜陶歌虞、奚斯頌魯、仰祈丕圖、謹疏、

今日 日疏

知事比丘 頭首毗丘 勤舊比丘 西堂比丘

同門疏
德雲院ヨ
董リ本寺ヲ

同門茲審、正法山妙心禪寺適虛主席、特降綸命、起大休禪師於德雲精舍、以補處、於是昆季乎法系者、聞此盛舉、不堪忻抃、胥率製疏、從臾厥駕、云、德雲相見、別

永正十三年三月是月

二五四

峯有水、皆月虛堂、徧歷諸老、誰家不春、寧曰知識難逢、其奈學者多惑、共惟新命、妙心大休大禪師、精神矍鑠、手段軟頑、面壁得髓、達磨拈華、接大乘於赤縣、頌古垂示、雪竇落草、評百則於碧巖、窺孔韋之玄、觸衡瘴之毒、床角七八尺藤杖、寒時閣梨、熱時閣梨、檐頭一兩枝梅花、者箇行李、那箇行李、商量南方佛法、勃興東海兒孫、未墜先宗、是謂本色、住烏寺一巡、罵祖宜急、度生到鰲山、連聲叫兒、莫如同志、

永正龍集 丙子春三月 日疏

前大德 宗恕

朱印

前妙心 惠樹

朱印

前妙心 宗繕

朱印

前妙心 玄訥

朱印

前廣嚴 永寅

朱印

智慶

朱印

宗諗

朱印

前大德 宗棟

朱印

〔妙心寺住持次第〕

○以信、義海、南禪寺住持トナルコト、便宜左ニ合致ス、

〔寅闇疏〕

○以信、義海、南禪寺住持トナルコト、便宜左ニ合致ス、

〔南禪住持〕

○以信、義海、南禪寺住持トナルコト、便宜左ニ合致ス、

居儀、飯蜀、又講鄉黨禮、名位固合符也、知識寧無種乎、某、夜光玉芝、天藏金粟、木師、所居、寺號、金粟山、胸次百門、義海、孰窺淵源、保寧、勇看、經法、云、義海、涌、脚下、

以信南禪寺住持トナル 江湖疏

五色祥雲、人望霖雨、雪穴僧問、如何是佛法大意、曰、祥雲五色、曰、正宗別調、麟梨園、曲、近、時、直、指、濫、蘭、亭、真、言、法、華、坐、御、榻、揮、毫、識、儲、嗣、登、極、之、日、安、楞、嚴、升、便、殿、賜、紫、紀、太、平、興、國、之、年、非、把、刀、尺、於、古、修、焉、足、領、袖、於、後、學、龍、淵、室、內、吾、求、龍、々、亦、求、吾、龍、々、亦、不、求、我、魚、復、浦、邊、釣、負、魚、魚、何、負、釣、 議、明月千里、清風一綠、

〔南禪住持籍〕

不住 義海和尚 諱以信 永正十三年丙子賜帖

入寺セズ

永正十三年三月是月

二五五

永正十三年四月三日

四月 壬子 朔

三日、寅、甲細川高國、大神宮ニ參詣ス、是日、下向ス、

〔後法成寺尙通公記〕八

三月廿七日、戊夜來雨下、○中（細川高國）從京兆、來月三日參

高國近江
信樂朝宮
コト泊ノ
宿ヲ近
衛尙通ニ
依頼ス

宮、信樂朝宮ニ可逗留、一宿之事、可申付由申送之間、可申付由令返答、

四月一日、壬、晴、○中（細川政春）從房州信樂郷中宿之事申送間、遣料昏、○中就參宮宿事、

指下左京亮、

歸洛

三日、寅、甲晴、今朝京兆參宮云々、

廿四日、乙、晴、小雨濺、右京兆從伊賀上洛、參宮御ミヤノシ千本、千度御祓等以

藥師寺與一送之、令對面、勸一盞、

〔竹内文平氏所藏文書〕○三

伊勢

（監書） 佐々木中務入道殿 進之候、

高國

就今度參宮刻、伊勢國逗留之儀、態御音信本望候、無別儀、則令參洛事候、猶寺
町石見守可申候、恐々謹言、

四月廿七日

高國（花押）

佐々木中務入道殿 進之候、

四日、卯、乙前關白准三宮九條政基薨ズ、

〔公卿補任〕六

四十

前左大臣從一位藤政基、七十前關白、准三宮、四月四日薨

七十號慈眼院、

七十二歲
法號慈眼
院

〔嚴助往年記〕上

上

四月四日、九條太閤御他界、慈眼院殿、報恩院、千日護摩修

行中之間、（義書）門主寶幢院御移住、籠僧三人、公運、公圓、嚴誠、

〔永正十三年記〕八

後鑑二百一十一所載

四月四日、九條太閤御他界、連々御中風有之、

仍俄御歡樂大事之間、門主可被入申之由御注進也、就中御イミ事、武家御猶
子之上者、雖爲御實父、御イミ不可有之歎由、内々沙汰候、イツレモ御行フレ
ノ儀可有之間、火ヲモ聞召拔カルベキ由也、仍武家へ其通被申入之處、上意
御思案アリテ、所詮吉田ニ可被仰尋之由也、則被尋仰之處、御返事申云、雖爲
御猶子、御實父ノイミ五十日ノ間也、世人トリ親ナト申テ、實親ノイミヲノ
ガル、事、更以無其故ト御返事申入了、仍五十日ノ間御ケガレ也、御中陰等
如形被行之畢、

〔東寺過去帳〕城○山

慈眼院前關白殿下九條殿、大閤、永正三、三四四薨、御七十三

永正十三年四月四日

二五七

官歴

中風
實子三寶
院義堯ノ
忌服

高國佐々
木中務入
道ノ見舞
ヲ謝ス

二五六

永正十三年四月四日

二五八

〔公卿補任〕非參議從三位藤政基、父故前關白滿教公、母、寬正元年正月

六日敍左少將、三月廿七日轉中將、六月六日任權中納言、公澄（正親町）辭替、即去中將、

八月日更兼中將、同二年八月十一日任權大納言、十八日十月廿三日敍正三位、

同三年正月六日敍從二位、越階（上十九）、應仁二年正月十一日任右大臣、廿

五、文明二年八月十日兼任左近衛大將、廿七日同七年三月十日任左大臣、去大

將、廿二、同八年正月六日敍從一位、五月十五日關白詔、初度、同日氏長者兵仗、

同十六日辭左大臣、上（廿三）、文明十一年二月廿七日辭關白、同卅日內覽兵

仗如元之由宣下、上（廿六）、延德三年十一月廿八日准三宮宣下、上（四十八）、以

〔攝關補任次第〕慈眼院殿（政基准后後三緣院殿男）、文明八五十五關白、時

母唐橋在豐女

〔九條家譜〕政基（慈眼院滿教男）、文安二年五月日誕生、長祿三年二月廿三

日正五位下、才（十五）、同日元服、聽禁色昇殿、同年六月廿六日從四位下、才（十五）、同年

十一月廿七日正四位下、才（十五）、越階、同四年正月六日從三位、右少將、元、同年

三月廿七日左權中將、同年六月六日權中納言、即去中將、于（時）、政（二條）、同年八

月六日更右權中將、寬正二年八月十一日權大納言、仍超越位、于（時）、中（納言）、末

外前官、同年十月廿三日正三位、才（十七）、同三年正月六日從二位、才（十八）、同五年七

月十六日勅授帶劍、同日權大納言拜賀著陣、同七年正月六日正二位、才（二十）、應

仁元年五月廿二日為橘氏是定、才（二十一）、同二年正月十一日右大臣、才（廿四）、超（內）

息（宣下）、依文明二年八月十日兼左近衛大將、才（廿六）、同七年正月廿五日為左馬

寮御監、同年三月十日轉左大臣、才（卅一）、今日辭左大臣、是依大亂也、兼（良）、不（及）、左（府）

拜賀而被任太政大臣之例也、今日同八年正月六日從一位、才（卅二）、同年五月十

五日詔為關白、才（三十一）、同日為氏長者、賜隨身兵仗、同月十六日辭左大臣、拜賀以

希（有）、例、同年十二月廿九日牛車宣旨、同十一年正月廿五日拜賀、同年二月廿

七日辭關白氏長者、才（三十一）、同月三十日內覽兵仗如舊之由宣下、以左右近衛府

生番長各一人、近衛各三人為隨身、長享三年八月十九日更為橘氏是定、白（前）

基（歟）、久（令）、諸（詢）、件（事）、之（後）、關（白）、冬（修）、良（德）、依（懇）、望（舉）、延德三年十一月廿八日

准（三）、后（意）、年（四）、官（七）、年（七）、封（三）、千（戶）、賜、永正十三年四月四日薨、才（七十）

〔攝家系圖〕九條殿流

永正十三年四月四日

二五九

永正十三年四月四日

滿教 關白、氏長

君出北殿

女子 院不斷光

政忠 右前大臣

政基 左大臣、關白

〔尊卑分脈〕

九條原氏 北家

滿教 關白、從一位、右大臣、兵仗

政忠 關白、從二位、左大臣、右大臣、兵仗

政基 關白、從一位、准三后、右大臣、左大臣、右大臣、兵仗

尙經 關白、從一位、左大臣、右大臣、兵仗

義堯 東法務大僧都、爲正三寶院直

道悟 圓滿院、仁悟

女子 慈受院

〔九條家譜〕

滿教 前關白、左大臣

加々丸 號不及元服、准三后、關白、左大臣、母菅原在豐女、永正十三年四月四日薨、七十二歲、號慈眼院

尙經 左前大臣

義堯 三寶院

道悟 圓滿院

女子 院不斷光

女子 澄禪院

女子 惠慈院

〔隨心院文書〕

○山城

永正三九條大閣御書

爲鬱之處、芳札悅入候、抑彼御代官職之事、從一條ハ藥師寺安藝守、被仰付候て、過分之御借物候し、其より天竺ニ故法幢院申合、る子細候とて、及違亂つるより、澤藏軒御厨、飯川以下□□之大敵共、以大篇之儀相退候て、寺家よとぬく沙汰し付候を、不事問、國方へ被仰付候事、只魔狂之御沙汰と、淺猿敷愁涙難押計候、文之趣凡殿下(九條尚經)も申候之處、彼故安藝守、堅被仰合候

永正十三年四月四日

永正十三年四月四日

二六二

て、如此他人より代官職被申付候次第を、如何と心得候哉、爲家門も不可然候、永不可申通由堅承候間、御返事も令遅延候了、於此契約之儀、愚老も三郎左衛門尉心中令迷惑候、事次第の連々申候き、芝法眼委可存候、然間渡御之事も、愚老見參申候へ、殿下と尙々不可然候、又さるく來臨候は處、不見參申候へ、老懷愁傷候、あちち渡御候ぬとて、御等閑とも不可存候、何様如此にて□□行候へきよあらず候間、光臨之時節定而あるべく候事候、期參會之時給候也、謹言

十二月廿日

(政基) 花押

隨心院 御返事

(花押)

七回忌

〔嚴助往年記〕

上 大永二年四月四日、慈眼院殿七回御佛事如形有之、

○政基、醍醐寺報恩院某ヲシテ、勝俱胝院ヲ相續セシムルコト、延徳二年十月二十九日ノ條ニ、政基、尙經ノ父子唐橋在數ヲ殺シ、勅勘ヲ蒙ルコト、明應五年正月七日ノ條ニ、其罪ヲ免シ、政基ヲシテ、退隱薙髮セシメ、在數ノ子在名ヲシテ、唐橋氏ヲ嗣ガシムルコト、同七年十二月十一

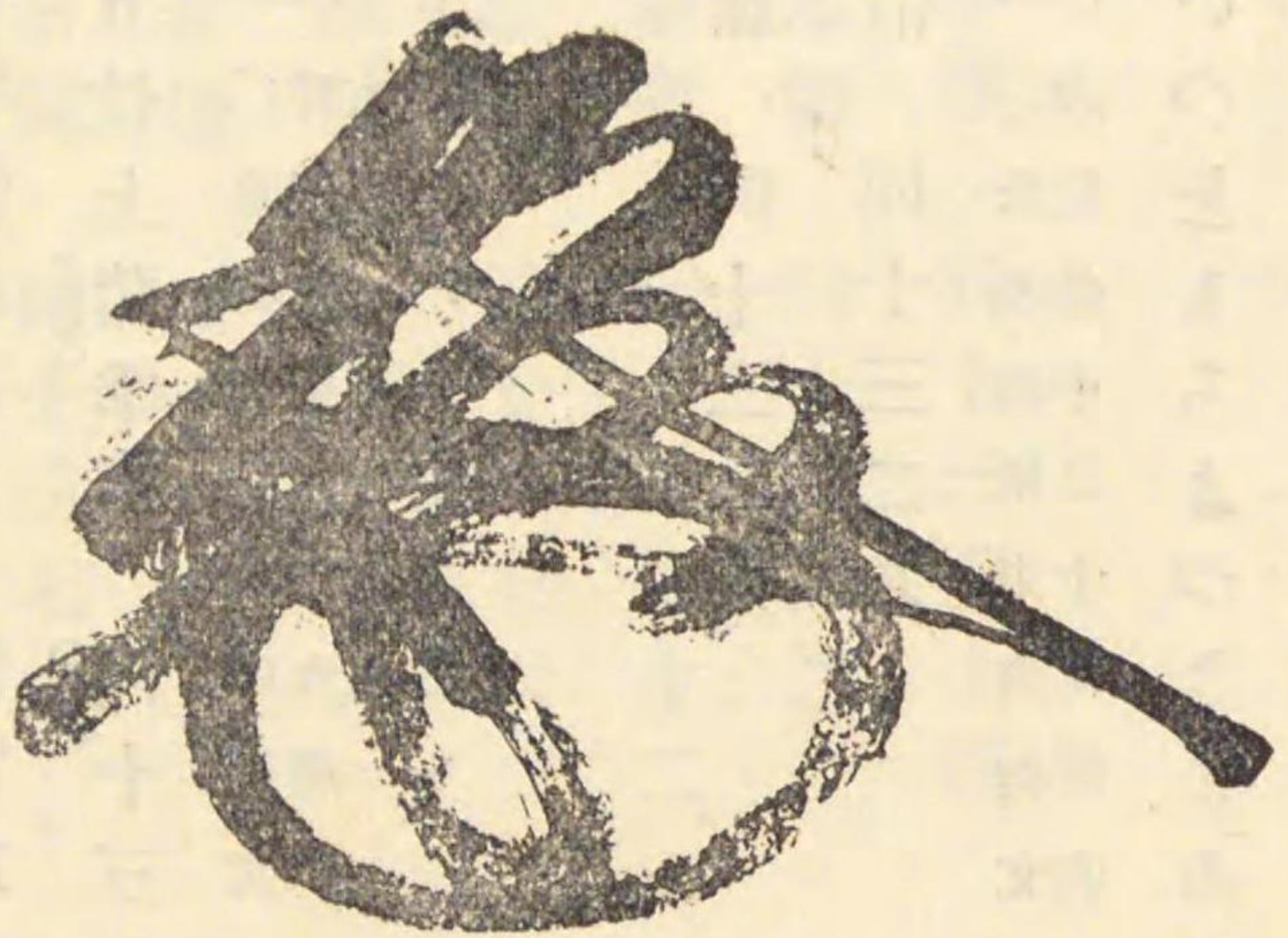
日ノ條ニ、政基、尙經ト和セズ、家僕等相鬪フコト、永正八年四月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部ク之 九條政基

花押



○隨心院文書 (山登)
(延徳二年)
十二月二十一日書狀

七日、從三位世尊寺行季ヲ正三位ニ敘ス、

永正十三年四月七日

二六三

永正十三年四月七日

二六四

〔公卿補任〕

六十

非參議從三位藤行季、四十刑部卿、四月七日敍正三位、

○風早季富等敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

風早季富

〔歷名土代〕

從五位上

藤季富 同十三二四、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記録甲三十九所收

二月三日、そゑととろきうの事申、

ちよつきよあり、ひろのし申さるゝ、

〔歷名土代〕

從四位下

藤宗藤 同十三二九、

松木宗藤
小槻伊治

正五位下

榎伊治 同十三二九、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記録甲三十九所收

二月八日、松の木の中將四をん、こ

れそるろきう、いつきもちよつきよあり、

〔口宣繪旨院宣御教書案〕

口宣案

上卿 帥中納言

永正十三年二月九日 宣旨

正五位下藤原宗藤

宜敍從四位下、

藏人頭左中辨藤原伊長 奉

飛鳥井雅網

〔歷名土代〕

從四位上

藤雅綱 同十三三十一、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記録甲三十九所收

三月十日、まさつあ一さうの事申、

ちよつきよあり、

〔歷名土代〕

從五位下

藤季熙 同十三四十四、

小倉季熙
烏丸光康

藤

光康 同十三五二、

正五位下

藤賴孝 同十三五十二、

飛鳥井賴孝

多

忠時 同十三七六、

多忠時

豐

益秋 同十三七六、

豐原益秋

大神景通

大神景通 同十三七六、

大神景通

大神景範

大神景範 同十三七六、

同景範

從五位上

豐熙秋 同十三七六、

豐原熙秋

多

久泰 同十三七六、

永正十三年四月七日

二六五

永正十三年四月七日

二六六

豐原盛秋
冷泉範遠

從五位下(豐原) 盛秋 同十三七六、
從五位上(冷泉) 範遠 同十三八廿七、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲三十九所收 八月廿七日、のりと袂うきう申、御心えのよしおほをらるゝ、

〔歷名土代〕

津守國賢	從四位下 <small>(津守)</small> 國賢 同十三十一廿三、
水無瀬英兼	正四位下 <small>(水無瀬)</small> 英兼 同十三十二三、
大中臣國忠	從四位上 <small>(大中臣)</small> 大中國忠 同十三十二十、
荒木田氏秀	正五位下 <small>(荒木田)</small> 氏秀 同十三十二十、
同守幸	<small>(同)</small> 荒 守幸 同十三十二十、
同守保	<small>(同)</small> 荒 守保 同十三十二十、
大中臣清祝	從五位上大中臣清祝 同十三十二十、
荒木田守直	荒木田守直 同十三十二十、
同守數	從五位下荒木田守數 同十三十二十、
度會常親	度會常親 同十三十二十、

祭主書狀

〔時元記〕

自永正十一年至同十七年 神宮大宮司之事 禰宜等之事

大中臣國忠、同清祝、荒木田守幸、同守保、同守直、同氏秀、各申一級事、同荒木田守數、度會常親、申、敍爵事、款狀進上之、以此旨可令申上給、恐々謹言、

十月廿三日

(藤原伊忠) 祭主三位判

進上 (小槻時元) 四位史殿

小折紙

申 從四位上

申 從四位下大中臣國忠

申 從五位上

申 正五位下

申 從五位上荒木田守幸

申 從五位下(上カ)

申 從五位上荒木田守直(下カ)

申 正五位下

永正十三年四月七日

二六七

永正十三年四月七日

從五位上荒木田氏秀

申 正五位下

從五位上荒木田守保

款狀

權禰宜正六位上荒木田神主守數誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、預五品榮爵狀

右謹考舊貫、御祈禱矣、守數誠惶誠恐謹言、

永正十三年十月日

權禰宜正六位上荒木田神主守數 款狀

權禰宜正六位上度會神主常親誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、預五品榮爵狀

右謹考舊貫、御祈禱矣、常親誠惶誠恐謹言、

永正十三年十月日

權禰宜正六位上度會神主常親 款狀

進上

祭主卿書狀一通

大中臣國忠、同清祝荒木田守幸、同守保、同守直、同秀氏等申加級、副小
荒木田守數、度會常親等申敘爵事、副狀

右進上如件、

永正十三年十二月二日

左大史小槻時元

進上 頭右中將殿

〔歷名土代〕

從五位上(勳修寺)藤尹豐 同十三十二十、

源具國(北畠) 同十三十二十、

正四位下(小槻)時元 同十三十二十九、

中師象(押小路) 同十三十二十九、

清宣賢 同十三十二十九、

從五位上菅定雄 同十三十二廿一、

從四位下丹盛直(平松)才、二 同十三十二廿三、

藤資遠 同十三十二廿八、

永正十三年四月七日

二六九

勳修寺尹
豐
北畠具國
小槻時元
押小路師象
清原宣賢
菅原定雄
丹波盛直
平松資遠

二六八

永正十三年四月十日 十一日

十日、酉辛某、近江稱名寺ニ禁制ヲ掲グ、

〔稱名寺文書〕江〇近

定 條々事

稱名寺

- 一 竹木伐取事、堅可有制禁事、
- 一 宿取不可叶之事、
- 一 自然陳等之時、使已下可有停止事、
- 一 萬雜公事可被除之事、
- 一 爲無緣所之間、至時要脚等、可有停止事、
- 右條々趣、末代守此旨、可有禁制者也、若爲一事、於一族中、不謂輩在之者、堅可加成敗者也、仍爲後證如件、

永正十三年丙子四月十日

十一日、戌壬京都雨雹雷鳴アリ、尋デ、陰陽頭勘解由小路在重、在富父子、勘文ヲ上ル、

〔後法成寺尙通公記〕八

〔宋書〕雨雹雷鳴事 四月十一日、戌壬晴、入夜雨雹下、雷鳴五六十年来

未聞次第云々、宿鳥雹ニ被打死云々、消魂、

陣使ノ停止
萬雜公事ノ免除
臨時ノ要脚ノ停止

勘文

十二日、癸亥雨降、〇中
〔宋書〕雷雷勘文
在重卿勘文

今月十一日、亥時雷鳴、雨雹降、大如梅子、

天地瑞祥志曰、雹者陰脅陽之象也、其狀如積水、此臣欲凌上象也、天鏡經云、雹下與雨俱降、有賊害者、庶民大亂、京房易傳云、雹下傷木枝及五穀者、臣欲凌上、華林天災占云、冬之過陽、夏之伏陰也、朝兵起、天子凶、又云、年大飢、宋書五行志曰、晋明帝大寧三年四月、雨雹俱降、是年帝惡有蘇浚之亂、孝武帝大元十二年四月、雨雹、是時有事中州兵役連歲、

永正十三年四月十二日

陰陽頭〔勘解由小路〕在富

從三位〔同〕在重

〔永正十三年記〕八〇

〔後鑑〕二百八十一所載

四月十一日ノ夜初夜之時分、大雹如梅、雷電

振地云々、或小家之棟ヲ打破、或小麥大麥絕種損、其外於四條五條之川原、水鳥皆死ト云々、是於洛中下京計也、上京者大方之儀也云々、其雹至翌日未消、不可說云々、

〔嚴助往年記〕

四月十一日、夜大雹、其大如梅、四條五條川原水鳥當雹死云々、

永正十三年四月十一日

被害

永正十三年四月十一日

二七二

〔異本塔寺長帳〕四

事雜考異

四月十一日、諸國大雪、大雪平地四尺餘、降惡作飢饉、津會

幕府、祇園社ニ禁制ヲ掲グ、

〔建内文書〕〇山城

禁制

祇園社

- 一 甲乙人等、於林中伐木、刈草事、
 - 一 於境內殺生事、
 - 一 放飼牛馬事、
 - 一 不及案内、壞取社領住宅事、
 - 一 爲用水通路、堀破大道事、
- 右條々堅被停止、訖、若有違犯之輩者、可被處嚴科之由、所被仰下也、仍下知如件、

永正十三年四月十一日

(假尾直連)
近江守三善朝臣(花押)
(海原時基)
上野介藤原朝臣(花押)

三河大樹寺開山愚底、寂ス、

牛馬ノ放飼
社領住宅ノ破壞
用水路ノ爲メニ大道ノ破壞

七十三歳

自筆遺偈

法系

了曉ニ師事ス
松平親忠
ノリノ大樹寺
爲ノ開山ト

〔大樹寺過去帳〕〇三河

開山勢譽上人 永正十三年四月十一日 丙子

〔大樹寺舊記〕

大樹寺代々 永正十三年四月十一日 遷化、七十三、京衆

〔大樹寺文書〕〇三河

七十三物忘真亦自他、即今々々、忘南無阿陀、(彌陀)

勢譽上人、大和尚辭世、永正十三年四月十一日、寅、冠平臥而走筆、同午、尅臨終正念、如入禪定、而御往生、竟仍於門家、可爲靈寶者也、所持真譽上人

〔淨土傳燈總系譜〕中

了曉

勢譽

眞蓮社愚底善公、洛陽人、投于了曉、剃戒嗣法、性好隱逸、遊歷而止三州宇禰部阿彌陀院、鴨田西光寺、文明七年、依源親忠請、爲州伊田野大樹寺開山、永正年中、住洛知恩院、第三世、住八年而再住大樹寺、永正十三年四月十一日寂、

敬譽

永正十三年四月十一日

二七三

永正十三年四月十一日

昇譽
辨譽

〔華頂要略〕

八十七 知恩院

知恩院歷代

第廿三勢譽愚底上人、永正十三年四月十一日寂、

〔大樹寺舊記〕

朝野舊聞哀 藥二十一 所載

開山真蓮社愚底、勅諡勢譽訓公上人、山城國之人也、人皇百三代後花園院御宇、文安元年甲子、誕生洛陽、俗姓并剃髮師、尋其年月不分明也、或說亡父母祈願八幡姬之矣、訓公幼稚時、不交遊群童、天性聰敏而嫌俗家、常往僧舍、見佛僧輒拜喜、父母感知兒異、故令出家、雖幼年好學文、下向關東、到下總國飯沼弘經寺、以了曉上人爲修學之師、稽古淨土法門、二十有餘年、漸熟四義要文等、三國傳來之口授、布薩圓頓之式儀、宗門祕要、皆以從了曉相承之也、爾勢譽傳法授戒之後、偏隱遁志深、故經回諸國、勸化念佛、粵初而向三州、略○中 永正十三年丙子四月十一日午刻、春秋七十有三、滴命終、專心不亂、採筆辭世、曰、同○前揭大樹寺文書、依リ略ス、書畢合掌、高聲念佛數返、身體柔軟如眠、端坐乃遷化矣、

〔大樹寺舊記〕

一三州額田郡鴨田鄉成道山大樹寺一字塔、開山真蓮社愚底

知恩院二
十三世
傳
京都ニ生

下總弘經
寺ニ至リ
修學ス

親忠信濃
勢ヲ三河
伊野ニ
破ル

戰死者ノ
爲メニ大
樹寺ヲ建

七日七夜
念佛ノ靈
ヲ慰ム

勢譽上人、開基且那（秘不親也）西忠建立者也、中興玉譽上人代、世良田次郎三郎清康、安城四代岡崎殿、

一右當寺樹大者、大旦那松平前京兆親忠公、法名大胤西忠、與勢譽以同志爲開基處之一字也、已經三十回不退轉行學焉、

大樹寺草創并十月七日七夜念佛執行之記

應仁元丁亥年八月廿二日、信濃之勢二萬餘騎、欲責捕岡崎城伊田之鄉、迄出馬、一夜半日陣張、于時左京亮親忠公御年卅八、岡崎之軍兵五百餘騎、從伊賀村東、覆盆子繩手押掛合戰、二千餘討捕、敵方岡崎之勢を三萬餘、見成故敗軍也、勝ニ乘細川、大澤迄追懸、敵方之首不知數、親忠公得勝利云々、其後過九年、文明七乙未年、伊田野ニテ討死之靈魂、共鯨波舉、往來之貴賤、恐懼止往還、被責聖靈晝夜之苦患、故歎成疫靈故、近所邊大疫病、讒、依之同年二月廿三日、人王百四代後土御門之時、親忠公急佛殿客殿平屋ニ有御建立、勢譽愚底鴨田西光寺住、被成御請待爲開山、則號成道山大樹寺、彌陀之三尊、在御寄進、爲彼野之疫靈法界利益、別時念佛被仰付故、七日七夜之念佛執行之、功終則開山勢譽唱、上有頂下奈洛底、有界群類悉衆生、編願（願カ）以此功德、平等施一切、同發菩提心、往

永正十三年四月十一日

生安樂國、廻向シ給ハ、一時ニ靈魂之鯨波も止、惡神惡鬼忽ニ退失、從夫伊田野ヲ魂場野ト云リ、依之大樹寺ヲ御菩提寺ニ御定、御先祖之石塔被爲立置候、自今以後十月八日ヨリ始、七日七夜之念佛之執行御定候、故毎年十月七日、七夜之別時念佛、諸末寺致集會執行仕者也、
成道山松安院大樹寺草創人王百四代後土御門之代、文明七乙未年二月廿二日、

〔大樹寺文書〕

〇一三河

〔開山自筆式定〕

式定

自筆式定
佛祖正忌
以下過
錢以夜闕如

後夜勤行
過勤者ノ
缺勤者ノ

佛祖正忌御報謝之對夜在闕、如者、過錢五十文可有候、若大切之用所候者、兼日可有披露事、
每日談〔義カ〕勤時刻過而出仕候者、五文之過錢可有事、
口論等者、雖本式定制戒候、若於違背者、人人共十疋之過錢可有候、萬一

及杖木等者、先手出人擯出、於相手者、依過之輕重而可有成敗事、
於勤行者、自本雖時節定候、無沙汰人者有前後歟、就中當後夜之時節而不被

亂著

亂履
小歌尺八
酒宴亂舞
ノ過錢

勤行者、過番可有事、

客殿之内立物敷物以下、其外諸事、其日之番衆、爲所役而可有成敗、越度候者、番衆可爲無沙汰、

亂著者、袈裟以下著物不云上下、〔付簀〕其主之方以過錢可被取候、有

小破者、以月行事比判、可被立損料、及大破者、新替を出破を著人之方、〔取カ〕可被

取、

於亂履者、不云高下、過錢五文、小破大破之事者、如先條可有事、

中小歌尺八人酒宴亂舞等者、過錢十疋、殊於酒興遊亂者、人別之過

錢候、其寮主者二十疋可出、事、

於寺内〔半〕無沙汰被取候者、過錢十疋、又庫裏客殿土戶障之内雪普請

笠傘有著事五文之過錢可有事、

右條々之趣、爲惣衆御法而互無偏頗沙汰可有候、此外細事追而候、過

錢之事者、月行事可披露候、亂著亂履之分者、主之方取之旨如件、

月廿二日

○愚底、大樹寺勤行總目錄ヲ作ルコト、文龜元年十二月二十六日ノ條

花押

〔花押彙纂〕部之 勢譽

〔參考〕

勢譽

○大樹寺文書(三河)
文龜元年十二月二十六日大樹寺勤行總目錄

〔淨源脈譜〕四箇本山第二知恩院郡城東國吉水 二十三世真蓮社勢譽愚底

〔三河堤〕四箇本山第二知恩院郡城東國吉水 一成道山大樹寺寺領七百石、宗

親忠愚底
山號ヲ
號フ
請寺

即和尚約諾ノ山號等急キ給ルヘキヨシ、使者ヲ以テ仰ヤラル、應テ翌日
感悅シ、其日ハ寺ヘソ皈ラル、既ニ寺宇ノ造營不日ニ成就ナリケレハ、
譽上人ヘ曰ク、願クハ山號院號寺號^ノ御付給ハルヘシトアレハ、和尚愈
松安院、本^ノ山^ノ京^ノ都^ノ知^ノ恩^ノ院、紫^ノ衣^ノ、德^ノ川^ノ右^ノ京^ノ亮、
親忠卿建立、開山勢譽上人、^{文三}明^{日七}年^{三月}略、^略歸敬^ノ祿^ニ云、^略親忠卿勢

持參アリ、成道山松安院大樹寺ト書テ、親忠へ進ラセラル、親忠御覽シ、良
有テ仰ケルハ、山號院號ハ其通り、寺號ハ枉テ御替ヘ玉ハルヘシ、子細ハ、
夫レ大樹ハ是レ將軍ノ異名ナリ、某シイマタ三劬一國ヲタニモ領セス、
大樹寺ト申夏、他ノ嘲モ如何ニ存ルナリト有ケレハ、和尚聞給ヒ、假令直
ニ將軍ト申テモ、何ノ子細カ候ハン、其上カタ申ス夏存ノ旨アリ、先ツ山
號ヲ成道山ト付候ハ、愚底此度淨土ヘ生シ、成道ヲ遂ケ候テ、又幾度モ此
娑婆エ立還リ、松平ノ家ヘ天下ヲ取りテ進ラセント存ル故ニ、成道山ト
ハ名ツケ候ナリ、又安松院ト申夏、松ハ御姓氏ノ一字、安ハ安全ノ義ナリ、
吾願終ニ満足シ、松平ノ天下ト成ラレ時ハ、四海一統ニ治リ、萬民安全ニ
シテ、永ク松平ノ天下トナルヘキ前相ヲ祝スナリ、偕其叱ニ及ンテハ、此
寺即將軍寺ナルヘシ、然ラハ大樹寺ニテ有マシキヤ、此ノ三ノ號^ノモヲ能
々肝心シ玉フヘシ、^略下

十二日、興福寺一乘院良譽ヲ大僧正ト爲ス、

〔賴繼卿記〕日〇歷代殘闕
記百所收

僧正良譽、宜轉任大僧正、可令宣下給之由、被仰下候也、恐々謹言、

永正十三年四月十二日

永正十三年四月十二日

四月十二日

藏人右少辨殿

守光

二八〇

四月十二日 宣旨

僧正良譽

宣轉任大僧正

藏人右少辨藤原賴繼 奉

宣旨 中御門中納言

僧正良譽

宣轉任大僧正者

右宣旨早可令下知之狀如件

四月十二日

右少辨判

〔後法成寺尚通公記〕

八 四月十三日（宋書）一乘院大僧正勅許事並御狀之事 門被參詣壬生地藏、一乘院大

四月十二日

子

甲

晴

一

門

被

參

詣

壬

生

地

藏

一

乘

院

大

良譽御禮
物ヲ獻ズ

御禮ニ參
内ス

下向

僧正事、勅許之由、廣橋中納言申送之間、祝著之由遣愚狀也。

良譽大僧正事、無相違勅許、祝著無極存候、可然様奏達可爲本懷候也、謹言。

四月十三日

判

十九日（庚）晴、心中念誦如例、一門就大僧正儀禁裏（五合）五合五荷被進之、御不例

間、明日可有參賀之由、内々被仰出、十九日（御不豫ノコト、本月）御不豫ノコト、本月

廿一日（壬）晴、已刻計一門參内、有御對面、先日大僧正天許之間、爲其御禮被祇

候、武者（綠光）小路一品、飛鳥井（雅後）亞相（冷泉爲孝）侍從三位等一門（二）申沙汰也、頗大飲也、吉見小

太郎、小生二三人召具、有音曲興。

五月六日（丁）晴陰、雨下、一乘院師弟下向、河州被越、今日先山崎邊一宿云々、以

康以下四五人送申也、飛鳥井亞相來一門暇乞也。

興福寺衆徒等、山城普賢寺惡黨ノ成敗遅ル、ニ依リ、同國守護大内義興

ニ對シテ閉門シ、七大寺十五大寺衆徒ト共ニ、幕府ニ出訴セントス、是

日、幕府事情ヲ告ゲテ、之ヲ止メシム、

〔春日神社文書〕

七 大和

城州普賢寺惡黨御成敗事、自先年雖被仰出、依無沙汰、對守護（大内義興）來十六日令閉

永正十三年四月十二日

二八一

永正十三年四月十二日

門、七大寺、十五大寺、可及大訴之旨被聞食訖、此段重堅御下知之處、有申談右（細川高國）京兆子細而、于今令遲引也、殊近日大略相調候條、右京兆參宮下向刻○高國大神宮月三日ノ條ニ見ユ、相談之、可散寺門鬱憤之旨申上之條、先停止十六日閉門、可被相待其左右之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年四月十二日

（當廣基雄）美濃守(花押)

（松田英致）對馬守(花押)

興福寺學侶衆徒御中

就普賢寺惡黨之事、七大寺、十五大寺、來十六日閉門之儀、致披露之處、守護嚴重之御請申候上者、十六日之儀、先可被相延之段、堅被仰出候、被成奉書候、自（乘院良兼）御門跡堅御下知肝要候、巨細之旨、袖留木掃部助ニ申候、可有御披露候、恐々謹言、

四月十二日

英致(花押)

北小路法眼御房

普賢寺惡黨事、只今御成敗最中候、相構へ無率爾之儀、可被相待御左右之旨、可被觸廻大衆之由、被仰出候之間、急度申入候、近日殊兩人馳走無是非候、恐々謹言、

五月廿八日

基雄(花押)

英致(花押)

興福寺供目代御房

城州惡黨御成敗之儀、堅固對諸家被仰出候、殊多分右京大夫殿御被官之由、風聞候つる、一途御料簡之由候、内々蒙仰候通、左京大夫可申聞之由、可得御意候、恐惶謹言、

六月廿一日

（時）越前守興宣(花押)

謹上 供目代御房 尊答

普賢寺惡黨與類注文到來、則申入候、仍嚴重之御成敗、時宜共袖留木方可被申候、猶重而可申候、次木津執行番頭米無沙汰之儀、致披露候、今度右京兆被

永正十三年四月十二日

永正十三年四月十三日

二八四

官就彼大扁之儀參洛仕候、自餘之儀相交不可被仰出候、重而可有御申候、可有御成敗之由候、此旨可被洩申候、恐々謹言、

六月廿四日

英致(花押)
基雄(花押)

供目代御房御返報

就城州惡黨御成敗遲滯之儀、重而預尊書、條々蒙仰候趣、存其旨候、具申聞候、聊不存餘儀、由候、此等之次第可預御心得候、恐々謹言、

八月十日

越前守與宣(花押)

謹上 供目代御坊 尊答

十三日甲從三位近衛植家ヲ正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕六十四 權大納言從三位藤植家十四、四月十三日敍正三位、

〔後法成寺尙通公記〕八 四月十四日乙晴陰、小雨濺、略中亞相一級正三位也、勅

許之由、從廣橋中納言許申送間、答祝著之由、十五日寅晴、一級勅許、祝著之由、以書狀申也、

植家卿一級事申入候之處、天許、誠以眉目之至、不知所謝候、能々得其意、可令奏達給候也、謹言、

四月十五日

判

廣橋中納言殿

廿三日甲晴、亞相一級口宣、從萬里小路送之、宿番如此、

永正十三年四月十三日 宣旨

從三位藤原朝臣 植

宜敍正三位、

藏人右中辨藤原秀房 奉

神宮傳奏廣橋守光ヲ罷ム、是日、三條西公條ヲ敷奏及ビ神宮傳奏ト爲ス、

〔公卿補任〕六十四

權中納言正三位藤守光六十四、神宮傳奏、四月日神宮傳奏事辭退、

權中納言正三位藤公條卅、大宰權帥、四月十三日、被仰敷奏、同日被仰神宮傳

奏事、

〔廣橋家譜〕

坤 守光公是稱院儀同贈內大臣、從三位權中納言兼顯卿男、母、藤原實正二位權大納言藤原廣光卿男、母、藤原顯卿男、母、

永正十三年四月十三日

二八五

原基有 (永正) 同十三年四月十一日辭神宮傳奏、

〔三條西家譜〕公條 號稱名院右大臣、入道前内大臣、
實隆男、母贈左大臣教秀公三女、
三十被仰敷奏同日爲神宮傳奏、 同十三年四月十三日、

前内大臣正二位三條西實隆、薙髮ス、

〔公卿補任〕四十 前内大臣正二位藤實隆、六十 四月十三日落飾、六十二歲、
戒師長老照金上人、剃手良秀大德、道號耕隱、法名堯空、號逍遙院、著黑衣持律、

戒師照雲
道號耕隱
法名堯空
別號院戒
ヲ解脫戒

同八月廿二日、重受別解脫戒、持衣鉢、

〔拾芥記〕下 四月十三日、三條西 前内大臣 入道、爲廬山寺長老剃髮戒師云

〔台傳〕百三十三所收 前内大臣實隆 後稱名院入道前内大臣二男、
母藏人頭左大辨房長朝臣女、 永正

廬山寺二
於テ落飾
道號大春

十三年四月十三日、於廬山寺落飾、六十二、戒師照雲上人、道號耕隱、
法名堯空、尙弟子、和道號大春、故天隱和尚作 剃手良秀大德、

〔砂巖〕六 柳原家 三條西家系圖并傳 實隆公 母左大辨房長女也、公保
十三四十三、於廬山寺落飾、二十 戒師長老照雲上人、道號耕隱、法名堯空、
又道

連歌字ハ
聽雪

春、號逍遙院 常ニ法名 連歌字ハ聽雪 書時ハ 雪一字ヲ被用也、

薙髮ノ時
ノ和歌

〔再昌草〕〇圖書 四月十三日、甲 廬山寺マてかしらたろそとて、

黒髪のあるぬ事なし今の身此をりみよとせぬ絲々ひのかりり
夏衣涼しき道の門出してそちそのうへよ心をちかく
十六日、廬山寺よりかへるとて、

故郷よとちのへるともとのむちよ錦よるはるすその衣を

(寫眞) 冷泉大納言入道のもとへ、

をくれきと思ひやひてし小車の目それすたあし道よ出ぬる

返し、

淡くせしの帯あき心を小車のわれいらきつる道もあひなし

同人のもとより、

花衣あふるのあらひ墨染よやつるゝまてのよとくひをの差淡
あらましのあゝ身此うへも聞あうち今こりおあし心ともしれ
ほあへこしり此年月もいゝあり三代の恵乃の幸あひくまで
この葉よほとの道よ入とても思ひやすてぬをまともろこし
まきしのふ昔をいゝ此君の代を法のむしろに猶いのらむ

冷泉爲廣
ノ唱和

永正十三年四月十三日

返事

二八八

たふしくいとそあり墨も染てたりもとより花もあらぬたもと
いまそけにさゝ人まねのあらましに思ひなされし程もくやしき
苔の袖も猶ころほめとし月此身にあまりける代々のめぐきを
まほなる風と月とを捨るさきほとの道乃友のあまけを
法も又萬年をそわか君にほへしまゝの代をいのるか
錦もまゆるの歌を民部卿入道きゝて

廣卿
草同ジ

納言爲大

佐々木道
堅ノ唱和

道堅法師、近江より得度の事つとへきゝて、三首の歌を和して、

くろかとのあゝる行ゑりたのをしきをり亂れぬ縁のひしらきて
涼しさをいちそのうへにさのむまそまられぬ露の夕なりを
故郷より立ちへりてや墨染の袖を錦のいろをまさらむ
蓮葉のうそきそとのと坐禪の床より及あさくやと申て、
蓮葉をや布りてとれと露の身のをき所ころたのとのあまき

返し

もとより此むちにある此と蓮葉のやふらんもあしのやらんもあし

永正丙子孟夏十有三日、詣廬山教寺剃髮受戒、輒綴野偈述素懷云、

六十餘年皆昨非、伽梨喜得換朝衣、一身林下已知足、何向君王求弊幘、

又

自縛多年如有繩、幡々衰髮愧鬚髻、朝簪今日忽拋去、來往一閑雲水僧、

永正十四年四月十三日、去年のこよひ出家をし事なとれもひいて、

月の前に念佛をし程思ひのゝをし、

塵をいてし夜の夜、今日此空乃月のうあやたふし世よめぐりたる

○實隆薨ズルコト、天文六年十月三日ノ條ニ見ユ、

十四日、伊勢貞能、其知行分山城西七條右京職内仰木右京亮作職分田地ノ年貢無沙汰ニ依リ、右京亮ヲ改補センコトヲ幕府ニ訴フ、幕府之ヲ許シ、是日、東寺ヲシテ、貞能ニ合力セシム、

〔古文書〕〇後鑑二百八十一所載

伊勢又七貞能申知行分城州西七條右京職内仰木右京亮作職分田地三段

永正十三年四月十四日

二八九

實隆薨髮
ノ偈

永正十三年四月十九日

二九〇

事、近年々貢一向無沙汰之條、之上者、召放下地、可被宛行餘人云云、早可爲領主進退之旨、被成奉書訖、令存知之、於自然之儀者、可被合力之由、被仰遣候也、仍執達如件、

永正十三
四月十四日

基雄判
英致判

東寺雜掌

十九日、庚午御不豫、

〔後法成寺尙通公記〕

八

四月十九日、庚午晴、○中略、興福寺一乘院良譽ヲ大

幕府、大内義興ヲシテ、渡唐船ノコトヲ管掌セシム、

一乘院良譽ノ參賀シメラセ

〔室町家御内書案〕

上

一渡唐船事、代々存知之處、近年相違之旨、棟證文之條、被成御内書畢、早任先例、永可有執沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年四月十九日

近江守
上野介

大内左京大夫殿

○義興、高麗船勘合ノコト等ニ就キ、幕府ニ進言スルコト、十一年九月十一日ノ條ニ見ユ、

二十日、辛未紀伊金剛峯寺衆徒等、同寺行人ト戰フ、是日、同國根來寺僧徒、行人ヲ援ケ、衆徒等ヲ破ル、

〔東寺過去帳〕

於高野山合戰死亡輩數百人、衆徒并預衆與行人合戰、永正十二乙正月十一日、

智莊嚴院

於高野山合戰死亡輩數百人、智莊嚴院已下生涯云々、永正十三四廿、高野行合戰、自根來寺泉職已下一萬餘人、高野ノ行人方ヲ合力ニ依テ、智莊嚴院衆已下衆徒、寺預衆、聖衆皆打死六千人計有之云々、方々ニ没落了、

二十二日、癸酉幕府、利倉新三郎兄弟ノ、東寺領山城上久世莊内花藏庵及ビ同庵領ヲ押領スルヲ停メ、僧壽桓ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔東寺百合文書〕

○山城一之二十五

壽桓書記申城州西岡上久世庄内花藏庵、同庵領等別紙、目録在事、帶開基以來相傳證文之處、利倉新三郎押領之間、去年雖被成奉書、不能承引、新三郎弟承倉

永正十三年四月二十日 二十二日

二九一

正月十一日ノ合戰
衆徒方ノ討死

新三郎弟
承倉去渡
幕府下知
寺ノ旨ヲ東
スニ通告

永正十三年四月二十三日

二九二

藏主申子細之上、就盜人之儀差申、被尋下之、於訴論者、先年香西以下成敗、絆已違期之條、不被及御沙汰者哉、一向至承倉者、背御下知、于今不去渡在所企訴訟之段、不能御許容上者、早退彼妨、可全領知之旨、被成奉書於桓書記畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十三

四月廿二日

貞兼(花押)

元久(花押)

東寺雜掌

○幕府重ネテ、壽桓ヲシテ、花藏庵及ビ同庵領ヲ安堵セシムルコト、十四年九月十一日ノ條ニ見ユ、

二十三日、^甲陸奥伊達次郎、^種佐藤孫右衛門ヲシテ、其買得ノ所領ヲ安堵セシム、

〔伊達家文書〕一

^(端裏書)「さとうまこへもん」

信夫莊

一長倉方より買地信夫之庄さと野之内、西東山川共こ一字不殘、一同買地信夫之庄北郷谷目之内、大島一字、

保原

新田郷

一田手方より買地信夫之内、小倉林屋敷一字、
一木村兵庫所より買地保原之内、平八在家一字、
一石母田左京亮所よりの買地新田之郷内、室田在家一字、何も任本狀、永代不可有相違候、仍爲後日證狀如件、

永正十三年卯月廿三日

^(伊達)種宗

佐藤孫右衛門とのへ

○六月十八日、次郎、山岸長門守ヲシテ、其買得ノ所領ヲ安堵セシムルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔伊達家文書〕一

^(端裏書)「山きしなると」

一藤田中務所よりの買地、上平柳惣成敗之事、
一下飯坂方より買地、屋代之庄文殊寺の内、丹波在家一字、
一小築川又四郎よりの買地、上長井平柳郷之内、坂水在家一字、各々任本狀、永代不可有相違候、仍爲後日證狀如件、

永正十三年六月十八日

種宗

屋代莊
平柳郷

永正十三年四月二十三日

二九三

山岸長門守とのへ

二十五日、琉球ノ使船、薩摩ニ來ル、

〔前編薩藩舊記雜錄〕見年代記 一永正十三年丙子四月廿五日、琉球國文船著

使僧天王
使者謝那
大屋子

岸、使僧天王寺、使者謝那大屋子云々、

〔島津國史〕興岳公 夏四月二十五日、琉球使者天王寺僧某、謝那大屋子來、

據興岳公舊譜、
福昌寺年代記、

○十二月二十日、琉球ノ使船、又薩摩ニ來ルコト、便宜左ニ合致ス、

〔前編薩藩舊記雜錄〕見年代記 一同年、又琉球國使船二艘著岸、使僧建善寺、使

使僧建善
寺西殿
使者西殿

者西殿云々、

〔島津國史〕興岳公 冬十二月二十日、琉球使者建善寺僧某等來、據興岳公
舊譜、福昌

寺年
代記、

是月、東大寺大勸進僧、同寺講堂本尊ヲ再造セントシ、女人ノ大佛殿堂
內參詣ヲ許シ、其散錢ヲ資用ニ充テシテコトヲ請フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲百七
諸寺 東大寺

東大寺大勸進申狀

東大寺大勸進聖謹言上

金堂以下
炎上ノ災
大佛殿災
ヲ免ル
講堂本尊
千手觀音
像ノ燒失
大佛殿ハ
女人禁制
ノ靈場
ノ靈場ノ
入場特許
ノ靈場ノ
入場特許

夫當寺者、聖武天皇御草創、奉爲光明皇后御建立金堂講堂、日域無双之大伽
藍也、然先年金堂并西室東室四面廻廊令炎上畢、○東大寺炎上ノコト、五年
三月十八日ノ條ニ見テ、大佛殿者雖双軒、除餘煙事、不可思議之佛力歟、抑講堂御本尊千手觀音像、適
奉致造立之功處、不慮又令燒失畢、小僧悲歎無是非、唯如夢之覺、爲忙然者也、
猶不得止有再造之志、就中可勸十方檀那計略、更不知其謀、爰大佛殿堂內者、
女人禁制之靈場云々、不知其謂、所詮今度以大慈大悲之勅命、百日之間、入女
人於堂內、以其散錢、講堂御本尊令造立千手觀音像者、女人等忽避五障三從
之重業、爲皆成佛道之結緣者乎、仍垂天憐、被成下綸旨、二世御願何事如之哉、
彌天下泰平、國土豐饒、諸人快樂之基歟、以此等之趣、可有御奏聞之旨、粗謹言
上如件、

永正十三年四月 日

山城寶鏡寺南御所、猶子得度ス、〔後法成寺尙通公記〕
八 四月廿七日、
寅陰雨下、雷鳴頻、寶鏡寺得度、以長泰
〔後法成寺尙通公記〕
八 四月廿七日、寅陰雨下、雷鳴頻、寶鏡寺得度、以長泰

朝臣遣三合三荷三百疋、今日即參大樹云々、三合三荷被進之云々、其歸之土

南御所義
種ヲ訪フ

永正十三年四月是月

永正十三年四月是月

器物五、二荷被送之、有三獻、供衆五六人給一獻、(北水邊)俊泰朝臣請伴也、

廿九日、(庚辰)晴、寶鏡寺(細川高國)京兆招請、及大飲云々、

○義種、近衛尙通ノ女ヲ猶子ト爲シ、寶鏡寺ニ入室セシムルコト、十年十二月二十一日ノ條ニ見ユ、

五月壬午朔盡

三日、(甲申)幕府、山城安樂壽院領播磨石作莊ニ對スル押妨ヲ停メ、同院ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔安樂壽院文書〕○山城

鳥羽安樂壽院領播州石作庄事、近年有押領之族云々、太不可然、早退彼妨、任當知行之旨可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年五月三日

(松尾爲俊)近江守(花押)
散位(花押)

當院雜掌

○播磨守護赤松政則、宇野越前守ノ、石作莊ヲ押妨スルヲ停メ、之ヲ安樂壽院ニ渡付セシムルコト、文明十三年六月二十日ノ條ニ見ユ、

肥前東尙盛、千葉胤勝ヲ同國晴氣城ニ攻ム、是日、尙盛、敗死ス、
〔歷代鎮西志〕十春三月、東尙盛、驅催松浦、波多、草野、周旋小城而攻晴氣城、

千葉胤勝、牒合於前田、德島、鴨打、窪田、鑰尼、圓城寺等、令後詰尙盛、
夏五月三日、松浦衆於小城敗績、尙盛討死、

永正十三年五月三日

永正十三年五月五日

二九八

〔歷代鎮西要略〕

五

春三月、東尚盛馳催松浦衆波多、草野之兵、而周旋于小城、取懸晴氣城、城方人前田、德島、鴨打、窪田、鑰尼原、圓城寺等、後詰尚盛、尚盛敗績、卒亡其跡、五月三日也、或曰、尚盛討死。

○胤勝、尚盛ヲ擊チテ之ヲ奔ラシメ、其城ヲ奪フコト、十一年四月是月ノ條ニ見ユ、

五日、丙戌權中納言正三位烏丸冬光薨ズ、

〔公卿補任〕

四十

權中納言正三位藤冬光、五月五日卒、四十才、四十

〔瑞石歷代雜記〕

四

五月五日、烏丸家第三代、正三位中納言冬光卿薨、歲四十四、法名宗賢、實日野左大臣勝光公、四男也、爲資任公家督。

〔公卿補任〕

參議從四位上藤冬光

故儀同三司資任公男、實故左大臣勝光公三男、永正五年七月十九日任、元前頭右中辨、卅六、同六年八月七日、敍正四位下、卅七、同七年十一月十三日兼右大辨、卅八、同八年正月日、敍從三位、卅九、同十年十二月日轉左大辨、同九月日拜賀、四十、以同十一年二月廿七日任權中納言、四十、同十三年二月十日、敍正三位、四十、同十三年五月五日卒、四十四才、四十六

四十四歲
實父日野勝光
養父烏丸資任
官歷

世系

〔尊卑分脈〕

藤原氏 內膳孫 烏丸

資任

冬光

權中、正三、參木、左大辨、侍從、左兵權佐、頭辨、五藏、實勝、光、公、男、法名宗賢、永正十三、五、五、薨、四十四才、

資蔭

從、右兵衛佐、從五上、侍從、早世、母同、光、康、

光康

參木、左大辨、侍從、左衛門佐、從三、鴨信、祐女、

女子

下部兼滿卿妾、次朝倉右衛門大夫、下部之妾、後權中、實日野晴光室、母同、

〔烏丸家譜〕

資任

冬光

實日野左大臣藤原勝光公四男、文明五年月日生、

資蔭

鴨信、從三位、母從、祐女、

光康

母同、資蔭、永正十年十月十三日生、

女子

日野權中納言、藤原晴光卿室、

冬光

文明八年八月十日、敍從五位下、十月十九日、任侍從、年月日、敍從五位上、年月日、元服、聽禁色、年月日、任右兵衛權佐、延德二年十一月八日、補藏入、

三年正月日、任右少辨、三月三日、敍正五位下、四年正月六日、敍正五位上、明

永正十三年五月五日

二九九

永正十三年五月五日

三〇〇

應二年三月廿五日、轉權左少辨、四年三月十日、轉左少辨、七年十二月五日、
敍從四位下、八年五月二日、轉右中辨、補藏人頭、九月七日(六九)出奔、赴前將軍義
尹帷幕之處、敗北之間、不知行方云々、同日止職、年月日歸洛、永正五年七月
一日、敍從四位上、十九日、任參議、六年八月七日、敍正四位下、七年十二月十
三日、任右大辨、八年正月十八日、敍從三位、十年十二月日、轉左大辨、十一年
二月廿七日、任權中納言、十二年二月十日、敍正三位、十三年五月五日薨四

四歲號後
乘林院

和歌

〔筆陳〕

○上ノ一
越後保阪潤治氏所藏

冬光

ゑたあかくたふめくみ此昔哉もはらに今しは世哉あふくうれ

瀧下螢

冬光

ゆく水よそたく螢乃光もて玉よぬあるる瀧の志ら糸

寄野戀

冬光

色うのむ露哉そたもふ春日野乃雪此里うあむするれつゝ

〔和長卿記〕

三

明應七年二月廿日、丙戌晴、今日下向和泉堺南坊(留債)爲申

東坊城和
長ト共ニ
南坊紹債

フ堺ニ訪

參禪

自筆狀

相看也、先年一度許相看之後、年々雖存之、自然令懈怠、尤似不知一大夏因緣
歟、烏丸左少辨連々宿望也、仍誘引、

廿二日、戊子晴、今日參和尚、有御相看、烏丸同被申相看、當年七十二歲、御老衰
勿論歟、

廿三日、己丑晴、烏丸安名宗賢、今日即參禪、

〔守光公記雜記〕

○上 東洋文庫所藏

今夕う明日う光御所希候、返々此間者依無指題目不申入候、自由之儀
仰奉免候、芳委示被下候者本望候、萬端奉期拜願候間、令省略候、
其後者久敷不申入候、返々背本意令存候、何等御事共御座候哉、積鬱此事候、
次奏事、先日も申談候つるとく、今月中可果遂心中候、來廿三日廿八日兩日
日を取候間、同者廿三日と仕度心中候へとも、自然不事行候者、必定廿八
日之分候、就其得御意事數多候間、誠一件料申余候、

冬光

町殿(願基)

○幕府、冬光ノ家領飛驒小八賀郷地下人ノ押妨ヲ退ケ、其所務ヲ全ウ

永正十三年五月五日

三〇一

永正十三年五月十日

三〇二

セシムルコト、文明十六年八月二十三日ノ條ニ、冬光、人ヲシテ義姪烏丸資敦ヲ殺サシムルコト、延徳元年四月二十九日ノ條ニ、幕府、冬光ヲシテ、加賀若松莊領家職ヲ安堵セシムルコト、永正七年十一月九日ノ條ニ見ユ、冬光室、鴨、歿スルコト、便宜左ニ合致ス

〔守光公記〕

○東洋文庫所藏

永正十二年三月廿七日、寅、時々雨下、晚頭晴、○中昨

曉烏丸女中圓寂云々、

四月廿九日、丙、陰晴不定、略、○中烏丸除服事、令申入候處、無相違、仍書遣者也、

日野中納言除服出仕、被遣一通之由、被仰下候也、恐々謹言、

四月廿八日

守光

藏人辨殿

十日、卯、近衛尙通、義植ノ請ニ依リ、家藏ノ足利氏系圖ヲ寫シテ之ヲ贈ル、

〔後法成寺尙通公記〕

八

三月廿四日、乙、晴、○中、從大樹武家御系圖可進之

由、以伯承間、記錄共預置他所之間、召寄可進之由申之、令對面勸一盞、相語云、

被仰大藏卿進上候、二條家門被仰被進候、何相違云々、先年一條家門被進、

紛失云々、

冬光室鴨氏死去

冬光除服出仕

東坊城二條兩家提出ノ分ハ相違ス

一條家ヨリノ分ハ紛失ス

四月十七日、辰、晴、從大樹以伯先日系圖返給、御當家分可寫進之由承之間、得

其意、由令返答、令對面、勸一盞、

五月二日、未、晴、○中、伯以時元宿禰申送、從大樹御系圖此分可然候、可書進之

由承間、得其意之由令返答、

十日、卯、晴、從大樹承系圖、今日書進之、

十一日、辰、晴、大樹系圖書進、御祝著之由承、大智院殿御名字一字書之處、禮節

御祝著候、乍去二字可書之由承之間、書加之即進之、伯以伊治内々申送、即遣

之、

十三日、午、晴、從大樹、以梨阿彌十合十荷被送之、即令對面、給盃賜帷、申畏入之

由令退出、抑從大樹御進所々儀候者、一可被申候へ共、程遠事候之間、御樽被

送之候、一可被聞召之由承候間、御懇志之至、令祝著之由申御返事、家僕召寄

給一盞、系圖書進其御禮也、新典侍局三合二荷遣之、

十三日、卯、參議中山康親ヲ、權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕

四十

參議正三位藤康親、卅二、左近權中將、五月十三日任權中

納言、

永正十三年五月十三日

三〇三

義植物ヲ贈リテ謝ス

但馬山名致豐、安田源次郎二、同國丹生村ヲ充行フ、

〔垣谷文書〕馬〇但

但州美含郡内丹生村事、爲給分相計候、知行不可有相違候也、恐々謹言、

永正十三
五月十三日

山名
致豐花押

安田源次郎殿

十五日、丙武藏青松寺開山舜德雲寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕八 龍穩天菴玄彭禪師法嗣

美濃補陀寺正文ス
武藏大泉寺妙康ニ見ユ
法ヲ支彭ニ受ク

武州萬年山青松寺雲岡舜考舜一本禪師、勢州源姓、生即伏犀貫頂、目炯炯黑

如點漆、十三入濃州、投補陀正文月江和尚爲僧童、一日江舉善財與德雲比丘別峰

相見、因緣問衆、師在傍曰、只爲分明極、翻令所得遲、江顧曰、者小厮兒此德雲也、

乃爲祝髮、書雲岡舜德四大字付之、尋具戒、俾入侍司、陶熏滋久、及江遷化、至武

之大泉見泰叟、時天菴爲第一座、師日親咨請、菴授以大死底話、晝夜體究不懈、

值菴赴龍穩、請師遂上最乘度夏、一朝如廁、失脚倒地、不覺觸破疑團、即往龍穩

見菴、菴曰、那裏見神見鬼、師一喝、菴曰、大死底人在甚處、師曰、夜明簾外主、不墮

偏正方、菴曰、只如投子道不許夜行、投明須到還端的也、無、師曰、首背日頭、腳踏

吉野山ニ

伊勢神官
等ニ迎ヘ
ラレテ清涼
院ヲ開ク

太田持資
ニ請セラ
レ青松寺
ヲ開ル

實地、菴曰、未在、師便禮拜、次日復見菴、菴問、譬如牛駕車、打牛則是、打車則是、師
抽身而立、菴曰、更道一句、師進前問訊曰、不審、菴喜曰、雖然如是、也須善自護持、
辭去直入和州芳野山、痛自韜晦、當是時、勢廟神官一夜同夢、大神告曰、芳野南
谷有肉身大士、汝等疾往敬請來、演暢法要、俱資和光之神德、諸官相議、擇勝地
新建精舍、迎師、逼不得辭、赴之、山名南陽院曰清涼、從此道譽遠播、四方來學者
衆、漸聞于禁庭、皇上召至闕下、師稱疾不起、上不許、師恐出世早、竊遁去、漫游東
海、屆武之河越縣、縛茅居焉、文明八年丙申、江城府主左金吾源持資太田氏、擇城西
創梵刹、聘師爲第一代、號曰萬年山青松寺、受請日僧問、師唱誰家曲、宗風嗣阿
誰、師曰、蝦蟇蚯蚓泥猪疥狗、云、便請洪音和一聲、師曰、徧界沒聲人、云、恁麼則斷
絃續不得、歷劫響冷冷、師曰、非公境界、問、如何是不動尊、師曰、急水灘頭石烏龜、
上堂、不用思而知、不用慮而解、知解俱混、合談何事、良久曰、凍鷄未報家林路、隱
隱行人過雪山、上堂、古人曰、依經解義、三世佛冤、離經一字、同魔說、依與離、既不
可得、畢竟如何、良久曰、鶯遷喬木、頻頻語、蝶戀芳叢、對對飛、道灌請上堂、舉、鼓山
珪禪師頌楊岐栗棘蓬曰、楊岐老人鎖口訣、萬里長城一條鐵、斫牌禪客若到來、
不動金鎚腦門裂、師曰、檀越嘗築此金城湯池、以備太平治業、敢問諸人、五蘊山

永正十三年五月十五日

三〇五

武藏龍穩寺ヲ董ス

相模最乘寺ニ住ス

三要軒ニ退去ス

七十九歳

開創ノ諸寺

甲斐慈照寺ヲ見寂ス

永正十三年五月十五日

三〇六

中有一條鐵道得家國安寧、道不得禍出蕭牆、畢竟如何、截斷佛祖、吹毛常磨、已而繼天菴、席移龍穩、上堂、四海浪平、龍睡穩、九州不見起狼煙、只將少室無私句、地久天長、祝聖君、諸禪德、如何、道得無私句、良久曰、八千子弟今何在、萬里山河屬帝家、永正二年、莅最乘、方朞年、歸龍穩、一日、登案山、眺望、四山竝峙、中有龍湫、意謂、此境甚適禪寂之處矣、其夜夢、青衣女來謂曰、我是業龍也、久居此山谷、沐法味、今化升天去、願師以吾所居為佛寺、資福善、覺有暴風雷雨、棟宇搖動、宿鳥聲喧、詰旦和霽、則山嶽崩塞、溪平夷如掌、聿移寺基而立起、八年辛未歲也、翌歲、命喜州繼席、退去三要軒、丙子夏、示疾、囑諸徒曰、老僧今日將逝矣、只如洞山道閑名已謝、汝等諸人合作麼生、衆皆無對、自代曰、三脚驢兒弄蹄行、三更不借夜明簾、泊然坐化、永正十三年五月十五日也、壽七十九、門徒闍維分塔於龍穩、青松二處、以師稱開祖者、圓福、靜勝、青原長福等、

○太田道灌、青松寺ヲ建テ、舜德ヲ住持ト爲スコト、文明八年是歲ノ條ニ見ユ、甲斐慈照寺ヲ見、駿河觀勝院玄俊寂スルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔廣嚴大通禪師謔語集〕

七

甲斐

真翁見禪師傳

甲之慈照為始祖

禪師諱宗、見字真翁、嗣法桂節、武藏州足立郡人、姓源、岡部氏族也、愁父母無家

武藏大泉寺ニ得度ス

甲斐龍華寺ヲ參ス

慈照寺ヲ開ク

繼子、相俱念於地藏尊年久矣、一夕母夢梵僧入懷有娠、托胎不食葷肉、兒生越年母歿、漸及于長、父誘投於山田大仙、剃髮為僧一員、天性剷利、聽明、凡見聞語言、一觸耳目、能無遺失、到志學年、行脚次路過甲州、禮地藏尊於法城、留旬餘日、儻問堂司云、近里在何知識、司云、三里外在桂節和尚、曾聞能拔學人釘、擬徑進謁節和尚于龍華、便問學人特逐桂香來、伏乞與余香、節云、萬斛天香非世有、十分秋色至今存、云、猶有一人占了也、和尚還知此人麼、節云、徧界不曾藏、云、入香界不被香惑、底人來何處安排、節云、昨日有一僧自天台來、還往南岳去、師禮拜心服之、節容充侍者、親近隨侍、每飽道味、一日節喚師云、盤裏添水、著云、添了也、節云、甚時添了也、云、水大周遍、不知甚時、節云、汝還知水脉耶、云、和尚還知也、節云、汝洗了身垢、云、如我見處、則本來清淨、不受一塵、節云、汝見甚道理、云、性水本湛然、甚麼塵垢之有、節回頭左右云、始知堂中有個無垢的、師機鋒俊逸、如玉走盤、節尋常稱云、桂下一鶴、務侍於左右、一十八載、都來如一朝也、節一日呼師來、密附衣法、了乃為垂誠、及節示寂、遇檀越請、開山慈照、立第一祖、或云、師一日拽杖到龍王端、臨見淵源、不知其深幾千尋、嘗聞、此池國初時、池水湛溢、山壑烈之神、踢烈南山、流通水於東海、湛水枯竭、消黎民憂、然惡龍失居、蟠此池、恒煩人民、

永正十三年五月十五日

三〇七

永正十三年五月十八日

三〇八

法嗣

所以三社之神降下叱封惡龍、到今三社之神每歲依例祭之、師乃授圓頓戒狀、深沈淵源、翌夜有異人、到師前禮拜云、我是龍王端主也、昨日蒙師之戒狀、乍脫惡趣、何以酬德也、師云、與麼此地固欠水便、請汝施之、異人諾出、不知其去處、到明且清淨法水涌出堂前、至今受用無盡、傳謂龍神水、師出足下於謙翁益、天桂(元吉)長、太栖(元吉)齋一流溢四方、未派大長、未後囑席謙翁、端居室內而終、實永正十三丙子年五月念四日也、○日本洞上聯錄異事ナシ、

〔日本洞上聯燈錄〕八 定津悅堂英穆禪師法嗣

駿州觀勝院雲鷹玄俊禪師、參悅堂於定津、堂與語中肯綮、留侍左右、久發其蘊、命首衆、文明(二年)庚子七月二十五日入室、稟衣拂住定津、次遷甲州正覺寺、未幾退位、杖策隱、駿之天柱山之下、緇素爭來請法、就所栖建觀勝院居焉、永正(三年)丙寅主最乘、僧問、如何是和尙家風、師曰、朝看雲片片、暮聽水潺潺、曰、忽遇客來以何祇待、師曰、山川土饅頭、曰、恁麼則謝師供養、師曰、怎生味、問、如何是常存底句、師曰、一片燒痕地、春入又逢青、永正十三年九月廿六日逝、

十八日、庚前太政大臣鷹司政平出家ス、

〔公卿補任〕四十 前太政大臣從一位藤政平、七十前關白、五月十六日出家、

駿河觀勝院玄俊寂
信濃定津寺英穆ニ
參ス
相模最乘寺ヲ董ス

法名上玄道號天理

法名上玄道號天理、

專稱院ト號ス

房平

從一位、氏長者、關白太政大臣、號專稱院、
政平 母、永正十三年五月十六日出家、上玄、

兼輔

〔後法成寺尙通公記〕八

(兼書)「鷹司禪閣法躰以後參賀大樹事」
十一月十日、丁晴、○中鷹司禪閣被參賀大樹亭云

々、法躰以後始也、

○政平薨ズルコト、十四年閏十月十八日ノ條ニ見ユ、

東寺妙玄院領山城西九條下司岩成某、年貢ヲ緩怠スルニ依リ、幕府之ヲ改補シ、同院ヲシテ、所務ヲ全ウセシム、

〔東寺百合文書〕

〇山城一之十五

妙玄院領西九條田地壹町角神田事、下司岩成背請文之旨、年貢以下難澁之間、加催促之處、每度任雅意不致其沙汰云々、言語道斷之次第也、所詮改彼下司職、可全當院所務之旨、被成御下知畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十三年五月十八日

三〇九

法體後始メテ幕府ニ參賀ス

永正十三年五月十八日

永正十三
五月十八日

東寺雜掌

幕府、東寺領内地下人ニ、東河原堰人足ヲ徵ス、

〔東寺百合文書〕〇山城之十六

東河原堰人足事、爲屋別、來廿一日、可致其沙汰之狀如件、

永正十三

五月十八日

貞運(花押)

東寺地下人中

屋別トシ
テ徵ス

兵船十二
艘

坊津ニ留
滞シ時期
ヲ待ツ

國秀ハ備
中連島ノ
住人ノ薩
摩琉球ハ
附庸

六月 大 辛亥 朔

一日、亥備中三宅國秀、琉球ヲ攻略セントシ、兵船ヲ率キテ、薩摩坊津ニ泊
ス、同國守護島津忠隆、之ヲ幕府ニ報ジ、是日、國秀ヲ殺ス、

〔西行雜錄〕薩州坊津一乘院所藏年代記抄出

永正十三年丙子三月廿八日、備中三宅(國秀)和泉守、爲琉球國對治、兵船十二艘下

著薩州坊津、六月一日、和泉守被誅、

〔薩藩舊記〕前集三十一 一(朱香、見年代記)同年、備前國蓮島三宅和泉守、誘十二艘之兵船爲責

琉球國、而先著薩州之坊津、俟時之宜、留滯者久矣、此事既達上聞、故蒙三宅

誅罰之命、誅戮者也、

〔島津正統系圖〕一 十三代 忠隆 又六郎 異本作 連 或作 島之住人三宅

和泉守國秀、儀兵船將攻琉球、而先到著薩州坊津、俟時、留滯日久、夫琉球者、永

亨以來、當家附庸之國也、故言上之于將軍義澄、卿蒙治罰之嚴命、誅戮之、

東大寺、右田弘詮ヲ同寺領周防安田保及比戶田令ノ兩保司職ニ補ス、

是日、弘詮、請文ヲ捧グ、

〔上司文書〕〇周防

永正十三年六月一日

永正十三年六月一日

〔安田保戶田令請文 永正十三年六月一日〕

預申國衙領安田保并戶田令保司職事

右件兩所者、國衙進止地也、而去永正十年、就六ヶ所點定之儀、南都御使節、自京都任被仰下之旨、嚴重申調、要途等遂勘渡訖、就中去年御目代令下向給之時、爲寺門評定隨一題目、近年候人衆給分過分之段、不可然之由蒙仰得其心申調訖、自今以後、難澁之時者、堅可申談之由、奉對御目代、令承諾者也、依此等之儀、又被仰達之旨承畢、

一件兩所爲案堵料、捌百玖拾餘石米遂應納畢、

一件兩所安田保正稅官物定米四拾石、戶田令正稅官物定米拾五石、以年內爲期限、可爲應納事、

一於以後、御目代或使節下向之時者、可抽忠功事、

一國衙申次之儀、雖不存知、不相替內々可令馳走事、

一萬一至正稅未濟者、雖爲何時可被召放事、

右條々、雖爲一事令違犯者、奉始氏神、日本國大小神祇、殊大佛御罰可罷蒙者也、仍請文如件、

候人衆ノ給分過分

安堵料
正稅官物

國衙申次
正稅未濟
放タルベシ

三二二

永正十三年六月一日

兵庫頭弘詮〔右田〕判

二日、幕府、京都北口柴木公事錢ヲ停廢ス、

〔古文書集〕二十三集

當公方様義種御代也、

北口岩倉 長谷 花崗柴木公事錢事

花崗一和尚

諸關停止
等ニ依リ
停廢ス

右内膳申請之間、雖被預置之、云諸□停止云取様物忿、被停廢訖、若猶有□〔違背方〕輩者、爲町人可擲進之、此旨令違犯者、可被處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

永正十三年六月二日

松田 對馬守平朝臣〔飛騨〕判
齊藤 上野介藤原朝臣〔時基〕同
齊藤 美濃守藤原朝臣〔英雄〕同

幕府、山城誓願寺ニ、禁制ヲ掲グ、

〔室町家御内書案〕上

禁制

誓願寺 付諾〔家九〕乘舍

右軍勢甲乙人等寄宿事、一切被停止訖、若有令違犯之輩者、速可被處罪科之

永正十三年六月二日

三二三

軍勢等ノ寄宿ヲ禁

永正十三年六月四日

由、所被仰下也、仍下知如件、

永正十三年六月二日

前丹後守平朝臣判

近江守三善朝臣判

四日、細川高國連歌會ヲ張行ス、

〔宇都山記〕五月のとくして、六月四日に、右京兆亭泉殿よして、一日に二

泉殿ニテ
張行
一日二百
句

宗長ノ句

影すをし空にゆめとの夕月夜
夜ふき酒をてゝる満りかへし、

○近衛尙通第小月次連歌會ノコト等、便宜左ニ合致ス、

〔後法成寺尙通公記〕

八月 正月廿九日、晴從午刻雨下、有小月次會、發句亞

相也、

二月廿五日、晴陰雨下、於景陽軒有連歌、

三月廿二日、晴有月次連歌、

五月廿四日、晴陰月次會也、武者小路一位等來、

六月七日、晴月次會也

景陽軒連
歌會

近衛尙通
第小月次
連歌會

廿九日、晴時々小雨濺、有連歌會、

八月八日、晴月次會有之、

五日、花山院政長ノ孫兼雄、元服スルニ依リ、禁色加級ヲ奏請ス、尋テ、

侍從右近衛中將ニ任ゼラレ、從三位ニ敍セララル、

〔御湯殿上日記〕京都御所東山御文 永正十三年六月五日、花山院のま

こわねおのあそん、をふまゆふくとて、きんしきあきうの事申さるゝ、御心

えのよしおほをらるゝ、

廿六日、花山院侍從右近中將を申さるゝ、ちよつきよあり、

〔後法成寺尙通公記〕 六月廿二日、花山院前左府孫、近日加首服之

由聞及之間、以光繼朝臣遣太刀、金

〔公卿補任〕四十 非參議從三位藤兼雄、十八、七月日敍、中將歟、前中納言忠

輔卿男、母、

○冷泉範遠元服シ、侍從ニ任ゼラル、コト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕京都御所東山御文 六月廿四日、中のりと袂あす志

ゆふくをくゝふるとして侍從を申、おあしくちよつきよ、右少辨ひろう、御ウ

永正十三年六月五日

近衛尙通
太刀ヲ遣
リテ賀ス

冷泉範遠
元服ス
侍從ノ勅
許

御禮ニ祇候ス

口宣案

うふり申いとさるゝ、

廿五日のりと抜御といより、御といめん、御をまよてあり、御さく月とふ、

〔賴繼卿記〕日〇歴代殘闕
記百所收

上卿帥中納言

廿五日

藤原範遠冷泉子也

宣任侍從

七日、下野那須資親、養子資永ヲ卻ケテ、實子資久ヲ立テントシ、太田原胤清等ニ遺命スル所アリ、胤清等、資久ヲ援ケテ、資永ヲ福原城ニ攻ム、資永、潛ニ資久ヲ奪ヒ、是日、之ヲ刺殺シテ自刃ス、仍リテ、那須上下ノ二莊、烏山城主那須資房ノ有ト爲ル、

〔那須記〕下野國那須太守大膳大夫藤原資親肥前守明資の嫡子、大膳大夫氏資孫也、始ハ三郎と云、嗣子なく、結城結城政朝の東白川義永の二男を養子として娘ヲ嫁シ、資永と稱ス、其后資親實子出生して資久と號セ、寵愛の餘リ、是を家督ふせんと思ひ、太田原出雲守胤清、同備前守資清父子と遺言し々

資永ハ結城政朝ノ二男

資永開夜ニ黒羽城ニ放火シテ資久ヲ奪フ
上那須家斷絶ス

るき、いゝもして資永を討て、資久を立へしと云り、此故ハ太田原父子兵を發し、資永の居城福原を攻る、然るハ資永謀を以、闇夜ハ軍士七八人忍セ、黒羽根城の東之出櫓ハ火をあげ、其紛ハ西河岸より彼軍兵忍入、資久を生捕て福原ハ歸りし、終ハ資永利を失ひ、資久を指殺し、生害をとける、是よりして、上那須の家絶て、下那須の大炊介資房上下の兩莊を合領ス、此人ハ越後守資持ハ孫、伊豫守資實ハ子也、永正十三年丙子六月七日、上下の那須一統し畢宇都宮ノ旗下也

〔那須譜見聞録〕十 永正年中、兩那須と聞へしハ、福原ハ資親、烏山の城に

資房あり、然るハ上庄の資親初無男子、女子壹人在、其頃白川の城主結城義親の次男を迎カ取、爲婿讓家督號那須資永、其後老後ハ資親子あり、號資久、後資親乃養子資永親子之中不快也、資親病死之時、太田原出雲守、同備前守を近付、後ハ資永を亡し、資久を代に可立由遺言有て逝去を、百日計ありて、大田原備前軍勢、福原の城へ寄、合戰及數度々る、資永謀略、暗夜に忍軍兵七八人遣し、黒羽の城乃東出櫓ハ火矢を射懸、其騒ハ西の河岸より資永忍入て、小人資久を懷捕て福原の城へ飯りたる、大田原大將を被捕し故、福原

の城へ押寄、身命を捨て戦、遂に福原の城拔責落、永正十三年六月七日、先資久を刺殺、其後資永自害之、此時兩那須一流して、資房子息政資山田の城籠、資房烏山に在城也、

〔那須譜見聞録〕

十一

資親初無男子、白河義永次男以我子妻之、令繼於家、

號資永、資親後有男子、名資久、資親以資久欲備於家督、太田原出雲守、同備前守父子遺言曰、予逝去之後、討資永、可令繼家於資久云々、因茲太田原父子果企謀叛、爲滅資永、責福原之城速也、資永略而軍兵七八人、暗夜黑羽城東之出矢倉放火、其紛西從河岸忍入、資久懷取福原城飯、雖然終打負、資久差害資永、自害畢、從此時資房領兩莊、永正十三年丙子六月七日上下爲一統、

〔大關係譜略傳〕

永正年中、那須資親ハ上那須ヲ領ス、其繼子ニ同太郎資永

資親資久
ヲ山田城
ニ置キ大
關宗増等
ヲシテ傳
育セシム

トテ、白川義永ノ二男ヲ婿ニ取テ養子トス、其後資親男子ヲ儲テ、三歳ノ時、山田城ニ移テ、山田次郎資久ト云、大關宗増ト金丸肥前預テ養育ス、資親病死ノ後ニ、太田原出雲守、那須資親ノ遺言ニテ、資永ヲ討ヘキヲ企ツ、宗増、金丸二人聞之諫メケル、

永正十一年甲戌八月二日、蛭田ノ原へ軍勢ヲ押出シテ陣ヲ張ル、資永ノ居

宗増福原
城攻メ先
陣ヲナス

城福原城へ押寄せ攻ントハカル、蘆野一番ニ川へ馬ヲ打入ル、味方ノ者共繼テ三百餘騎川へ打入ル所ニ、川水早ク、サカマク波ニ打渡リカネテ、亂杭ニ掛リ、逆茂木ニ掛テ馬ノ足ヲ損シ、歩行武者ハ大綱ニ當リ、人馬自由ナラス、城中ヨリハ川端ニ武者四五十人打出テ、弓ヲ以テ散々ニ射立ニ、寄手多ク討死シ、既ニ敗北セントスル時、宗増馬ヲ進テ、鎧踏ハリ、味方ノ人々、僅ノ小城ヲ攻ニ時ヲ移事、言カヒナキ者共哉、某先陣ヲシテ、各ノ手本ニナラント、敵ノ真中ニ懸入レハ、津田八郎政信、松本彌市國友ヲ先トシテ、三十餘騎身命ヲ捨テ力戦ス、太田原カ佐久山ヲ歴テ、敵ノ後ノ在家へ放火セシカハ、敵ノ士大將關十郎（時義）是ヲ見テ引退ケリ、味方モ蛭田ノ陣引取ケル、其夜福原城ヨリ、關十郎、田川（時義）太郎兵士二人圍ヲ忍出テ、山田城へ忍入、資久ヲ奪取テ福原へ歸リ、資永ニ見セ首ヲ打落ス、寄手兵此事夢ニモ知ラス、翌日早天ニ福原城近ク攻寄所ニ、城中ノ櫓ヨリ、資久ノ首ヲ白衣ニ包ミ城下へ投ル、寄手取見レハ、資久ノ首ナレハ、宗増モ太田原モ、共後悔スレモ不及空シク引取ケル、○下

〔下野黒羽大關家譜〕

美作守宗増繼家督、明應年中、居城自黒羽移、堅田郷山田、永正

永正十三年六月七日

三二〇

年中那須資親依遺言被賴其子資久養育於山田城大田原父子者攻福原城資永以計略殘人數於從七八人暗夜忍入吾城懸火乘其騷奪取資久歸于福原雖戰不利而刺殺資久自害

〔那須系圖〕

資氏

資之

氏資

明資

資親

實明資舍弟播磨守大膳大夫

資永

二郎大膳大夫

實白川結城上野介義永次男也資親初無子故養之

女 宇都宮成綱室

女 資永室

女 澤村二郎室

資久 次郎

資親實子也兄弟爭家督及合戰資永擒資久後年終資永打負殺害資久資永自殺依之下那須資房合上下兩庄而領之于時永正十三年六月也

資重

資持

資實

資房

太郎大炊助左衛門大夫修理大夫

永正十三年丙子六月七日踏資永合上下以爲一流

女子三人

武茂室
佐竹氏義室
稻澤播磨守室

資衡

資仲

政資

〔那須系圖〕

氏資

明資

永正十三年六月七日

三二一

永正十三年六月七日

三二二

資親

女子 資永 那須太郎養子、資親初無子而爲子、資永實白川結城義永息也、

資久 爲次郎實生子、

女子 宇都宮成綱妻、

資重

資持

資實

資房 太郎、大膳大夫、法名笑月源藤、

某

女子

〔白河結城系圖〕

政朝 白河彈正少弼、法名心江道總、

顯頼 左兵衛佐、法號道永長溪、

資永 那須太郎初那須資親無男、養顯頼弟爲婿、家名資永、後資親生男資久、欲令資久爲家督、遺言於大田原出雲守其子備前守曰、我沒後必令資久、

繼家、由是、大田原急攻福原城、資永計策、遣士卒七八人、暗夜至黑羽城、放火于東橋、乘其騷亂、入自西河岸、懷抱資久、還福原城、與大田原相戰、終負、而自殺、資久

〔諸家系圖纂〕

結城 十七上

政朝 彈正少弼、道號龜山、諱道總、義尹公方、越中國放生津、御下向時參御方、

資永 那須太郎、那須資親養子、

八日、^戊興福寺一乘院良譽、同寺衆徒等ノ、同院ニ投石スルヲ訴フルニ依リ、幕府、興福寺ニ命ジテ、犯人ヲ成敗セシム、明年之ヲ勅免セラル、

〔後法成寺尙通公記〕

八 六月四日、^甲晴、從南都有註進之儀、以宗寅被申送、

亂舞ノ時
ノ投石
ノ近衛
ノ良譽
テ訴フ
以衛

其子細者、門跡與寺門喧嘩之事、^(朱卷)門跡與寺門喧嘩之事、自南都注進之事、人云々、前代未聞之儀也、然間公方入御耳、可被加御成敗之由、可申沙汰旨被申上也、即申入也、

五日、^乙晴、及晚夕立、種村三郎許^ハ遣長泰申遣之處、御番ニ祇候之間、罷出候者可申聞之由、奏者申云々、[○]中宗寅一桶兩種進上之、

七日、^丁晴、[○]中召中兵衛尉、内々京兆^ハ一乘院被申上子細申遣之、宗寅揚梅一籠進上之、種村三郎許^ハ五百疋遣之、先折番計也、内々致披露處、上意無別

細川高國
ニモ告グ

永正十三年六月八日

三二二

幕府興福寺及盛下井順スニ

永正十三年六月八日

三二四

儀之間祝著也、猶給書狀、可申入之由申送間、遣書狀也、
 八日、戊午晴、及晚夕立、今朝種村方へ遣書狀處、即致披露、成御下知之間、祝著由
 又遣書狀也、寺門筒井(順盛)被成御下知也、種村同、筒井(順興)成身院、寺門等遣書狀也、
 九日、己未晴、惣寅今日下向、種村使下之云々、
 十四日、甲子晴、略中京兆書狀當來、即波々伯部兵庫許之遣之、明日副狀可進上
 之由申之間、祝著此事也、
 十五日、乙丑晴、南都之京兆書狀下之、
 十八日、戊辰晴、如昨日小雨濺、雷鳴、略中從南都使僧上洛、自寺門得其意由、京兆
 之有返事、
 廿日、庚午晴、及晚夕立、雷鳴頻、入夜惣寅以康上洛、
 廿一日、辛未晴、略中從一乘院、德大寺女中三荷兩種、畠山式部少輔二荷兩種、種
 村三郎五百疋、淨歡齋藤美濃守、松田對馬守、波々伯部兵庫助、四人方へ二荷
 兩種つゝ被遣之、
 廿六日、丙子晴、及晚夕立、略中波々伯部兵庫助狀、京兆書狀相調進上之、寄子持
 參、令對面、

尙通長者宣ヲ下ス

良譽謝禮トシテ上洛ス犯人七人出家ヲ退ス

義植良譽ニ對面ス

順盛ノ人足輕等犯ノ人ト共ニ違亂ヲ爲ス

永正十三年六月八日

三二五

廿九日、己卯晴、時々小雨濺、略中從南都有返事、
 七月六日、丙戌晴、風吹、心中念誦如例、惣寅下向、長者宣下之、
 八月五日、甲寅晴、陰雨下、從南都有注進、
 十月廿八日、丙子降雨、及晚晴、一乘院上洛也、記六少々召寄之、共衆給夕飯、今日
 就礫之儀、嚴重御成敗之間、其御禮也、彼七人出家退出云々、
 十一月一日、戊寅晴、一乘院御汗御飯振舞也、鞍馬寺參詣、
 二日、己卯晴、一乘院參賀、十合十荷、今度之御禮、盡被進之間、火打袋、金、銀、被進
 之、有御對面云々、
 三日、庚辰晴、小雨洒、日吉社之門參詣、
 六日、癸未晴、一門鷹司禪閣被出、法泉坊進三種進上之、
 七日、甲申雨下、入夜飛鳥井亞相、一門之進御樽三荷五色、鮭一、從南都一門之五
 荷五種被進上之、
 八日、乙酉晴、時々小雨、一門被行繼孝院、三荷三種被送之、及大飲云々、
 九日、丙戌晴、風吹、略中繼孝院爲昨日禮來申門跡、及晚歸寺、自南都有注進、筒井
 少々足輕、彼罪科七人衆等出張云々、言語道斷事也、

永正十三年六月八日

三二六

大内義興
一乘院ニ
制札ヲ出
スコトヲ
諾ス

良譽奈良
ニ歸ル

瓦葺トス
大工ハ法
隆寺ヨリ
召下ス

十日、丁晴、略○中南都注進之趣、今日種村三郎、松田對馬守許被申遣也、
十一日、子晴、略○中從大内京兆（義興）、一乘院制札可調進之由有返事、
十五日、辰、晴、飛鳥井又一門（義興）、一盞申沙汰、及大飲、
十六日、巳、晴、從德大寺女中食籠一二荷、一門被送之、
十七日、午、晴、陰、小雨洒、雹飛散、一乘院下向、共衆召出給一盞、
〔學侶引付寫〕○内閣文庫所藏 永正十四年五月十五日、
一就一乘院家礫之儀、被處勅勸七人衆事、御赦免之由、長者宣到來之間、其分
以廻覽、六方被申遣畢、

播磨斑鳩寺、築地ヲ修造ス、尋テ、同國守護赤松義村等、其費ヲ寄進ス、

〔古代取集記錄〕○播磨 永正十三年丙子六月八日ヨリ斑鳩寺（義興）修造

沙汰之、元之築地者、萱屋覆ニテ（義興）以外見苦敷間、新調（義興）瓦葺（義興）沙汰之、
同八月、瓦作始、大工者法隆寺ヨリ召下、二人シテ仕ル、
同九月廿一日ヨリ二王堂西ノ脇、築始、平方村ヨリ普請沙汰之、次第（義興）六ヶ
村ニ申付沙汰之畢、
瓦土ハ當庄内大ハサ溝之内ヲ取之、又榎森ノ樋ツメノ田ヲ取之、

奉加
法隆寺ヨ
リノ下行

赤松村秀
浦上村宗
圓山新兵
衛尉
國中ニ勸
進ス

勅定ニ依
ル

同捧（奉下同シ）加之事、同御判赤松殿義村公御沙汰也、

拾五石 會米定、 法隆寺ヨリ下行之、

拾貫文 赤松兵部少輔殿義村

拾貫文 赤松下野守殿村秀

拾貫文 浦上掃部助村宗

伍拾貫文 當庄宿村圓山新兵衛尉

此外寺庵名主百姓各々捧加在之、國中勸進之、

勸進聖宗玄
筆取猛海

于時在庄

脇之坊懷俊

九日、紀侍從河緒實治ノ女清子ヲ内侍ト爲ス、

〔後法成寺尙通公記〕（朱書）侍從三小位女ハタクロミ筆ヲ申出事并被召内侍事、
六月九日、巳、晴、略○中侍從三位小女始御ハタクロミ
（河緒實治）

申出筆、御樽進上之、今度内侍召進之、依勅定也、

〔尊卑分脈〕（藤原氏）公季孫
實治（參木、正二、權中納言、兵部卿、左中將、母惟宗相豐女、）

季富（早世、左中將、正四下、才、天文六、卒、卅五、才、）

永正十三年六月九日

三二七

女子後柏原院新内侍清子
母同上

○清子ヲ内侍ト爲スノ日詳ナラズ、姑ク是日ニ掲グ、

十一日辛酉幕府諸將ヲシテ、禁裏御門及ビ義植第門ヲ警衛セシム、

〔親孝日記〕六月十一、

禁裏御門
順役畠山尙

一禁裏御門役、畠山殿當月中、來月之儀外様衆ニ可被仰出候歟、如何之由伺
被申候、御意得候旨_{在之}、

義植第東
門役益田
宗兼吉見
賴興

一御所様東御門役之事、當月中益田(宗兼)、仍來月之事、可爲吉見殿歟之由被申、尤
其心得之由御返事在之、以異阿任申、松對(阿伊)、(松田英致)、以山内源四郎十二、申遣、出仕
之間、奏者窪ニ申置云々、

十八日、

禁裏御門
郎役仁木次

一禁裏御門役之事、仁木次郎殿可被勤仕申之由、御請被申候云々、

一公方様東御門、吉見殿勤仕可被申候云々、

義植第西
門總役畠山

一西御門役來月より三ヶ月分能登守護殿勤仕可被申云々、此三ヶ月條執事
代被申分、則令披露、尤可然之旨御返事在之、

七月、

一御門役事、松對より同名以八郎左衛門佐殿、頭人へ伺被申候、御返事條々
在之、

十二日、壬戌從三位西園寺實宣ヲ正三位ニ敘ス、

〔公卿補任〕四十 權中納言從三位藤實宣、廿一、六月十二日敘正三位、

〔御湯殿上日記〕庫記錄甲三十九所收 六月十三日、さいおん寺正三位の
事ちよつきよあり、

勅許

御禮ニ祇
候ス

廿二日、さいおん寺正三の此御さい、下をろとよて申さるゝ、

幕府、舊ニ依り、山城六條八幡宮御供竝ニ燈油料所敷地ノ棟別、地口人夫
以下ノ臨時課役等ヲ免除ス、

〔若宮八幡宮文書〕城○山

六條八幡宮御供并燈油料所樋口六條坊門與室町西洞院間八町々、并針少
路猪熊與堀河間四町々敷地事、棟別、地口、人夫以下臨時課役等、任先例、爲免
除地、彌全領知、可被專神用之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年六月十二日

河内守(花押)
下野守(花押)

永正十三年六月二十四日 二十六日

宜左ニ合彼ス、

〔後法成寺尚通公記〕八

〔宋書〕高辻中納言爲讀書被召事 二月廿六日〔近衛種家〕夜來雨下、高辻中納言、亞相爲讀書

召寄之、今日始毛詩勸一盞、杉原十帖、綿一遣之、

二十四日〔世尊寺〕刑部卿世尊寺行季ヲ參議ニ任ズ、

〔公卿補任〕六十四 參議正三位藤行季〔世尊寺〕、六月廿四日任、

〔賴繼卿記〕〇歴代殘闕

上卿帥中納言〔三條西公傳〕

六月廿四日

刑部卿藤原朝臣 世尊寺、

宜任參議、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文

庫記録甲三十九所收 六月廿四日、せそん寺さんきの事

申、ちよつきよあり、

二十六日〔丙〕山城等持院、同院領朱雀ト東寺領八條ト用水ヲ争ヒ、畠山順光ノ被官堤三郎右衛門尉、八條ノ住民ヲ援ケテ亂暴スト訴フルニ依リ、幕府、三郎右衛門尉ヲ罪セントス、尋テ之ヲ宥ス、

近衛種家
高辻章長
ヲ招キモ
シム講ゼ

口宣案

勅許

三郎右衛門
罪問
ノ罪問
ハル承仕
東寺坊モ
罪セラレ
トス

等持院二
問狀ヲ捧
グ

三三二

〔東寺百合文書〕〇山城 六十一之七十二

等持院雜掌申今度東寺與朱雀用水相論事、於水口令打擲在所童部、剩堤三郎右衛門尉催諸勢寄來之間、打防之處、百姓次郎九良男令打死云々、以外之次第也、既至故戰之儀者、御法炳焉之上者、於彼堤者可被行死罪、次當寺承仕參河一類以下、令同意寄懸之條、背御法間、一段堅可被加下知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十三年六月廿六日

〔飯尾之秀〕下野守(花押)
〔菅原基規〕美濃守(花押)

東寺雜掌

〔東寺百合文書〕〇山城 二十六之五十六

御折紙之旨、委細披見申候、仍從等持院二問狀到來候、内々御左右可申候覺語之處、示給候、御出京候て可有御移候、恐々謹言、

七月十三日

〔神尾三郎左衛門尉〕正次(花押)

東寺雜掌 御返事

〔東寺百合文書〕〇山城 六十一之七十五

永正十三年六月二十六日

三三三

永正十三年六月二十六日

三三四

東寺雜掌重謹支言上

右子細者、就朱雀與所々用水相論喧嘩事、從等持院重申狀、一々無謂間事、一於彼水口八條之次郎太郎男與朱雀之者喧嘩仕出之砌、於三郎右衛門者、不在合其場之間、非喧嘩之相手之由、先度申上候處、重彼申狀之通、次郎太郎男喧嘩仕出お、相手共被同心畢、然上者、彼本人對次郎太郎可被散憤之處、無謂喧嘩不仕以三郎右衛門本人與被申事、太以無理之申狀也、但彼次郎太郎男三郎右衛門下人之由被申歟、無案内之至也、彼男元者、雖為三郎右衛門下人、有子細而、自永正十年、為寺家之成敗三郎右衛門放被官、依令追出境內、從爾以降放扶持、令居住他領者也、假昨日迄雖為下人、自今日至放扶持者、自其已後之咎、先主爭可致存知乎、宜有御法者歟、

一如彼申狀者、次郎太郎朱雀童打擲之時、地下之年寄正圓入道罷出無事之調法申處、東寺者共走合、理不盡雖打懸飛礮、為年寄之儀間、色々堰之堪忍處、彼三郎右衛門朱雀お可破却之由吐惡口、走歸東寺仁、無程催諸勢寄來條、本人之段令露顯云々、一々仁恣構虛言被申掠之條、無是非次第也、先用水相論砌、正圓入道已下罷出、討者理不盡、打懸飛礮、八條之次郎三郎與

申者并境內之彥四郎與申者兩人共、以飛礮被打破面、既被疵候間、正圓罷出無事之調法仕之由、虛言也、次三郎右衛門朱雀お可破却之由、吐惡口走歸東寺云々、如此申狀者、三郎右衛門自最初喧嘩之所仁在之由被申歟、先度如申上、於三郎右衛門者、曾以喧嘩之場仁不在合之間、爭吐惡口可走歸東寺乎、一向虛言之申事、御沙汰之限也、次三郎右衛門為前鋒寄來云々、彼者其砌依有他所、既及取合之後各罷出之間、非前懸又雖為一人、得三郎右衛門之語罷出之輩、曾以不可在之也、抑此井口相論之事者、德大寺御領お為面、用水者共、每度朱雀與致相論事也、然間八條東寺其、其外近所之衆馳集之處、如此種々構謀言掠公儀、三郎右衛門一人被召出、可被申成本人結構、何之宿意候乎、更以無覺悟子細也、何篇巧言雖被掠申、於無實之讒訴者、可申披者也、肝要堅被成御糺明、就實否被成御成敗者、可忝存者也、

一寺官參河為田繩手大將寄來云々、先度如申上、參河其外年罷寄候者共、為竹千代、若輩制止罷出候處、田噉之大將之由被申條、理不盡之申狀也、參河其時帶甲冑、持兵具罷出之由申歟、白晝之儀、更不可有其隱、堅可被成御

永正十三年六月二十六日

三三五

尋也、於參河者不著具足、剩不指腰刀、帷仁。親子絶下別シ庖下罷出事歷然也、引
率諸勢差懸他所大將、帷計仁。親子然方大將之由寺訴子細庖下之躰、近比珍敷次第也、種々謀言、還
而回述言辭者也、

一地下仁責入、及難儀候間、唐木崎平次郎霍亂仕、雖爲以外、走出於里之橋上、
三河被官入谷彌四郎與相戰云々、彼唐木崎平次郎於霍亂之儀者、所不存
知仕、地下仁責入刻、初者里之橋迄罷出候由申歟、以外之虛言也、先度支狀
如申上、最初用水相論之時者、以飛礮打合之處、彼平次郎帶兵具罷出、其
外お矢構、八條并境內之水入共お少過、水口歡喜寺之畠邊迄一二町追懸
候て、依及生涯、各憎旬之間、八條境內其外近所隣鄉之者共、不及子細各罷
出、朱雀衆お追返、不慮之取合令出來者也、所詮用水相論者、八條之次郎太
郎男與朱雀之者仕出、其後及弓矢事者、唐木崎平次郎帶兵具罷出、然而追
懸水入、今度之取合出來歟、於故戰之御法違背者、彼方結構也、一番帶兵
具罷出事、將自朱雀仕出歟、自我等仕出歟、慥被成御尋、就此段、故戰御法違
背之儀者可令落居者歟、次入谷彌四郎、參河被官之由申歟、於當寺々官號
中綱職掌兩座、相順寺役者共在之、入谷彌四郎者職掌一分也、更以非參河

唐木崎平次郎兵具出

爭論ノハ八頭人ノ發
郎次郎ハ朱雀
者ト朱雀

東寺ヨリ
朱雀井口
ニ押寄セ
ラタルニ
ズニア

被官、併無案内之申事也、分明仁無存知者、餘以心安被申樣也、因此思彼仁、
次郎太郎男就舊主三郎右衛門下人之由被申、是又無案内之至歟、不然者
被擬申掠公聽歟、同前之謀略、造意以外之儀也、
次自當寺寄來朱雀之由、度々被申歟、先度如申上、彼水口他所仁在之者、一
旦所被申似有言據歟、然而彼井口依爲朱雀之里際、所々輩水相論之喧嘩
馳集彼砌之處、寄絆於左右、自當寺差懸朱雀之由被申紛之條、奸謀之讒
訴、絕常篇者乎、

一假雖有子細、應御下知、可有口訴之處三郎右衛門并參河事、令許容、支置公儀申掠事、向後引懸不可然云々、無覺
悟申狀也、其子細者、今度一方向仁依被申掠、雖被成御下知、無謬之旨歟、申
上處、爲理盡之御政道、可被成御糺明之由、忝依被仰出、應御下知申上子細
之處、恣一方向仁被企申掠公儀之條、向後之引懸太不可然者也、次三郎右
衛門并參河事、致訴言申上之由被申也、聊爾之申狀也、於當寺者、依爲近所
之事、當座喧嘩之次第始末、令存知之間、非本人之段申上者也、於等持院者、
北山與朱雀遠境之間、當座之儀恐不可有存知之處、在所之族恣搆謀書、掠
注進申旨被許容、卒爾仁被達上聞事、還聊爾至極之被申事也、此等之旨堅

永正十三年六月二十六日

三三八

被披聞召、被成御成敗者、忝畏入存者也、仍重而謹支言上如件、奉彌可抽御
祈精誠者也、

永正十三年七月十八日

〔東寺百合文書〕

〇チ三十三之三十八
山城

幕府現地
ノ名主等
ヲシテ實
情ヲ注進
セシム

先度七條朱雀用水相論事、等持院雜掌於水口喧嘩以後、重自東寺催諸勢寄
來候旨申之、被尋下東寺雜掌之處、水口相論砌及鉾楯、朱雀住人追懸之間、從
近邊之所々、兩方合力衆出合相戰、或被疵、或打死在之段申之、左右申狀相違
之儀、非無疑貽、所詮止最負沙汰、其時現形趣具可注申之、不可有遲怠之由被
仰出候也、仍執達如件、

永正十三

九月廿一日

(增藤) 基雄 判

(飯尾) 之秀 判

(松田) 英致 判

八條

八條名主沙汰人中

先度七條朱雀用水相論事、等持院雜掌於水口喧嘩以後、重自東寺催諸勢寄

七條

東七條ノ
注進

來候旨申之、被尋下東寺雜掌之處、水口相論砌及鉾楯、朱雀住人追懸之間、從
近邊之所々、兩方合力衆出合相戰、或被疵、或死者在之段申之、左右申狀相違
之儀、非無疑貽、所詮止最負沙汰、其時現形趣具可注申之、不可有遲怠之由被
仰出候也、仍執達如件、

永正十三

九月廿一日

基雄 判

之秀 判

英致 判

七條名主御沙汰人中

就七條朱雀用水相論喧嘩之儀、被成下御尋之御下知候、在所之面々一人も
兩方ハ罷出候間、當座之子細不存候、然共風聞者、東寺衆於朱雀構口被打
人、則被引候事者無隱候、恐惶謹言、

九月廿七日

東七條

三郎衛門判

惣中

御奉行所人々御中

永正十三年六月二十六日

三三九

永正十三年六月二十六日

三四〇

就七條朱雀東寺^(唯方)嘩吡之儀御尋之御下知、存知之旨申上候、朱雀之東構口、
て取相、朱雀之者一人被打、被打引候事無紛候、公事之子細者不致存知候、恐々
謹言、

飯尾下野守殿

松田對馬守殿

齋藤美濃守殿 人々御中

〔東寺百合文書〕

〇山城一之二十五

先度七條朱雀用水相論事、等持院雜掌、於水口喧嘩之時、催諸勢寄來之旨申
之、被尋下東寺雜掌處、水口相論砌及鉾楯、朱雀住人追懸候間、自近邊所々合
力之衆出合、或被疵、或死者在之段申之、左右申狀相違條、非無疑貽、其時次第、
無最負之儀、現形趣可注申之由、所被仰出之狀如件、

永正十三
十月十日

英致(花押)

之秀(花押)

吉祥寺北條

吉祥寺北條

先度七條朱雀用水相論事、等持院雜掌、於水口喧嘩時、自東寺寄來之旨申之、
被尋下東寺之處、水口相論之砌及鉾楯、朱雀住人追懸候間、自近邊所々兩方
合力衆出合、或被疵、或死者在之段申之、左右申狀非無疑貽、其時次第、無最負
儀、現形之趣、可注申之由、所被仰出之狀如件、

永正十三
十月十日

英致(花押)

之秀(花押)

西唐橋惣庄中

西唐橋

先度七條朱雀用水相論事、等持院雜掌、於水口喧嘩時、自東寺催諸勢寄來之
旨申之、被尋下東寺雜掌之處、水口相論之砌及鉾楯、朱雀住人追懸之間、自近
邊所々兩方合力衆出合、或被疵、或死者在之段申之、左右申狀、非無疑貽、所詮
其時次第、無最負之儀、現形之趣、可注申之由、所被仰出之狀如件、

永正十三
十月十日

英致(花押)

之秀(花押)

永正十三年六月二十六日

三四一

永正十三年六月二十六日

西九條惣庄中

注進ノ諸
院ニハ等
ノ與力持

喧嘩ノ後
東寺ヨリ
攻寄セタ
ルコトナ

〔東寺百合文書〕○山城二十六之二十九

（端裏書）
就水論伊兵門申狀案十永一十三

朱雀水論喧嘩事、於子細者、度々陳答之令言上候、然於其上猶近郷へ被成御尋候、就其從朱雀可被成御尋在所共、不論遠近、以與力之郷指申候歟、於當寺者、強可指申在所無之候、就近所被成御尋候者、雖爲何郷、於無私曲者、當座之儀在儘可申上候歟、雖然自彼方所々指申之間、近所之儀三四ヶ所申上條、先度既就御尋、自一兩所當座之儀申上趣、於水口彼方之者一人被誅候由申上候、於此儀者、度々申狀之事舊候、肝要今度御尋之旨趣者、喧嘩之後、重而自當寺差寄歟否之由、具可申上旨雖被尋下、爲一所喧嘩以後重差寄之由申上在所無之上者、於當寺者、更以無其誤候哉、當座喧嘩仕出候於相手者、是又別人在事候、縱又今度重而就御尋、得彼方々語、構私申上在所雖有之、於其上被尋下當寺候者、對其在所可申披候、此等之旨内々具被達上聞、寺家不失面目之樣御取合奉憑外無他候、當年預以外歡樂仕無正躰候間、愚僧内々申入候恐々、

十一月三日

了源判

幕府三郎
右衛門尉
無罪ノ尉
ノ順光
= 島山
報ズ

七條朱雀用水相論之時、喧嘩事堤三郎右衛門尉爲本人寄來候旨、等持院雜掌訴申候、御糺明之砌、八條次郎太郎男令逐電候上者、堤非本人之段、令現形候、然者彼院雜掌所差申相違候條、故戰之儀被閣候、由御返事候、御出陣之時、可被召具之旨、可得御意候、恐惶謹言、

十一月八日

英致判

島山式部少輔殿 參御宿所

〔東寺百合文書〕○山城三十八

七條朱雀用水事、自等持院堤三郎右衛門尉爲本人寄來之旨、訴申候、於當寺者、當座之喧嘩段被申候間、御糺明之處、堤子島山吏部被官候間、事子細被申入候、八條次郎太郎男現形候哉、既逐電之條、等持院所差申候相違之間、故戰儀被閣候、此段吏部へ御返事候、爲御心得申候、恐々謹言、

十一月十日

英致判

東寺雜掌

永正十三年六月二十六日

三十日、庚辰伏見宮邦高親王、薙髮セラル、

〔伏見宮御系譜〕

四代 貞常親王

五代 邦高親王 舊邦康

母從三位源盈子、庭田大納言重有卿女

永正十三年丙子六月十九日落飾、六十法名惠空、戒師、

貞敦親王御自筆記云、故宮御落飾、六十此時予廿九、永正十三戊子年六月晦日、於伏見、

六代 貞敦親王

〔續史愚抄〕

四十四 後柏原院中

六月三十日、庚辰、式部卿邦高親王 伏見落飾、法名

惠空、六十自今日號安養院、傳紹

○伏見宮御系譜、十九日ト爲ス、同書所引ノ貞敦親王御自筆記ニ據リ、姑ク是日ニ掲グ、

是月、義種、大内義興ノ推舉ニ依リ、越前守護朝倉孝景ニ、白傘袋及ビ毛氈鞍覆ヲ用フルヲ許ス、

御法名惠空

御院號安養院

〔應仁後記〕

下 斯波今川於遠州軍事、付朝倉出身事

○上 斯波家ハ角成果テ、有テモ無キカ如クナルニ、又彼家ノ被官人朝倉太郎左衛門敏景ト云者ヲ越前ノ守護代セサセ置カレケルニ、此敏景應仁ノ亂後文明ノ比、時節ヲ見合セ、公方家ノ味方ト成テ、主君斯波家ヲ押除テ、越前國ノ守護ト成リ、代々公方エ忠戰ノ功ヲ立ツ、其後公方家ニテ、日本六十餘州ノ大名守護都合六十六人ノ數ヲ定ラレシ時、陪臣ヲモ入ラレケル程ニ、此朝倉ヲモ其數ニ入ラレタリ、サレ共京童共ハ、猶香箱ハリト異名シテ笑ケルトソ聞ヘシ、カ、ル凡下ノ者ナレ共、果報ヤ善カリケン、度々ノ忠戰功積テ、永正十三年夏六月、當時ノ管領代大内介義興ノ吹舉ニ依テ、敏景カ彦孫朝倉彈正忠孝景ニ、白キ傘袋、虎皮鞍覆御免許有リ、剩後ニハ次第ニ經上テ、御相伴衆ニ加リケル、誠ニ君臣盛衰ノ運、榮枯一時ニ變易セリ、

孝景相伴衆ニ加ヘラル

〔朝倉始末記〕

一 朝倉家由來之事

其嫡子孫次郎孝景、明應二年癸丑十一月廿二日ニ誕生、後又彈正左衛門ト名乗ル、舍弟ハ右兵衛大夫景高ト號ス、永正九年壬申三月、義種將軍江州へ發向シテ、六角佐々木氏綱ト合戰止時ナシ、然處ニ將軍遂ニ敗績シテ、甲賀へ出

近江出奔
中ノ義尹
ヲ援ケテ
六角氏網
ヲ破ル

忠功ヲ賞
セラル

永正十三年六月是月

三四六

奔、氏綱勝ニ乗ツテ、將軍ヲ追圍事稻麻ノ如シ、孝景越前ニテ此事ヲ聞、此度忠義ヲ立スンハ、先祖ノ佳名却テ空シカルヘシトテ、永正十年三月下旬、猛軍ヲ引進發シテ、大ニ佐々木ト競争ス、氏綱一戰ニ利ヲ失テ、忽勢州へ敗北スルカ故ニ、同年五月三日、將軍既ニ飯京、孝景ヲ召シテ、今般絶倫ノ至忠、拔萃ノ巨功多謝、甚慶何者カ又其右ニ出シ、是ソ我輩カ股肱腹心タルヘケレト、深ク感賞シ給ヒツ、同十三年六月五日、白傘袋并毛氈ノ鞍覆ヲ御免セラレテ歸陣アル、上略

〔足利季世記〕

舟岡記

近江ノ九里被誅事

○上略、六角高頼子定頼ト謀リ、九里備前守ヲカクテ大内殿在京十二年ノ殺スコトニカ、ル、八年九月是月ノ條ニ見ユ、カクテ大内殿在京十二年ノ間、都ノ掟モ無私、四海ノ浪モ治リケル、諸人家ノ本意ヲ達シ、悦ヒケル中ニモ、永正十三年六月、朝倉彈正左衛門教景、大内殿ノ吹舉ニテ、白傘袋、鞍覆ヲ御免アリ、後ニハ家ニタヘシ御相伴衆ニ加リケル、是ハ武衛ノ被管也ケルカ、去ル比ヨリ日本六十六國ノ大名ノ數ニ入ケル、宇都宮ノ被管ニ芳賀、結城ノ被管ニ多賀谷、千葉ノ被管ニ原、武衛ノ被管朝倉、一度ニ六十六人ノ中ニ入ケレトモ、京童ハ猶ヲ合子ハリト申シケル、

〔朝倉系圖略〕

初景秋

朝倉彈正左衛門尉

貞景

朝倉彈正左衛門尉

孝景

朝倉彈正左衛門尉

○中略 同十三年六月五日、白傘袋并毛氈

鞍覆御免御内書頂戴、

義景

朝倉左衛門督、左京大夫、母武田中務大輔女、

勸進僧某、山城蓮華王院ヲ修造セントシ、諸國ニ募緣ス、

〔曼殊院文書〕

○山城

勸進沙門某敬白

請特蒙十方檀那之御助成、致洛陽東山蓮華王院修造之狀

夫一天之安危者、依貴佛敬神信不信、四海之盛衰者、酬寺院精舍興廢、爰後白河院法皇之爲御願被建立三十三間之梵閣、中尊形像者、狛僧正行慶御作也、其外巧匠刻彫者而被安置一千一體之千手觀音、凡觀世音者、娑婆有緣之薩埵、能施無畏之大士也、一心稱名之輩、忽離七難三毒、禮拜恭敬之類、卽滿二求兩願、別而尋千手千眼之功德、枯樹生花之悲願深重也、煩惱厚重之者歸之

永正十三年六月是月

三四七

後白河法
皇ノ御願
立ニ依リ建

應仁ノ兵
癸ヲ免ル
應永ノ修
造以來堂
舍荒廢ス

永正十三年六月是月

三四八

發心、早生菩提之覺花、五穀豐登之利益廣大也、田畠耕作之族信之所念、爭不得成熟之菓實乎、然應仁丁亥(元年)之一亂、洛中洛外諸堂大略雖令燒失、當堂一字無恙、本尊護持之奇特歟、叡願無雙之功力歟、誰人不悅之乎、雖然應永年中修營以來、送一百餘年星霜之間、堂舍傾斜、墻壁朽損、寄附之庄、蘭諸國押領之條、無修造之力、依之設一紙短疏、扣萬人門戶、不耻一粒半錢之小財、不憚寸鐵尺木之微志、可預奉加者也、與力結緣之尊卑、現世盛長者布金果報、當生乘觀音來迎之花臺者也、仍勸進之狀如件、

永正十三年六月日

丹波守護細川高國、同國蘭部村ニ禁制ヲ掲グ、

〔蘭部村天滿宮文書〕波〇丹

禁制

丹波國蘭部村

- 一 軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
- 一 伐採竹木事、

右條々堅令停止訖、若於違犯輩者、可處嚴科者也、仍下知如件、

永正十三年六月日

右京大夫(細川高國)源朝臣(花押)

豊原統秋
ノ子ヲ同秋
直ノ秋ノ跡
トシテ勤
仕セシム

七月辛巳朔

七日、丁未、七夕御樂、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲三十九所收 七月六日、むす秋子を(同)秋のあとのふんよまゝとて、まいらるゑる、あう秋とみやうしさゝむる、あその御うくよとしめてまよはするよし申、

觀世信光歿ス、

〔觀世家過去帳〕〇觀世左近氏所藏

潮音院梵譽大雅宗松居士永正十三丙子年七月七日、觀世小次郎信光

〔翰林葫蘆文集〕六

觀世小次郎畫像法名宗松、號太雅、

本朝以優鳴者觀世小次郎信光、故音阿之第七子也、音阿者夏於普廣、慈照兩相公、尤見愛幸者也、伎究其妙、王侯之第、嘉賓之燕、登歌臺兮當舞殿、擊神頭兮早鬼面、或作武夫桓々之貌、或爲婦人啾嚶之姿、於須臾頃千態萬狀、令觀者喜怒哀樂之情動蕩于其內、天下奇觀也、信光克傳父伎、然而推讓於爲父之後者而不爲焉、但以擊鼓爲之能、笛韻既揚、大小鼓聲應之、手如電掣、一鼓再鼓、衆音皆絕矣、人皆眩耳目矣、加之爲人有才智、而能問本朝神代以降之故實、復窺和

永正十三年七月七日

三四九

法名
周麟作信
光畫像讚
元重ノ七
男

鼓ノ役ヲ
勤ムノ故
和漢ノ採
事ヲ探リ
數番ヲ新